
テイルズオブエクシリア “もう一人のマクスウェル”

魔帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブエクシリア “もう一人のマクスウェル”

【Nコード】

N0269X

【作者名】

魔帝

【あらすじ】

ある日の夜、一人の男の子が捨てられた。その男の子は水の精霊ウンディーネに拾われ、人間として実体化した精霊の主、ミラマクスウェルと共に育った。

これは、その男の子の、ある信念を貫く物語である。

始まり（前書き）

修正いたしました。

始まり

この世界、リーゼ・マクシアでは人間と魔物、そして遍く精霊たちが存在していた。

人間は、脳の『ゲート靈力野』と呼ばれる器官から、世界の根源エネルギーである『マナ』を発することができ、マナを糧として生きる精霊は、人間からマナを受け取り、その見返りとして術を発動させる。これが精霊術の仕組みであり、この共生関係こそが、リーゼ・マクシアの文明の根源を担っていた。

即ち、この世界では人間と精霊が共存し、初めて生きていける世界なのだ。そして精霊は実体化しない限り、決して人の目には映らない。そしてそれらの精霊を束ねるのが、元素を司る精霊・マクスウェルなのである。



夜、とある山の奥深く。そこに一人の男の影があった。その男の腕の中には、布で包んだ何かが収まっていた。

「……この辺りなら」

男は辺りを見渡し、近くの木の幹に近寄った。そして布包みをそっと置いた。

「……許してくれ。この私を、許してくれ」

男は布包みに泣きそうな声でそう言い、やがて誰にも見つからないよう立ち去って行った。

やがて風が吹き、包んでいた布の端が捲れ、中身が露わになった。その中身は、立ち去った彼と同じ人間の赤子だった。



時は、少し進み、朝日が山を照らした。その照らされる山の中を、蒼い美しい女性の姿をした精霊が彷徨っていた。名はウンディーネ。水の精霊で、この世界では四大精霊と呼ばれる高位の存在である。そして彼女の腕の中には、産まれたばかりの様な女の子の赤子を抱いていた。金髪と茶髪が混じった様な髪で前髪には緑の髪がメッシュ状になっている、瞳の色は紫で、その名はマクスウェル。人間の元素を元に産まれた存在である。

ウンディーネはマクスウェルを外に連れ出し、散歩をしていた。

やがて大きな木の幹の傍まで辿り着いた。すると、ウンディーネはその木の幹に布包みが置かれているのを見つけた。

ウンディーネは不思議に思い、それに近付き、驚愕した。

「人間の赤ん坊……!？」

ウンディーネは赤子を抱き上げ、その赤子の顔を見た。ちょうど赤子は目を開き、ウンディーネの顔を見つめた。赤子は黒髪に紅い瞳だった。

「可哀想に……。捨てられたんですね」

「あー……」

「あら……?」

同じく抱いていたマクスウェルが黒髪の赤子に興味を持ったのか、その小さな手で黒髪の赤子を掴もうとしていた。

「ミラ……?」

ミラとはマクスウェルの名前である。

「あー……」

「ふふっ……そうですか。では連れて行きましょう」

ウンディーネはまるでミラに命じられたように、黒髪の子を連れて行った。

★

それから五年の歳月が経った。

二人の赤子は共に育った。

ミラ・マクスウェルは、その存在故か、人間の子とは違い、食事をせずにもすくすく育ち、思考も五歳の子供とは思えない程だった。一方、黒髪の赤子は、ウンディーネに名前を授かり、四大精霊がミラと共に育てていった。

マクスウェルを信仰する村人たちに食糧や衣類等を貰い、その自らの手で人間と同じように育てていった。

名はイヴ・マクスウェル。ミラ・マクスウェルの家族であり、友であり、剣であり、盾である。

★

「待てよ、ミラ」

「遅いぞ。もっと早く歩けないのか？」

マクスウェルを信仰する者が住む村、ニ・アケリア。そこは緑豊かな

な村であり、人々の記憶から忘れ去られた村である。しかし、住むには問題無く、作物や家畜等も豊富で、豊かな村だった。

その村の中に、二人の子供が歩いていた。

先に歩いている、金と茶の長い髪で長いはね毛の様な緑の髪を持つ女子はミラ・マクスウェル。この村が信仰の対象である、マクスウェルの人間の姿である。

そしてその後ろを追い駆ける黒髪の男子はイヴ・マクスウェル。ウンディーネが拾い、ミラと共に育てた子である。

「四大の力を使って歩いてる奴に、何も使わないで追い付けて、無理難題言うな。俺はまだ子供だぞ」

「五年も共に過ごしておいて、追い付けないとは……」

「俺、ただの人間。お前、精霊の主。お分かり？」

「……どういことだ？」

「身体のできが根本的に違うんだ。俺が小石程度の土台なら、お前は山程の土台なんだ」

「……つまり、私とお前では元々の身体が天と地の差という訳か」

イヴの説明にやっと納得したのか、うんうんと頷いて、また歩き始めた。……先程と同じペースで。

「だから話し聞いてたか!？」

「聞いていた。同時に理解した」

「なら何で？」

「私に合わせようとしていれば、何れ力が付くだろう」

「……」

ミラの説明にイヴは頭を抱え、大きな溜息を吐いた。

「はいはい……。ご協力どうもありがとう」

「大したことは無い」

イヴはミラが合わせるのを諦め、ミラに合わせる事にした。

こんなやり取りは日常茶飯事であり、村の人々は温かく二人の成長を見守っていた。

「はあ……この分じゃ、夕食のおかずを手に入れる前にくたびれそうだ」

「だから何時も言っているだろう。精霊の力で補ってもらえば問題は無いと」

イヴはミラと共に過ごしてるからと言っても、あくまで人間。当然、睡眠や食事は必要。だからイヴは己で食料を手に入れ、調理し、栄養を摂取しているのだ。

ミラはイヴも精霊の力で補えば良いと毎日のように言ってくるが、それをイヴはいつも断っている。

「そんな生活を続けてれば、精霊の力無しに生きていけなくなるだろう」

「何を馬鹿な事を。私は精霊の主だぞ。力を失う事は無い」

「分かんないぞ。世界は何が起こるか分からないんだ。いくら精霊の主でも人間界では完璧じゃないんだろ？」

「それは……そうだが」

「だから俺は人の手だけで出来る事は極力人の手だけでやる。といっても、まだ子供だからできる事は少ないけどさ」

イヴはミラと共に育った故か、思考も子供とは思えない程成長していた。

他にも、霊力野も発達しており、特に闇の精霊術に関しては、人並み以上の力を持っている。

「それにミラだって食事でもしてみろよ。焼き魚とか刺身とか美味

しいぜ？」

「ふむ……。では、精霊の力が使えなくなった時に、そうしてみよう」

「いや、別に今でも良いじゃん」

流石は精霊の主。考えが違う。

話しは変わるが、イヴの好物は魚である。それ故、食事の献立には必ずと言っても良い程、食卓には魚料理が並ぶ。
今日も、村に流れる川に釣り糸を垂らしていた。

「そんな事をせずとも、ウンディーネに任せれば……」

「本当に話し聞いてたか？ 力は使わずに取るんだよ」

「面倒な……」

岩場に座りこんで釣り糸を垂らすイヴの隣で、糸の先に付けられた浮を同じく座りこんで眺めているミラ。

そんな二人の姿を、村人は崇めながらも温かい目で見ていた。

「おっ！ かかった！」

浮が沈み、釣り糸が大きく動き出す。

イヴは引っ張られるかと大きく踏ん張り、竿を背負い投げの要領で引っ張った。

「よーし！ 大物頂き！」

ビチビチとはねる魚が水が入った籠に入れ、また新しい餌を付けようとした。

「……………」

「…………ミラ？」

ミラは両頬に手をついて、イヴの手を見ていた。

「…………やってみたいのか？」

「やらせてくれるのか？」

「お、おう……………」

ミラの早い反応に驚きつつも、竿と餌をミラに渡す。

「んじゃ、まずこの釣り針に餌を付けるんだ」

「どうやればいい？」

「刺す」

「こうか？」

イヴの半分冗談めいた説明に、餌を摘み、針にぶすりと刺した。因みに、餌は生きたミミズである。

「……………」

「次はどうすればいい？」

「……ああ、竿を握って川に糸を垂らして」

こんなに可愛い女の子なのにと、少しばかり残念に思いながら、イブは説明の続きをし、やっとこさ釣りをしている場面まで辿り着いた。

「あとはこのまま魚が餌に喰い付くまで待ってれば……」

「お、おい！ 何かが竿を引っ張るぞ！」

「早っ!？」

投げ入れた瞬間、いかにも大物がかった。これもマクスウェル故の幸運か。

「よし、ならそのまま竿を引っ張れ！」

「くっ！ この魚風情のくせに生意気な！ ウンディーネ！」

「へ？」

ミラが水の精霊の名を口にした瞬間、糸を中心に渦が出現し、それがだんだん大きくなり、終いには竜巻のようになった。そしてそれが収まると、空から川の水と大量の魚が降ってきた。

「見ろイヴ！ 大量に釣れたぞ！」

「……これは、釣ったて言わないんだよー！ー！！」

その後、イヴは精霊の主をその場で正座させ、力を貸したイヴの母親的な存在のウンディーネも正座させ、一時間に渡るお説教を行った。

打ち上げられた魚も全て元に戻し、再び魚を釣り上げ、二人は住んでいる社へと帰った。



夜、イヴは自分の食事を用意し、黙々と口に運んでいた。
今日釣った魚は焼き魚にして食べている。

「むう……。まだ怒っているのか？」

「怒ってない。この魚の味を噛み締めてるんだ」

「なら何故背を向ける？」

「それはお前が俺の後ろにいるからだ」

「仕方が無いだろ。お前が部屋の隅で隅を向いて食べているのだから」

いつものイヴなら、ミラの祭壇の近くで食べているのだが、今日は何故か隅っこで隅を向いて食べていた。

「今日はこうした方が運氣が上がるんだ」

「そうなのか？ では私もここに座るとするか」

ミラはイヴの言葉を真に受け、イヴの隣にピトリとくっついて座った。

「……あのさ、ミラ」

「何だ？」

「俺が何でお前の方を向かないのか教えてやろうか？」

「……？ 運氣が上がるからではないのか？」

イヴは箸を動かす手を止め、自分の眉間を押さえた。

「ミラ……服は？」

「外で乾かしているが？」

今日着ていた服は昼間の事件でずぶ濡れになり、外に干している。

「そうじゃなくて……代えの服は？」

「アレ一着だが？」

「……シルフ！ イフリート！」

イヴは風の精霊と火の精霊を呼んだ。すると後ろに小さい子供の姿

をしたシルフと、燃える岩石で出来た肉体を持つイフリートが現れた。

『何だい？』

「シルフ！ 何で服を乾かさない！ イフリートも！」

そう、普段は精霊の力でミラの身嗜みなども整えている。しかし何故か今日は服を乾かさないで、干している。そのお蔭でミラは先程から下着一枚なのである。これが、イヴがミラを見ない原因である。五歳のくせに、こういった事も意識し始めているイヴである。

『だって精霊の力ばかりに頼ってちゃいけないんだろ？』

『左様。昼間、お主がそう言ったではないか』

「だからと言って何でこれなんだ！？ 俺は男だぞ！？」

『ガキンチョが何言ってる』

『お主らはまだ子供ではないか』

そう言っているシルフとイフリートは笑っていた。厳密に言うと、イフリートは口が無いので、シルフが笑っていた。

「お前等ワザとだろ！ 絶対俺をからかってるんだろ！」

『何言ってるんだよ。僕たちがそんな事するワケないだろ』

『お主の考え過ぎだ』

「じゃあ何で笑ってんだよ!？」

『だってそっちが可笑しな事を言うから』

そんな大精霊たちの態度に、イヴは本気で頭を抱え、ミラの今後を心配するのであった。

——せめて大人になった時は服を着てくれよな。じゃないと俺、付き合えないぞ。

ミラ、というより自分の心配をしていた。

「一体どうしたと言うのだ？」

「何でも無い。俺は食ったらもう寝るからな」

「そうか」

イヴは大急ぎで食事を片付け、布団を敷いて眠りに付いた。

翌朝、ウンディーネに説教を喰らっていたイフリートとシルフの姿を、イヴとミラは目撃した。

幼き日々（前書き）

修正いたしました。

幼き日々

ミラとイヴは成長し、今は少女少年となっていた。

そしてミラはマクスウェルとしての使命…世界を守る使命を果たすべく、日々世界を見渡していた。

そしてイヴも、ミラの手伝いが出来ないかと考え、闇の精霊術を基本とした戦い方を、精霊達から学び、ミラの為に強くなろうと努力していた。

「イヴは今日も訓練か？」

『はい。いつかミラの力になりたいと言って、毎日練習していますよ』

ウンディーネがミラにイヴの様子を聞かせた。しかしミラは何処となく浮かない顔をしていた。

『どうなさったのですか？』

「いや、何だろうな、この感覚は……。何かこう……。穴が開いた様な……」

ミラは胸に手を当てて考え出した。

——分からない。この拭えない嫌な感じが離れない。

ミラはこの正体が分からなかった。一度、イヴが昔言っていた様に、精霊の力が無くなったのかと思ったが、力はちゃんと使えた。

『もしかして、寂しいではありませんか？』

「寂しい？ それは何だ？」

『そうですね……。ミラはイヴがいますか？』

——どう思う？ イヴがいますか？……。

「分からないな」

『そうですか……。では、イヴがいなかったら、どう思いますか？』

——いなかったら？ それは……。

「何だ？ この感じ……。胸が締め付けられるような……」

『それが寂しいと言うものです』

「これが……？」

『はい』

ウンディーネの言葉に、ミラは考え込んだ。

ミラは人間の心や感情について、興味はあるがあまり共感することはない。自分はマクスウェルで他は人間、という概念しか持っていない。だから感情や心などには何の関心も無かった。

「ふむ……。良く分からないが、これが寂しいと言う事か」

『恐らくは』

——そうなのか。しかし、寂しいとはどういう意味なのだ？

感情以前に言葉の意味を知らなかった、ミラであった。

『そういえば、イバルという巫子が出来ましたね』

「ん？ ああ、そうだったな。だがアイツは少々煩すぎるイヴの様に落ち着きが欲しいところだ」

巫子と言っても男である。この場合の巫女は、ミラの世話や言付けを守る者の事を指す。

「それに、イヴの事をとやかく言う。お前は大精霊じゃないだの、男がここに住み着くなだの言う。根は悪い奴ではないのだが……」

『良いではありませんか。その方が賑やかになります』

「別に必要無いのだが」

ミラには賑やかな生活などは不要である。普段は瞑想などばかりして過ごすので、そう言った事は必要ないのだ。

「あゝ、疲れた……」

社の扉が開かれ、イヴがタオルで汗を拭きながら入ってきた。

『おかえりなさい』

「ただいま。まったく、イフリートのしごきは厳しいよ」

「そうなのか？ 確かに、少し固い奴だが……」

「ああ。表面と同様に固かった」

イヴはドカッとベッドに座り込み、グラスに水を注いでグイッと飲みほした。

——何だ？ イヴが戻って来たら胸のモヤモヤが消えた……？

ミラはイヴが戻ってきたことで、先程までの感覚が消え失せていた。

「ん？ どうした？」

「い、いや、何でも無い」

「そうか？ まあいいや。じゃあそろそろ村の農作業を手伝ってくるわ。イバルもきそうだし」

イヴは帰って来るなり、道具を持って外に出ようとした。

「も、もう行くのか？」

「ああ。じっちゃんと約束してるしな」

「そうか……」

「じゃ行ってくるわ」

「あ、ああ……」

イヴはミラに手を振って村の方に向かった。
ミラは出て行った扉をジッと見つめていた。

『……大丈夫ですか？』

「ああ……。問題無い」

ミラは祭壇に座り、瞑想の体勢に入った。

——忘れよう。瞑想をすれば全て消える筈だ。

ミラはまたさっきの感覚が蘇り、瞑想で消そうと試みた。が、少しは落ち着いたものの、消えはしなかった。

「ミラ様——!!」

頭に響く大声が聞こえ、その次には扉が派手に開く音がした。

「イバル……もっと静かに入って来い」

「も、申し訳ありません！ 仕事が出来る事に喜んでしまい……」

入ってきたのはイバルという、幼い少年であった。歳はミラとイヴよりも四、五年したで、長い銀髪をポニーテールに結っている。

「もう少しイヴを見習え。あいつは落ち着きがあって何でも要領よくこなす」

「で、ですがあの者は精霊でも巫女でもないくせに、この社に住み着く愚か者です！」

「だから、イヴはウンディーネが連れて来て、私と共に育った奴だ」

「そ、それは……」

「分かったな？」

「み、ミラ様がそう仰るのなら……」

ミラの言葉にイバルは渋々と言った感じで了承した。

イヴは、イバルのように思われる事は決して少なくは無い。熱い信仰者にとって、イヴは自分たちの神様に近付いた愚か者と言われる事があるのだ。それは恐らくイヴに対する妬み等からくる事なのだろうが、イヴはそんな事を受けても全く気にしなかった。

それどころか、妬みを言われる度に、ミラがどれ程慕われてるかわかり、喜んでいる程だ。

「ではミラ様！　これから部屋の掃除をさせていただきます！」

「うむ、頼む」

といっても、イヴが毎日しているので、あまり変わらない。

そんな事も露知らず、イバルはルンルン気分で掃除を始めた。



この日の作業は木材や食料を運ぶ重労働だった。この仕事は年寄り

にはキツイ仕事であった。

「悪いのお。イヴには世話になりっぱなしで」

「なんの。村の人達には俺が赤ん坊の時に色々くれたじゃんか。謂わば親孝行だよ」

「ほっほっほっ！ 十歳過ぎた子供が言いよるわい」

イヴは小柄な体系にも関わらず、鍛え上げているその体で重い荷物を持ち上げては、目的の場所へ運ぶ。

イヴはミラの手伝いをしたいと思うのと同時に、自分自身を生かしてくれた村の人達にも恩返しがしたいと、子供ながらに考えているのだ。

「そうじゃそうじゃ。イヴよ、最近ミラ様とはどうしておるかの？」

「ん？ 別にどうも。いつも通りに寝て起きて会話して修行して、帰って会話して寝ての繰り返しだけど？」

「ほうかい、ほうかい。ミラ様も大変じゃ……」

何が？ と聞こうと思ったが、このじいさんの話は変に長くなるので、イヴは聞くのを止めた。

「よっと……。じっちゃん、次どれー？」

「早いのに。ええと、次はこの積荷じゃな」

おじいさんはゆっくりと立ち上がり、高く積まれた木箱の所まで歩み寄った。

その時、いきなり突風が吹いた。それにより、荷物を固定していたロープが引き千切れ、ちょうど真下にいたおじいさんに崩れ落ちた。

「じっちゃん!!」

イヴはおじいさんへ駆け付け、手を伸ばした。そして、積荷は山と化した。

★

「マクスウェル様!!」

社に、一人の女性が駆け込んできた。ニ・アケリアの住人だった。

「何事だ!? 勝手に社に入るな!」

イバルがその女性の前に立ち、仁王立ちした。

ミラもただ事でない事が分かり、瞑想を止めて女性を視界に入れた。

「イヴが……イヴが積荷の下敷きに！」

「何っ!？」

女性の言葉を聞いた瞬間、ミラは社を飛びだし、シルフの力を使って村へと飛んで行った。



ミラが村に到着した時、イヴはまだ積荷の下敷きのままだった。村の若者たちが大勢駆け付け、積荷を退かそうとしていたが、数が多く、中々イヴの姿が出てこなかった。

「イヴッ！」

「ま、マクスウェル様!？」

ミラは降り立ち、積荷を風で吹き飛ばした。

そして積荷の下からは意識を失い、頭から血を流しているイヴが出て来た。

「イヴッ！　しっかりしろ！」

ミラは駆け寄り、イヴを抱き上げた。

「イヴが出て来たぞ！」

「すぐに治療の用意をしろ！」

ミラには癒しの力が無い。それ故、イヴの怪我は村の住人に任せられない。

「頼む！　イヴを助けてくれ！」

「言われなくても助けますよ！　イヴは俺達の息子みたいな者ですから！」

その人物はイヴを好いている人物だった。もしこの村の住人が全員イヴを妬んでいたとしたら、イヴは助けてもらえなかっただろう。

イヴは運ばれ、丸一日治療を受けた。

目を覚ましたのはそれから三日後だった。



イヴが目を覚まさない間、村の人々はイヴの為に色々と看病や食べ物を与えたり、薬を与えたりと尽くしてくれた。

だが、イヴを妬む者たちは、マクスウェル様に近付いた罰だとか、偽善ばかり行っていた報いだとか、終いにはこの機にイヴを始末してしまおうと考える輩もチラホラといった。

彼らはマクスウェルを熱く信仰し過ぎているからか、周りが見えなくなっていた。

しかし、イヴを思う村の人々は必死でイヴを看病し、イヴを守り抜いた。

そしてイヴは目覚めた。

絶望と共に……。

「……え……?」

「イヴちゃん!? 起きたのね!?!」

ちょうど村の女性が看病している時にイヴは目覚めた。村の女性はイヴが目覚めた事を皆に報告しに外へと出て行った。

「……………！」

イヴの様子は何処か変だった。まるで恐怖と絶望に埋もれた様な表情だった。

「イヴッ！」

家の扉が慌ただしく開かれ、ミラが入ってきた。

「イヴ！ 目が覚めたのか！？」

「……………ミ、ラ？」

「ああ、私だ！ そうか、治ったんだな。お前は積荷の下敷きになつて——」

「何処だ……………ミラ……………？」

「……………何？」

「何処にいるんだ……………？」

イヴは焦点の定まらない目で、辺りを見渡していた。そして手は何も無い空間を彷徨っていた。

「お前……まさか……」

「何にも……見えない……真っ暗だ……」



数日後。

イヴは視力を完全に失い、無気力にただ生きていた。

あんなに元気で笑顔が溢れていたイヴの表情は、今では何も感じられなくなってしまっていた。

視力だけならば、イヴの性格上まだやれると頑張っていたのだが、もう一つ、イヴにとって大切なものまで失った。

それは精霊術だった。イヴの霊力野が機能しなくなり、マナを発する事が出来なくなってしまったのだ。

まだイヴは幼い。そんな彼が視力と精霊術を失えば、未来は無いと言っても過言ではないだろう。

村の人々は、イヴを元気づけ、せめてまた笑ってくれるようにした

が、空元気で苦笑してくれるほどにしかなかった。

そして、ミラにとっても唯一の存在が消えてしまう事になった。

「……なんだと？ もう一度言ってくれ」

「俺はもう……社へは帰らない」

「なっ……！？」

イヴの突然の言葉。流石の精霊の主でも驚愕した。

「何故だ！？ 視力の事とか術の事は私達の、精霊の力を使えば何とかなる筈だ！」

癒しを司る精霊も、この世界には存在する。その精霊の力を借りれば、霊力野はともかく、視力は何とかなるかもしれない。

だが、イヴは首を振った。

「俺が村で看病してもらってる時、分かったんだ」

「何をだ？」

「どれだけ俺が妬まれているのかを」

「それか。安心しろ。それはほんの一部の奴らだけだ。他に人達は皆……」

「分かってるよ。それに、俺が妬まれるのはそれ程ミラが慕われてるって事だって思ってる」

「なら何故……」

「その妬みが、何時しかミラ自身にも矛先が向き始めてるんだ」

「……どういう事だ？」

イヴは村で過ごしている内に、村の人の声を聞いていた。その中に、イヴを最肩するミラという声を聞いてしまった。

我々には何もしてくれないのに、何故あの子供の事になると自ら出てきて助けるんだ。

我々が事故にあってもマクスウェル様は御自ら助けて下さらない。

そう言った声がイヴの耳に入ったのだ。

このままではミラに不信感を向けられてしまうと感じたイヴは、ミラとの関係に距離を置く事に決めたのだ。

「そんなのは気にしないでいい。お前は私と共に育ち、共に学んだ。精霊の主であろうと、お前は特別な存在なんだ」

特別：ミラはその特別の意味を理解していなかったが、それでも心のどこかではそう感じていた。
それがどういった特別なのかは定かではない。

「それじゃあ駄目だ」

「何故だ？」

「お前はマクスウェルだ。世界の全てを平等に守る存在だ。たかが共に育った人間を鼻屑目で見るなんてこと、許されないんだ」

「その様なこと……！」

「けど……そう思ってもらえて、嬉しかったよ」

「……！」

怪我をしてから初めて見せてくれた笑顔。その笑顔に、ミラは胸が締め付けられる感覚に陥った。

「ミラ。これから俺達は別々に生きるんだ。お前はマクスウェルとして、俺はただの人間として、別々に道を進む」

「そんな……」

「これはお前の為でもあるんだ。だから、な？」

イヴはミラの頭に手を置いて、優しく撫でた。その光景は、兄が妹を慰めるようだった。

「……お前がそう言うのなら、そうしよう」

「ありがとう、ミラ。じゃあこれをあげる」

イヴは首にかけている首飾りを外した。深い蒼をしたクリスタルのような宝石が取り付けられた首飾り。これはイヴが拾われた時、イヴを包んでいた布の中にあった物だ。

「別々に生きるけど、俺との思い出は忘れないでほしい」

ミラはネックレスを受け取り、少しの間それを見続けた。

「……驚いたな。今までお前はこれに触らせてもくれなかったではないか」

「そうだったっけ？ ああもう、ミラの驚く顔を見たかったな」

イヴはまた笑顔を見せて頭をかいた。

「……ふふ。ありがとう。お前との思い出は忘れはしない」

「……そっか。じゃあもう行った方が良い。ずっとここに居ちゃあ、意味が無いしさ」

「ああ。……元気だな」

「ミラこそ」

イヴとミラはそこで別れた。

これが、精霊の主のマクスウェルと人間のイヴ・マクスウェルとの、最期の会話だった。

この数年後、村に魔物の群れが襲いかかった。

ミラが村に駆けつけた頃には、魔物の姿と、イヴの姿は無くなっていた。

村の話によると、イヴは魔物と共に光りに呑みこまれたそうだ。

黒衣の旅人、一人の生存者（前書き）

またまた修正。

ランザとミラの会話に矛盾がありましたので、それを修正いたしました。

黒衣の旅人、一人の生存者

ア・ジュールという国の辺境の地、誰にも覚えられていないとある村。そこは人の笑顔溢れる場所だった。

しかし、その村に、災いが降りかかった。突如降りだす豪雨。不作になる作物。そして襲いかかる魔物の群れ。

村は一斉に立ち上がり、必死に魔物と戦ったが成果は出ず。とうとう滅んでしまった。

元々精霊の加護が無い村だったので、あそこまで賑わったのはその村の人間の努力による賜物だった。

そして、その村跡に足を運ぶ青年が一人。姿は黒い髪に黒いロングコートに身を包み、左手には黒い鞆に収まった長刀を持ち、黒いサングラスをかけていた。

その青年は辺りを見渡し、そして何かを見つけた。その場所に足を運び、やがてその正体が見えた。

一人の少女だった。長い赤髪の女性で、ちょうど青年と同一年ぐらいだった。

彼女はまだ生きていた。怪我も外から見ると限り少なく、気を失っているようだった。

そんな彼女を見下ろす青年は暫く考えた後、青年は彼女を担ぎ、村から出て行った。

★

夜のア・ジュールのイラート間道。ハ・ミルという村とイラート海停という港を繋ぐ道である。

その場所に、青年と一人の女性の姿があった。

青年は火を起こし、肉を焼いており、女性はまだ意識を失っていた。が、手当はされている様で、青年は悪い人間ではないようだ。

「んっ……」

女性が動いた。

「……ここは」

「イラート間道だ」

女性の呟きに青年が答えた。

「……ッ！ 村は！？」

女性は跳ね起き、村の事を思い出したようだ。

「村は死んでいた。生きていたのはお前だけだ」

「そんな……」

彼女は酷な事実に関顔を絶望の色に染めた。

「外から見える箇所は手当てしておいた。まだ痛む所があるのなら言ってくれ」

「……貴方が助けてくれたの？」

「助けた、か。ある意味、助けない方が良かったかもな」

青年は別に自分の食料が無くなるとか、そう言う事は思っていない。ただ、知り合いが全員死んで、自分しか生き残れなかった事に潰されていくかもしれないことを言ったのだ。

「……いいえ、大丈夫よ。ありがとう」

「そうか……」

青年は再び焼いている肉に目を移した。

「私はカレン・マリエーゼ。助けてくれてありがとう」

「俺はランザだ」

青年の名はランザ。珍しい名前だったが、そんな人がいてもおかしくはないので、カレンは別段気にしなかった。

「貴方、これからどうするの？」

カレンはこの先の事を聞いた。

「そうだな……。取り敢えず、明日ハ・ミルに行って、そこでお前を引き渡す。それが駄目ならば、そこで必要な物を買ひ揃え、何処かの街に向かうかだ」

「そう……」

「……一緒にいたいのか？」

正直なところ、村を失ったばかりなので、少しでも心強い人といったという気持ちもない訳でもない。
そのハ・ミルに住むのも良いかもしれないが、よそ者をすぐに受け入れて貰えるかどうかは分からない。

「貴方、強いのか？」

「少なくとも、旅は出来るな」

「その長刀は？ 誰にでも扱えそうな武器じゃない様な気がするけど……」

ランザの横に立て掛けてある長刀は、どう見ても特注の様な作りで、全てが黒く、柄は龍の口から刃が出ている形だ。それに、長刀はその名の通り長い刀で、扱いづらい武器なのだ。ランザを見る限り、武器はそれしか見当たらない。

「ただのカッコつけかもしれんぞ？」

「それと、冗談を言ってると思うのだけれど、貴方、無表情よ？」

そう、ランザは冗談めいた言葉を口にはしているが、その顔は無表情に近かった。

「表情ね……。もう忘れてしまったよ」

「え……。？」

「昔はこれでも笑っていたんだが、ある時を境に感情を忘れてしま

った。今はそれを再現しようとした、謂わば疑似感情だな。心では何も感じてはいない」

サングラスの向こうでは、一体どのような眼をしているのだろうか。カレンはそれを知る術を持っていなかった。

「そう……」

「ま、先ずは食え。じゃないと回る頭も回らん」

ランザは焼けた肉を葉で包み、カレンに渡した。

「美味しそう……」

「美味しいさ」

「何の肉かしら？」

「ボア」

「え……？」

ランザのその言葉に、カレンは時を止められた感じがした。

「ボア……？ そんな動物いたかしら？」

「まあこの辺りには生息していないが、別の場所には良くいるだろう」

「いるって……魔物のボアならいるけど……」

「だからそれだよ」

つまり、ランザはカレンに魔物の肉を喰わせようとしたのだ。一種の虐めである。

「魔物を食べれる訳ないでしょ!？」

「何言ってるんだ？ こんなにも美味しいのに」

そう言ってランザはボアの焼き肉に噛みついた。

「信じられない……。他には無いの?」

「後は……アックスビークのもも肉と手羽先と、サラダのサンドイッチしか……」

「サンドイッチをちょうだい」

カレンは人間の食料を頂くことにした。

ランザはリュックの中からサンドイッチを取り出し、カレンとエレンの分を渡した。

「……………」

カレンは肉が入っていない事を確認し、一口食べた。その味は拔群の様だった。

「美味しい……。これ、貴方が作ったの？」

「ああ。トマトにプチプリの葉を挟んで……」

「プチプリ!？」

どうやらランザの主食は魔物のようだ。

魔物を食べてしまったカレンは、魔物を喰らった嫌悪感とあまりにもの美味しさに戸惑った。

「ボアの肉も食べるか？」

「……………頂きます」

どうやら美味しさに勝るものは無かった様だ。カレンは魔物の美味しさに目覚めてしまった。



朝日が昇り、二人は目を覚ました。朝食を食べ、出発の準備を終えた。

因みに朝食も魔物コースだった。

「ハ・ミルまではどのくらいで着くの？」

「昼過ぎには到着するだろ」

「ハ・ミルって、ナップルが特産だったような……」

カレンはハ・ミルがこういった街だったか、記憶の中から掘り起こした。

「うん、そうよ。これでやっと人間の食べ物にあり付ける」

カレンはどうやら早く人間の食べ物を食べたいようだ。いくら美味しくて、やはり人間の食べ物が良いらしい。

「確認しておきたいのだが、カレンは戦えるのか？」

「精霊術なら扱えるわ」

「リアルオーブは持っているか？」

リアルオーブとは、戦いの中で経験を積み、自らの身体能力を向上させる石のことである。

「持っていないわ」

「なら俺のを一つやろう」

ランザは鞆からオーブを取り出し、カレンに渡した。

「いいの？」

「二つあるからな。そっちは使っていない」

「ありがとう」

カレンはオーブを服のポケットにしまおうとして、ある事に気が付いた。

「……服が……ボロボロ……」

「ふむ……そう言えばビリビリだな。肌がまる見えだ」

「……服を買って貰ってりして……」

「別に構わんど。ここ最近、金を使う事が無かったからな。服を揃えるくらい、どうって事無い」

どうやら買い物リストが追加されたようだった。



ハ・ミルに到着。

道中、魔物に遭遇したりもしたが、ランザの活躍により撃退。

その時、カレンはランザの戦い方に驚くしかなかった。長刀は鞘から抜かず、全て打撃だけで撃退。しかも息一つ乱さず、精霊術は全く使用せずにだ。

「ふむ……。何か騒がしいな」

「ラ・シュガル軍？ どうしてハ・ミルに……」

「詳しいな」

「それでも、村の為に色々と勉強してるのよ」

ハ・ミルでは、ア・ジュール軍ではなく、ラ・シュガルという国の軍隊が動きまわっていた。

——向こうで何かした犯罪者でも追い駆けて来たのか？

ランザはそう推測し、厄介事に巻き込まれないよう、兵士には近付かざらない事にした。彼女達の批判を軽く受け流し、店に歩いた。

「すみません。彼女に合う服をください」

「いらっしや……何だ、またよそ者か」

店主の態度は冷たかった。それでは商売が出来ない筈なのに。

「何か？」

「ウチはよそ者に売るモンは無い。帰ってくれ」

店主はシッシッと、手を払って店の奥に入って行った。

「……何、あれ？」

カレンは店主の態度に怒り気味だった。

「……成程」

ランザは辺りを見渡して、何故あんな態度を取ったのかが分かったようだ。

「どうしたの？」

カレンがランザの反応に気付き、聞いた。

「ラ・シュガルの兵、よそ者。恐らく、ラ・シュガルで何か仕出かした奴らが、ここに入りこんで、それを追ってきたラ・シュガル兵がこの村に迷惑をかけている。そんな所だろ」

「私達には全然関係ないじゃない……」

カレンが文句を言うが、それが聞こえている村人は全員シラを切り、冷たい眼で二人を見ていた。

「……仕方が無い」

「ランザ？」

ランザは溜息を吐き、ラ・シュガル兵の一人に近付いた。

「ああ、スマン。滑った」

どがっ！ と、その兵士の頭を柄頭で殴った。

「な、何をする！？」

「すみません、手が滑り…おおーっと！」

どげし！ と、今度は蹴りを入れ転ばせた。

「き、貴様！？」

「あ、悪い」

「ごほっ！？」

その倒れた兵士を踏んずけて気絶させてしまった。

「すまない。俺、ハ・ミルに迷惑をかける奴らを見ると、そいつらに暴力を振るう病気なんだ」

至って無表情でそう言い放つランザは、異様な空気に包まれていた。

「おい！　そこで何してる！？」

「おっ、ハエが」

そう言いながら地面を蹴り、足元にあった小石を蹴り飛ばした。その石は兵士の兜の隙間に入り、頭に直撃した。そしてその兵士は気絶した。

「さてさて、俺の病氣、何時収まるかな？」

残りの兵士たちを睨んで不敵な笑みを作るランザ。サングラスをかけ、目元が見えない為か、その表情には狂氣が浮んでいるように見えた。

「くそっ！　大男といいこいつら何なんだ！？」

「に、逃げろ！」

兵士はだらしなく逃げ遂せて行った。それでも軍かよと、村の人達は思っただろう。

「やり過ぎじゃないかしら……」

先程までの光景を見ていたカレンは呆れていた。

「さて、店主」

戻ってきたランザは出てきていた店主に話しかけた。

「迷惑をかける元凶のことは知らないが、これで売ってくれないか？」

ランザは後ろで逃げ回る兵士を指して言った。

「……買ったらさっさと出て行けよ」

「出るさ。元々、ここには買い物に來ただけだ」

「ふん……」

店主はカレンに付いて来いと言い、店の奥に入って行った。

「ほら、早く行け。金のことなら心配無用。さっきあの兵士たちから貰ったから」

ランザは金が沢山入った袋をじゃらじゃら鳴らした。抜け目の無い奴。

カレンは店の中に入り、数分の間ランザ一人になった。

「お待たせ」

数分後、店からカレンは出て来た。

「どうかしら？」

カレンの格好は、アンダーは丈が短いスカートと一体型の黒色で、紅いロングコートに黒のニーソックスと黒のロングブーツを履いていて、絶対領域を形成していた。

「……お前もコートか？」

「そこは似合うでしょ」

「じゃあ、似合うぞ」

「無表情で言われても……」

ランザの感想に呆れるカレン。そんな事はどうでもいいのか、次の買い物に出るランザ。

「武器は……」

「ねえ、出来れば斬れる物が良いのだけれど」

ランザが武器を選んでいる時、カレンが希望を出した。

「そうか……。ならあの杖を貰おう」

ランザが指したのは、槍に似た杖だった。槍にしては短く、先端の刃の中心には紅い宝石が取り付けられていた。

精霊術も込められており、カレンの希望に一番当てはまるだろう。

——これに込められているマナ……ハンパないな。

ランザは杖の至るところを確認し、マナの強さに気付いた。

「いくらだ？」

「600Gだ」

「買おう」

ランザはお金を払い、杖を購入した。

「いいの？」

「まあその杖を試してみな」

「……？」

カレンはランザに言われ、杖を確認した。そしてカレンもマナの強
力さに気付いた。

「何これ……？」

「いいから行くぞ。店主に気付かれたら面倒くさい」

ランザは杖を見つめる二人の背中を押して店から離れた。

「服代も安かったし、良い買い物が出来た」

「貴方のお金じゃないでしょ」

「いや、俺にくれたから俺の金だ」

人はそれを奪ったという。

ランザ達は満足のいく買い物ができ、軽い足取りで街の出口に向かった。

しかし、そこではひと騒ぎが起きていた。

「出て行けよ、おら！」

「何だ？」

「アレは……！」

カレンが指した場所では、紫のワンピースを着た小さな少女が、村の大人達に石を投げられていた。

「疫病神！ あんたなんかいるからっ！」

「きゃっ……。やっ……」

少女は地面に蹲り、痛みに耐えていた。

「やめて、ヒドイことしないで。お願いだよー！」

少女の隣に浮いていた、奇妙な形の紫の小さなぬいぐるみが喋り、少女を庇う。

「助けないと！」

「……………」

「ランザ？」

助けに行こうとしたカレンを、ランザが制した。

「どうしたの？」

「俺達が向かわなくても大丈夫だ」

「え？」

ランザの言う通り、カレンが向かうよりも速く、石を投げようとした大人の腕を掴んだ少年がいた。

ランザと同じ黒髪で茶色い瞳をし、緑を基調とした服を着た少年。掴まれた大人が腕を振り払おうとしても、ピクリとも動かないところを見ると、相当な力の持ち主であることがわかる。

「大丈夫？」

少年は少女の前に行き、怪我が無いかを確認した。

そして、少年の後から、長い金と茶の髪と、アンテナのような緑の髪を持った女性が現れ、少女の様子を見た。

「……！」

その女性が現れた時、ランザの身体が僅かに反応した。

「お前達のせいであつちらは散々な目じゃ！」

老婆が少年に向かって怒鳴り散らした。

どうやらラ・シュガル兵が、一般人である人達を、ランザが来る前に傷付けていた様だ。

「ラ・シュガル軍にやられたか」

金と茶の女性がそう言った。どうやら、この件の原因は彼女達のようにだ。

「八つ当たりかよ。大人気ないな」

もう一人、少年たちと一緒に現れた、茶髪で茶色のコートと長い黒のスカーフ、そして背中に携えた大剣が特徴の男性が、老婆に向かって呆れたように言った。

老婆はキッと睨みつけたが、また大声で怒鳴った。

「よそ者に関わるとロクなことにならない！　すぐに出て行け！」

老婆はそれだけを言い捨て、自分の家へと戻って行った。他の大人たちも、各々の場所に戻って行った。

すると少女も人形と共に何処かへと走り去って行った。

「……可哀想に。何であんな小さな子を……」

「……カレン、少しの間街の外で待っていてくれ」

ランザはそれだけ言い、何処かへと足を向けて行った。

「ちょ、ちょっと!?! いきなり何!?!」

カレンの言葉を見殺して、ランザはカレンの視界から消えて行ってしまった。

「何なのよ、もう……」

カレンはランザに言われた通り、街の外の入り口で待っている事にした。



ハ・ミルの村長である老婆の家に、金と茶と緑の毛を持つ美しい女性と、茶髪の男性がそこにいた。

女性の方の名はミラ・マクスウェル。精霊の主である。

男性の方の名はアルヴィン。自らを傭兵と名のる。

「出てけ! 話す事などないわ!」

「前来た時と随分扱いが違ούνじゃね?」

村長の怒鳴り声にアルヴィンは頭をかく。

「ふん！」

「安心しろ。長居するつもりはない」

「アンタが、そんな感じのままじゃ、長居することになるかもしれないけど」

「……何が聞きたい」

ミラとアルヴィンの言葉に、村長は渋々尋ねた。

「ラ・シュガル軍の動きを知りたい。奴らは去ったのか？」

ミラが村長に淡々と尋ねた。

「ふん。ジャオ殿と黒服の男が追い払ったわ」

村長は腕を組んでイライラした口調で答えた。

「ジャオ殿？」

「それって、髭の大男か？」

ミラ達はジャオの姿を見た事があるのか、的確な指摘をした。

「そうだ。ジャオ殿がおらんだら、もっと酷い事になってたかもしれない。黒服の男には、まあそれについては感謝はしている」

「その黒服の男は、この村の人じゃないのか？」

ミラが黒服の男に付いて尋ねた。

ラ・シュガル軍に手を出したとなると、その男は変わり者かミラ達を知っているのかのどちらかだ。もしかしたら、色々と協力してくれるかもしれないからだ。

「違うわい。お前等と同じよそ者じゃ。今はもう出て行っただろ」

「ふーん。んで？ ジャオ殿の方は今はどうしてるんだ？」

アルヴィンは黒服の男にはもう会えないと分かると興味を無くし、ジャオに付いて尋ねた。

「知らんわ。そもそもジャオ殿があの子を連れて来たから災難続きじゃ。去るのならあの子も連れて行けばいいものを……。よそ者は

二度とゴメンじゃ」

村長は忌々しそうにそう言い捨て、怒りを露わにした。

「……………」

これ以上ここにいても収穫は無いと悟ったミラとアルヴィンは村長の家を出て、少女を追い掛けた少年、ジュードを待つ事にした。

「ちよいと失礼するわ。道具を買い忘れててさ。もし売ってくれるのなら買ってくるわ」

アルヴィンはそう言って離れた店の方へ足を運んだ。

ミラはその間、これからの動きを頭の中で整理し、山の景色を眺める事にした。

「随分と、浮かない顔をしているな」

「誰だ？」

景色を眺めていたミラの隣に、何時の間にか黒いコートを着た男が立っていた。

「ただの旅人さ。道具を買いに立ち寄ったまで」

「黒い服……お前がラ・シュガル兵を追っ払った男か？」

ミラは村長から聞いた黒服の男であるかもしれないと思った。

「さあ？ 俺は店主の機嫌を取っただけさ」

「そうか……」

ミラは男の顔を見ようとしたが、男はサングラスで目元を隠している。顔がよく分からなかった。

「人と話をする時に顔を隠すのは、些か失礼ではないか？」

ミラは顔を見る為にサングラスを取らせようとしたが、男は首を振った。

「悪いな。過去の事故で目が死んでなあまり人には見せられないんだ」

「そ、そうか……。それはすまなかった」

「いや、何とも無い」

男はそう言うが、無表情なのでそれが本当なのかが、ミラには分からなかった。それどころか怒っていると思いかけている。

「ああ、この顔もその時の後遺症で、心に傷を負ったというのか、表情が出なくなってるな。感情は何とか真似て作る事は出来るが、どうも表情だけはな……」

男はミラの考えを察したのか、無表情について説明をした。

「それは気の毒に……」

「いやいや。むしろ、見えなくなった事で、新たに見える景色もあるからな」

「……目が見えるようになりたいとかは思わないのか？」

「……そうだな」

男は空を見上げた。

「見えるようになりたい、とはもう思えんな」

「何故だ？　そのままでは不便だろう？」

「見えるようになって、見たい人の顔はもう……見れないから」

この時の男の声は、とても悲しそうな声だった。

ミラはその答えを聞いた時、自分も男の気持ちが分かると思ってしまった。

自分にも、もう見れない人の笑顔があったからだ。あの頃見ていた笑顔は、もう随分前に消えてしまったのだから。

「ところで、お前はこの村で何をしているんだ？　ここはもうよそ者を嫌っているぞ？」

「ああ……。ニ・アケリアという村から出て来たのでな。イル・ファンへ向かうのにここを通らねばならなかった」

「イル・ファン？　ラ・シュガル軍に追われているのか？」

「そこは何かというか……事情と言うものがあってだな……」

ミラは悩んでいた。この男は素人が見ても中々の手馴れだと分かる。ならこの男に協力してもらおうという手もある。

が、自分たちの事情にこれ以上巻き込む人を増やす訳にもいかない。

「別に深くは聞かんさ。ただ、こんなに美しい女性が何故追われているのか、少々興味があっただけだからな」

「……見えないのではないのか？」

男は目が見えないと言った。なのにミラに美しい女性と言った。女性と言う事は声などで分かるだろうが、容姿までは分かる筈が無い。

「それと、私に浮かない顔と言ったな」

「だから言っただろう？ 見えなくなることで見ることが出来るものがある」と

「それはアレか？ 超能力と言うものか？ 本で読んだ事があるぞ」

ミラは少し目を輝かせて男に聞いた。

「どうだろうな。ただ、絶対に普通の人間には見れんな」

「それは精霊でもか？」

「……難しいな。精霊が見ている世界を知らないからな……」

それは最もな事だ。人間が精霊が見ている世界を知る事は出来ないのだから。

「むう……それは残念だ」

「む、スマン」

ミラは本当に残念そうにし、男は少々焦った。

「お前は、これからどうするのだ？」

ミラは男に興味を持ったのか、男の事を聞いた。

「気の赴くままに、のらりくらりと旅をするだろうさ」

「何故旅をする？」

「それは、秘密だ」

男は笑顔を作り、ミラの方を向いた。まるで見えているかの様に、ミラの顔を見た。

「そうか。……ところで、お前は誰だ？」

「……ああ、名前を言ってなかったな」

二人は名前を言っていない事に気が付き、共に、正確にはミラだけが苦笑した。

「俺はランザだ」

「ミラⅡマクスウェルだ」

二人は握手を交わした。

「名前も聞けたし、連れも待たしている。そろそろ行く」

「そうか。……ちょうど私の共も来たな」

「また何時かな」

「会えたらな」

本当は会える事は殆ど無い。ミラは目的を果たしたら、故郷であるニ・アケリアに戻り、社に祀られるのだから。

「さっきの男、村長が言ってた黒服の男じゃないのか？」

帰ってきたアルヴィンが去っていく男を見て言った。

「恐らくな」

「いいのか？」

「これ以上巻き込む人を増やす必要は無い」

「俺達は良いのかよ……」

「お前たちは自ら乗りだして来たのだろう？」

「そうでした……」

アルヴィンは頭をかいて景色を眺め始めた。

——ランザ……何故だろうか。懐かしい感じがした……。

ミラは握手を交わした手を見つめ、その懐かしさの理由を考えたが、答えは出なかった。



「目、見えなかったのね」

「……聞いていたのか」

街から出たランザを待っていたのは、腕を組んだカレンだった。

「どうして教えてくれなかったの？」

「別に支障は無いのだから良いだろう」

「だからって、教えてくれても良いんじゃないかしら？」

「なら、目が見えない人と一緒にいて、不安にならないのか？」

「……ごめんなさい、私が悪かったわ」

ランザの言う通り、これから共に行動する人が、目に障害を抱えていれば不安でしょうがなくなるだろう。

それを危惧したランザは敢えて言わなかったのだ。

「それで、これからどうするの？」

「イラート海停からラ・シュガルに向かう」

「ラ・シュガルに？ それって、あの女の人と……」

「別に彼女とは関係ないさ。ラ・シュガルのカラハ・シャルルの領主が俺の知り合いだから、そこに行こうと言っているんだ」

「領主と？ 貴方いったい何者？」

「ただの障害者さ」

ランザとカレンはイラート海停へと歩き始めた。

カレンの決心（前書き）

ふむ……フラグ建っちゃった？

カレンの決心

夜が明け、ランザとカレンはイラート海停に辿り着いた。途中、野宿をして夜を明かした故に、慣れていないカレンは十分に休めず、心身ともに疲れ切っていた。

「だ、駄目だわ……。もう疲れて歩けそうにないわ……」

「そうか。ならそのベンチで休んでおけ。何時船が出港するか聞いてくる」

「ええ……」

本当に疲れている様で、ランザの言葉に素直に従い、ベンチに横になってしまった。

ランザはその間に船の時間を聞きに向かった。

「失礼。サマングン海停行きの船は何時出向する？」

「ああ、はい。ちょうど今、首都圏全域に封鎖令が出たので、サマングン海停行きの船しか無いんですよ。朝に最初の便がありますが、お乗りになれますか？」

「……………」

ランザはカレンの方を暫し見詰め、考える素振りを見せた。

「……もう一つの便は？」

「一時間後にあります」

「ではそれで」

ランザは切符を買い、カレンの元へ戻った。

「カレン」

「ランザ……。船は何時出るの？」

「昼前だ。そこでだ、その宿屋で時間まで一休みしようか？」

「する、します、させてください」

疲れて動けない筈のカレンは、ビシッと立ち上がり、ランザに綺麗な礼をして頼んだ。

「なら行こうか」

ランザとカレンは宿屋に入り、時間まで休む事にした。



時は少し経って、ランザとカレンが宿で休んでいる頃、三人と一匹の影がイラート海停にあった。

「……………」

「ミラ、昨日からずっとそうだけど、何考えてるの？」

その影は、ランザがハ・ミルで見かけた人物達だった。

ミラはランザと別れてからずっと何かを考えており、それが気になったジュードミラに尋ねてみた。

「うむ……。ハ・ミルで会ったランザという男なのだが……」

「ランザ……？」

「ああ、そっか。ジュードは知らないのか」

「アルヴィン？」

大剣を持ったアルヴィンがジュードの肩を抱き、ニヤつき顔でジュードに話した。

「実はな、ミラ様はハ・ミルでその男にナンパされてたんだよ」

全くもって嘘である。

「ええっ！？　それでミラは悩んでるの！？」

「ああ。どうやらミラ様はその男に興味を持ったみたいだぜ？」

あながち間違いでも無いが、そう言った興味ではない事は確かである。

「……エリーゼ」

「は、はい……」

ミラは隣にいた少女、エリーゼに話しかけた。
エリーゼは村で虐められていた少女であり、ジュードと一緒に連れて来た少女である。

「何々？ 何でも聞いてー？」

その横でプカプカ浮いているのは、紫色で口と目がある不思議な人形で、名前はティポと言う。

何故喋っているのかは、彼曰く、『昔から喋っていた』だそうだ。

「ランザという、黒のコートと黒いサングラスをした男は、ハ・ミルの住人ではないのだな？」

「は、はい……。そんな怖そうな人はいませんでした」

「ふむ……」

「み、ミラ？ そのランザっていう人が……。どうしたの？」

ジュードが何故か恐る恐るミラに尋ねた。

「……ジュードとアルヴィンには、イヴの話をしたな？」

「ああ。ミラ様と共に育った人間の子だろ？ 社にもベッドとかあったな」

「ミラに食事を教えてたのも、イヴって子だったんだよね？」

「うむ。あの時、素直に食べていれば、あのような素晴らしさに早く出会えたと言うのに……」

ミラは後悔し、拳を握りしめた。たかが食事でも、ミラにとっては使命と同じほどに大切に思っているようだ。

「それで、それがどうしたの？」

「うむ。実はランザと握手した時に懐かしさを感じた様な気がしたのだ」

「え？ それって、イヴとの？」

「けど、そのイヴって子は、もう死んでんだろ？ 魔物と一緒に光りに吞まれて消滅したって」

「そうなのだが……」

ミラはランザと握手した手を見つめた。

——気のせいなのだろうか？

ミラは手を握りしめ、一旦この事を忘れる事にした。

「ただ似ていただけかもしれない。もうこの話は止めよう」

「……そうだね。えっと、イル・ファン行きの船、あるかな？」

その後、ミラ達一行はランザとカレンの前の便で、サマングン海停へと向かう事になった。

★

ランザとカレンは食堂で食事を取っていた。メニューはマーボーカレー。

「ねえ、ランザ」

「何だ？」

「どうして魔物を食べるようになったの？」

カレンは前々から思っていた事を尋ねた。

普通、人間は魔物なんて恐ろしいものを食べはしない。可愛い魔物もいるにはいるだろうが、それでも絶対に食べたりはしない。

「旅の途中、食糧が切れてな。腹が減ったから為しに食べてみた」

「何か拍子抜けの理由ね」

「そんなもんだろ」

「じゃあ、何故旅をしているの？」

「旅をした方が生きる力が付くから」

「……………」

なんとも面白みの無い理由である。カレンは聞いた自分が馬鹿だったと少し後悔した。

「……………家族は居るの？」

「……………」

ランザの手が止まった。

カレンは拙い事を聞いたと思い、慌て始めた。

「あ、えっと、言えないんじゃないわよ？」

「……………そうしてくれると、助かる」

ランザは食べる手を動かし始めた。しかし、ランザの雰囲気はとても話しかけれる雰囲気ではなかった。

——家族……か……。

カレンは自分の家族の事を思い出した。とても優しく、同時に厳しく、頼りになる父。何でも出来る完璧な母。明るく元気で、イタズラばかりする妹。

その全てをカレンは瞬時にして思い出してしまった。

——もう……会えないのよね……。

全員死んだ。家族だけではなく、友達も、村の人も全員。

「カレン」

「な、何かしら？」

突然ランザに話しかけられ、身体をビクつかせてしまった。

「……無理はするなよ」

「え……？」

それはランザなりの慰めだった。本当の笑顔も感情も出せないランザには、言葉だけしか相手に気持ちを伝える手段がない。そのランザの言葉に、カレンはほんの少しだけ気持ちが晴れた気がした。

「……ありがとう」

その呟きは、周りの客の声に掻き消された。

★

サマングン海停行きの船の上に、ランザとカレンはあった。カレンは船の端から身体を乗り出し、海の景色と潮風に歓喜していた。

「気持ちいい！　これが本当の海なのね！」

「見たこと無いのか？」

「ええ。ずっと村の中にしかいなかったから、外には出た事無いのよ」

「……確か二十歳だったよな？　何だ？　村では姫か何かなのか？」

「いいえ。ただ村の中だけで殆どの生活が成り立つから、外に出る必要が無いだけ」

「……だから知らない村だったのか」

カレンの村は本当に誰も知らない。いや、忘れられていると言った方が正確だ。

長年、外との交流が無く、村の名が知れ渡る事が無かったからだ。

「それにしても本当に気持ち良いわね」

「あまり潮風に当たっていると、髪がベタベタになる……」

「へ？ そうなの!？」

カレンは慌てて端から離れ、ランザを壁に風を避けようとした。

「……という話を聞いた事があると言いたかったんだが……」

「……何よ？ 髪を気にしちゃいけないの？」

「いや。触った感触では、サラサラで良い手触りだから大切にしておけ」

ランザはカレンの髪を触った。

「……セクハラよ」

「それは失礼。だが俺にしがみ付いてきて風除けにしようとしている奴には言われたくは無いな」

「女性が良いのよ」

「そうでございますか」

その後も、他愛ない会話が続き、何時の間にかサマンガン海停に到着した。



サマンガン海停で、カレンがお風呂に入りたいと言い出し、ランザは宿屋で風呂を借りる事にした。その際、宿屋の人に金を取られ、一文無しになってしまった。

「……あんな話、しなければよかった」

「……ごめんなさい」

「気にするな。髪は大事にしといた方が良い」

「……長い人がこの身なの？」

「……俺、目が見えないから外見で決めれないんだが？」

「そうだったわ」

そもそもランザに女性の好みがあるのか、聞いてみたいところである。

「このサマンガン街道を抜けるとカラハ・シャールに着く。そこで領主にお前を頼もうと思うんだが」

「え？」

ランザの突然の案にカレンは呆氣にとられた。

「領主の所ならば、不便は無い筈だ。だからそこで働きながら暮らし――」

「ちょ、ちょっと待って!」

「うん？」

カレンはランザの言葉を止め、確認するようにランザに尋ねた。

「いきなり何を言い出すの？」

「言って無かったか？」

「言って無いわよ!」

「それは悪かった。だが俺とこのままいるより遥かに良い」

「そ、そんなの分からないじゃない!」

「……何を怒っているんだ?」

「お、怒って……ない」

カレンの先程までの勢いは消えて行き、顔を下に向けた。

「……言って無かった事は謝る。……向こうに着くまで考えといってくれ」

ランザはカレンにそう言い、先に進み始めた。

「……………」

カレンはまだ、下を向いたままだった。

★

サマンガン街道を暫く進むと、ラ・シュガル兵が道を塞いでいた。

「……カレン、この先で兵が道を塞いでいる様だが、何処の兵だ？」

「……………」

「カレン？」

「…………え？ 何？」

カレンはランザの話を聞いていなかった。

「あそこにいるのは何処の兵士だ？」

「え、あ……ラ・シュガル兵よ。検問しているみたいね」

「そうか……」

ランザは目が見えない。だから耳から情報を入れるしかない。だが、ランザは何故かその他の事はまるで見えているかのように行動できる。

「さて、どうしたものか……」

「どうして？」

「身分を証明するものが無い」

「あ、そうか私……」

「違う違う、俺も持っていないんだよ」

「えっ!?! 持って無いの!?!」

「ああ。どう乗り越えるか……」

ランザは顎に手を当て、策を考えるが、一向に良い案が浮かばない。そんな時、検問の方から悲鳴が聞こえた。

「うあああああっ!!」

「何だ!?!」

「えっ!?!」

検問の方を見た二人の目には、巨大なボアが兵士と一般人を襲っていた。

「何、あの巨大さ!?!」

「……霊力野^{ゲート}の活性化による、突然変異か」

「え、分かるの？」

「まあな。それより、良い案が思い付いたぞ」

「まさか、どさくさに紛れて越えようと言うんじゃない……！」

「違う。あの魔物を倒す代わりに通してもらう」

ランザはそう言うと、魔物に向かって駆け出した。

「ちょっ！？ もう！」

「お前は治癒術で怪我人の手当てをしろ！」

「分かったわよ！」

カレンも怪我人に駆け付け、治癒術を施し始めた。

「おい！」

「だ、誰だ！？」

ランザは必死に抵抗していた兵士に話しかけた。

「手を貸そう」

「だ、駄目だ！ 一般人に手出しをさせる訳には！」

「傭兵だよ。こいつを倒したら、俺と連れを一人通してくれないか？ カラハ・シャルヘ急いでいるんでな」

「傭兵か！ 分かった、頼む！」

「なら離れている」

ランザの目論みは成功し、兵士を全員一般人の所まで退かせた。

「さて、さっさと終わらすからな」

そう言い終わるか否や、ランザは駆け出し巨大ボアを殴り付けた。

「ッ!？」

しかしボアはビクともせず、逆にランザの手がダメージを受けた。

——堅い……！ 一発で拳が砕けたか。

殴り付けた右手からは出血していた。

「ブオオオオオオ！！」

「ッ！　ゴハッ！」

ランザはあまりにももの堅さに気を取られ、ボアの体当たりをもろに喰らってしまった。

「くっ、この！　丸焼きにして喰うぞ！」

ランザは鞘に収まった長刀でボアの目を突いた。
ボアは痛み、苦しみに、ランザから離れた。

――仕方が無い……アレを使うか。

ランザはその場で目を閉じ、手足に意識を集中し始めた。
すると、ランザの手足に闇のマナが収束しだし、やがて鋭い爪の形になっていった。

「邪狼爪^{じやろうそつ}」

刹那、ランザはその場から消えた。
そしてボアの腹の下に潜り込んでいた。

「はあああああつ！」

そして上空へと蹴り上げた。

「まだまだあ！」

ランザも上空へとジャンプし、右手の爪を立て、回転を加え、ボアの腹を貫いた。

「ブオオオオツ！！」

そして背からランザは飛び出し、ボアに穴を開けた。

「止めだ……」

ランザはボアの首をめがけ、キックを落とした。

ズバツと、気持ちの良い音がし、ボアの首を切断された。

ランザは着地し、周りにボアの首と胴体が落ちてきた。

「血で台無しだな」

ランザは自分の身体を触り、血でベトベトなのを確認し、一瞬、マナで全身を包んだかと思えば、戦う前の格好に戻った。どうやら精霊術か何かで汚れを消した様だ。

「……うっ……！」

と、いきなりランザは頭を押さえ、顔を歪めた。

——チッ、これだけでも駄目なのか……！

「ランザ！」

カレンがランザに駆け寄った。

「どうしたの！？ どこかやられた！？」

「……大丈夫だ。おい、兵士」

「あ、ああ……」

「約束通り、通してもらうからな」

「分かった……」

「ちょっと!」

ランザはカレンを無視して歩き出し、カレンはその後を追った。

★

「ちょっと待ちなさいよ!」

ランザはカレンを無視し続け、どんどん先に進んでいた。

「待ちなさい!」

とうとうカレンは我慢できず、ランザの肩を掴んだ。

「ッ!」

「え? どうしたの?」

カレンがランザの肩を掴んだ瞬間、ランザは掴まれた肩を押さえ、その場に膝を着いた。

「まさか……見せなさい！」

カレンはランザの服を捲っていき、血で真っ赤に染まっている個所を見つけた。

「やっぱりやられたのね。こっちに来なさい」

カレンはランザに肩を貸して、草の上まで移動し寝かせた。

「どうしてもっと早く言わなかったのよ？」

「あそこで診せれば、兵士たちが俺達を保護しようとするだろう。そうなればお終いだ」

「だからって……。手まで怪我してるじゃない！」

「すまない。思ったよりも堅くてな……」

カレンはランザに治療術を当て、怪我を治療していく。

「一応治したけど、念の為に医者に診せた方がいいわ」

「ならカラハ・シャルで診せるさ」

「……私、決めたわ」

「え？」

カレンはランザを真剣な眼差しで見詰めた。

「私は貴方について行くわ。貴方の旅に」

「……何？」

ランザはカレンに聞き返した。その顔は何故かとても焦っているようだった。

「貴方には目が必要でしょう？ それにまたこんな怪我をしたらどうするの？」

「だが、カラハ・シャルでなら不便な暮らしは……」

「私には合わないわ。旅の方が合ってるもの」

「しかし！」

「それに、私はもっと貴方と一緒にいたい」

「なっ……」

ランザは言葉を失った。今のカレンに何を言っても無駄。置いて来ても必ずついて来る。カレンの目がそう訴えていた。

「……俺は生きる力が付くから、旅を始めたと言ったな？」

「ええ」

「だが実際は違うぞ？」

「……どんな？」

「……時が動けば、常に死と隣合わせだ。それでもついて来るつもりか？」

「当然よ。寧ろ行かないと駄目ね、そんな事になるのなら」

「……」

ランザは頭を抱えた。自分の目的の為に無関係な人を巻き込んで良いのかと。だがそれを本人は望んでいる。

「……二度は言わないからな？」

「諄いわ」

「そうか……」

「……！」

ランザはサングラスに手をかけ、サングラスを外してカレンを見た。

「これからこの先、俺とお前は相棒だ。しっかりと俺の目になってくれ」

「……ええ。任せて」

今、この瞬間、ランザとカレン・マリエーゼは背中を預ける者同士となった。

これがこの先、どう左右するのかは、精霊の主・マクスウェルにすら分からない。

友人（前書き）

毎度毎度申し訳ありません。
クレインの口調が間違っていました（汗）

友人

カラハ・シャル。

そこはとても笑顔で溢れており、活気で満ち溢れていた。

領主と住民の関係も良好で、領主は民を思い、民は領主を尊敬している。

それとこの街の特徴は、街の中心にある巨大な風車である。本来ならば、ここは乾燥の靈勢……乾燥地帯にあたるのだが、精霊術と大風車のお蔭で緑溢れる街となっている。

「二年ぶりだな……」

「ここがカラハ・シャル！？ 賑やかな街ね！」

カレンは街の賑やかさに驚き、キョロキョロと辺りを見渡していた。

「少しは落ち着け。転ぶぞ」

「私はそんな子供じゃないわ！」

「そんな事を言う人ほど子供だぞ」

ランザはカレンの頭をポンポンと叩いて歩き始めた。

「ば、馬鹿にしないで！／＼／＼／」

カレンは顔を少し赤らめながら怒鳴り、ランザの後を追いかけた。

★

ランザとカレンは領主の屋敷の前までやって来た。

「何か……大き過ぎない？」

「こんなもんだろ」

カレンが邸の大きさに口をあぐりと開け、呆氣にとられた。
ランザは門番の兵士に話しかけた。

「すまない。ランザと言う者だが、領主のクレイン・K・シャール
に取り次ぎ願えないだろうか？」

「ランザ……？　ランザ殿ですか！？」

「そうだ。頼めるか？」

「勿論です！ 少々お待ち下さい！」

兵士は走って邸の中へ入っていった。

「……人気者なのね」

「みたいだな」

「何してたの？」

「友人を守る兵が弱かったら心配だろ？ だから軽く指南してやつただけだが……」

つまるところ、ランザはカラハ・シャルルでは師匠的な何かの様だ。

——盲目の師匠……なんかカッコイイ。

「どうした、カレン？」

「な、何でも無いわ！／＼／＼／」

カレンはランザから顔を逸らした。

それからすぐ、兵士が戻ってきて中へ入れてくれた。

ランザとカレンが入ると、ランザに誰かが特攻をかました。

「――ッ!？」

「ちょっ!？」

言っておくが、ランザの怪我はまだ治っていない。治療と言っても応急処置である、痛みはまだ取れてはいない。そんなランザに特攻をかましたらどうなるか？ それは勿論、ランザに激痛が走る。

「ちょっと!？ 大丈夫!？」

「へ!？ だ、大丈夫ですか!？」

カレンと特攻をかました女性が慌ててランザを心配する。

「だ、大丈夫だ……。もん、だいは無い……!」

どう見てもやせ我慢と分かる反応をし、ゆっくりと姿勢を正した。

「ご、ごめんなさい! 怪我をしてるなんて思わなくて!」

「気にするな。……暫く見ない内にじゃじゃ馬度が増したな」

「元氣って、言ってほしいわ」

ランザと話している女性は、クリーム色の髪をし、右横で髪をロール状にしている可愛らしい女性である。

「あら？　こちらの方は？」

女性はカレンに気が付き、ランザに尋ねた。

「彼女は俺の……」

「まさか奥さん！？」

「ち、違います！！／／／／」

まさかの勘違い。普通、恋人程度の勘違いをするのがお約束な筈なのに、この女性は奥さんと一段二段もの上の勘違いをした。

「俺にそう言った人は出来ないさ。彼女はカレン。俺の旅の相方だ」

「……カレン・マリエーゼです」

「そうなんですか！？　私はドロツセル・K・シャールです。よろ

しくね！」

「よ、宜しく願います……」

ドロツセルが差し出した手を握り返し、カレンは握手を交わした。

「……ドロツセル、クレインがいないようだ……が……？」

ランザはクレインという人物を捜している最中、驚きの人物を見つけた……。

「ミラⅡマクスウェル……？」

「……ランザ、か？」

「……？ お知り合い？」

そこにはアルヴィンを覗いた一行達が、お茶を広げていた。

★

「ジュード・マティスって言います」

「えと……エリーゼ・ルタス……です」

「ティポはティポだよー！」

「……ランザだ」

「カレン・マリエーゼよ」

ランザとカレンはお茶会に参加し、皆と自己紹介を交わした。

「まさかランザさんが見知らぬ女性に声をかけるなんて……。この二年で随分と積極的になったんですね」

「ナンパだー！ ナンパマン二号だー！」

「ナンパ？ これは何を言っている？」

ランザは自分の周りをグルグル回るティポを捕まえ、上下に引っ張った。

「ほう……中々良い感触だ」

「……ねえ、私にも触らせてくれないかしら？」

「ん？ ほらよ」

ランザはティポをカレンに渡し、渡されたカレンはまじまじとティポを見詰めた。

「……………」

「どうしたのー？」

「……………いい」

「うん？」

「可愛い！！」

「むぎゃっ！？」

カレンは可愛いと叫び出し、ティポをギュッと抱きしめ、挙句の果てには頬ずりまでした。

「ランザ、この子欲しいわ！」

「だ、駄目です！ ティポは私の大切な友達です！」

「うつ……………」

流石に小さな女の子から取り上げるにもいかず、ティポをジッと見

つめてからエリーゼに返した。

「ああ……」

「……子供か」

「可愛いのは別よ！／／／／」

カレンは顔を紅く染め、そっぽを向いた。
カレンの意外な一面を知った瞬間だった。

「ところでランザ。何故お前はここにいるんだ？」

「それは俺の台詞だ。イル・ファンに向かうと言っていなかったか？
何故領主の家にいる？」

「それは私が誘ったからですよ。偶然、買い物をしている時に出会ったの」

「……ローエン、またドロツセルは無駄使いをしようとしてたのか？」

ランザはドロツセルの隣に立っている年老いた執事に尋ねた。
名前はローエン。長身で長い白髪を後ろで一本に細く結び、同じく
白い髭を生やし、黒を基調とした服を着ている。

「ははは……。お見通しですね」

「違いますよ！ 皆で協力して買ったんです！」

「はいはい。……で、クレインは？」

「クレイン様なら、少し所用で席を外されております。もう暫くすれば帰って来るかと」

ローエンがランザの質問に答えた。

「それで、何でお前はここに来たんだ？」

ミラがランザに尋ねた。その雰囲気は僅かだが苛立ちが感じられるような、られないような、そんな感じだった。

「クレインとは二年前からの付き合いだ。街の外で魔物に襲われている所を、な」

「あの時は本当に感謝していますわ。それにとても凄かったのよ！ 魔物たちを武器も使わずに叩いて」

叩いて……。聞こえは可愛らしいが、実際は殴る蹴るの大暴れであっただろう、とカレンは思った。

「へえ。ランザさんって強いんだね」

「そこまで強くないさ。見る限り、君も相当な実力を持っているだろう?」

「そ、そんな……」

ジュードは少し照れ、頭をかいた。

——ジュード・マティスか……。何だ、この違和感は……。

ランザは見えない目でジュードを見詰めた。

「あ、あの……何か?」

「……いや、気にしないでくれ」

ランザはジュードから目を離し、お茶を呑んだ。

「そうだドロツセル」

「はい?」

「何日か、ここに俺とカレンを泊めてくれないか? もう金が底を

ついてな」

「勿論ですよ！ ローエン、準備をお願い出来るかしら？」

「勿論でございますよ」

「ありがとうございます」

カレンはドロツセルとローエンに頭を下げた。

「いえいえ、こんな美しい女性に野宿なんて真似をさせたくはありませんからね」

「う、美しいって、そんな……」

「……まだ現役だな」

ローエンは老人ではあるが、今でも元気な人物である。先程のように女性を口説こうとするのだ。

その後も、他愛ない会話をし、お茶の時間を満喫していった。

★

暫くの時が過ぎ、ジュードは外へ行こうと、玄関に向かった。するとジュードが扉に触れる前に扉が開き、向こう側からはこの

当主、ドロツセルと同じ色の短い髪をした、クレイン・K・シャルと二人の兵士が入って来た。

クレインは出て行こうとしたジュードの道を塞ぎ、ジュードを中へと戻した。

「まだ、お帰りいただく訳にはいきません」

クレインは低く強い口調でジュードに告げた。

「あなた方が、イル・ファンの研究所に潜入したと知った以上はね」

それを聞いたジュードは息を呑み、動揺を見せた。

クレインはジュードを席に戻し、皆がいる方へとやって来た。

「……ん？ 君は……」

「よう」

「ランザ！？ 君なのかい!?!」

ランザの姿に驚き、先程までの威圧感は消し飛んでしまった。

「一体どうして……。いや、今はそれどころじゃない。ランザ、つ

もる話もあるだろうが、今は……」

「分かっている。が、俺も聞いていいだろう？」

「……そうだな。他ならぬランザだしな」

どうやらランザとクレインの友好関係は相当なもの様だ。普通ならば、これから行うであろう話には入れない筈なのに、クレインはいとも簡単に承諾したのだから。

「あの、何の事か……」

「とぼけても無駄です。アルヴィンさんが、全て教えてくれました」

「アルヴィンが!？」

「……軍に突き出すのか？」

ミラが神妙な顔つきで尋ねた。しかもミラの片手は腰にぶら下がった剣に触れていた。

「いいえ。イル・ファンの研究所で見た事を教えて欲しいのです」

クレインは椅子に座り、ラ・シュガルの事を話しだした。

「……ラ・シュガルは、ナハティガルが王位に就いてからすっかり変わってしまった。何がなされているのか、六家りくけの人間ですら知らされていない……」

六家……精霊の主・マクスウェルに初めて従った人間・クルスニクの弟子たちの末裔の、六つの家柄である。

「軍は、人間から強制的にマナを吸い出し、新兵器を開発していた」

クレインの気持ちを知り、ミラはしっかりと言葉にして伝えた。

「人体実験を！？ まさか、そこまで！？」

クレインは驚愕の事実に立ち上がった。やがて落ち着きを取り戻し、腰を下ろした。

「嘘だと思いたいが……事実とすれば、すべて辻褄が合う」

「実験の主導者はラ・シュガル王……ナハティガルなのか？」

「そうなるでしょう」

「……………」

「……何か、凄いこと聞いたわね」

ランザは黙って話を聞き、カレンは自分が聞いても良かったのかと、少しだけ後悔し始めた。

「……ドロツセルの友達を捕まえるつもりはありません。ですが、即刻この街を離れていただきたい」

それは領主として極当然な判断だった。
犯罪者を庇っていると王に知られたら、自分はおろか、民まで被害を喰うのだから。

「ありがとうございます、クレインさん」

ジュードはお礼を言い、ミラとエリーゼと共に邸から出て行った。

「すまないランザ。この事は……」

「分かっている。黙っているさ」

「ありがとう」

クレインは自分の事ではないのにランザに礼を言った。

「ランザ。君と話をしたいが、それどころではなくなった」

「……何をするつもりだ」

「先程、ナハティガルが王令で街の民を強制徴用をしたんだ。彼女の話が事実なら……」

「その民を人体実験に使うって事!？」

カレンが最悪の予想をした。

「そんな!？ お兄様、皆さんを助けなくては!」

「分かっている。だから僕はこれから民が連れて行かれたバーミア峡谷へと向かう」

「止めろ。ナハティガルは刃向う者には容赦はしない。いくら六家であろうと、命は無いぞ」

ランザは強い口調でクレインに反対した。
しかしクレインは首を横に振った。

「そうだからと言って、見過ごす訳にはいかない」

「なら俺も……」

「駄目です！ ランザさんは怪我をなされているのでしょう!？」

「そうなのか？」

「こんな傷、気を抜かなければ大事ない——っ!！」

ランザは立ち上がろうとしたが、横に座っていたカレンに怪我をしている方の肩を触られ、痛みに襲われた。

「駄目よ。全然大丈夫じゃないじゃない」

「……彼女の言う通りだ。今回、君は邸で待っていてくれ」

「だが……!！」

「君がそうやってムキになってくれて、僕は嬉しいよ」

「クレイン……」

クレインはランザに軽く笑みを見せ、すぐに引き締まった表情になった。

「ローエン。ランザを頼む」

「しかし旦那様、彼の言う通りナハティガル王は容赦しません。無容易に向かわれては……」

「こうしている間に、民達が苦しめられているかもしれない。すぐに向かう」

クレインはローエンの忠告を聞かず、バーミア峡谷へと向かってしまった。

「お兄様……」

「……」

「……ランザ？」

ランザは顎に手を当てて何かをジッと考えていた。やがて考えが終わり、口を開いた。

「ローエン」

「はい」

「すぐにミラ達を追うんだ」

「彼女達をですか？ ……成程、わかりました」

ローエンはランザの言う事が分かったのか、ドロツセルに一言いい邸を出て行った。

「ドロツセル」

「は、はい」

「すぐに医者呼んでくれ。傷を完全に塞ぐ」

「え、でも……」

「早く。クレインを死なせたくは無い」

それは、感情を持たない筈のランザの、友を思う確かな感情だった。

「ランザ……」

「カレン。俺の我儘に付き合ってくれるか？」

ランザがこれから行おうとするのは、ある意味、ナハティガルの妨害である。

それがばれれば、カレンは犯罪者と言う事になる。

それでも来てくれるかと、ランザはカレンの覚悟を聞いたのだ。

「……私はあの時全てを失ったわ。だから、これからまた作ってきたい。だから私は貴方のパートナーになったのよ？」

「……愚門だったな」

カレンの答えに、ランザは口の端を釣り上げた、ようにカレンは見えた。

「ドロツセル、頼んだぞ」

「ええ、分かったわ。一番良い先生を連れてくるわ！」

ドロツセルは自らの足で医者を呼びに向かった。
待っている間、ランザは自分の長刀の柄を触っていた。

ランザとクレイン（前書き）

なんか今一つの感じが……。
取り敢えずどうぞ。

ランザとクレイン

ローエンはアルヴィンと話し合っていたミラ達の協力を得、バーミア峽谷に到着した。

そこにはラ・シユガル兵が警備をしていたが、ジュードが兵士の気を引き付け、その隙にミラが兵士撃退。

皆は洞窟の中へと進み、住民とクレインが捕えられているのを発見。しかも巨大な装置で全員のマナを絞り出している最中であり、全員はもがき苦しんでいた。

助け出したいが、道を強力な封印術で閉ざされており、頂上の穴から侵入し、装置のコアをアルヴィンが撃ち抜く作戦に出た。

しかし頂上では精霊力が噴き出しており、まともに降りれない状況だった。

そこでローエンが魔方阵を展開し、それに乗りバランスを取りながら降下する危険な手に出た。

「見えた！ アルヴィン！」

「だが、こう揺れちゃ……！」

ジュードの合図でアルヴィンは銃をコアに向けたが、激しい揺れで狙いが定まらない。

「これなら！」

「……気が利くな」

ジュードがアルヴィンの腕を自分の肩の上に乗せ、アルヴィンの腕を固定した。

そしてアルヴィンは見事、一発の弾丸でコアを撃ち抜いた。装置は停止し、住民は皆解放された。

着地したローエンは逃げ惑う住民達の中からクレインを捜し始めた。

「旦那様！」

ローエンはフラフラに歩いているクレインを見つけ、すぐに駆け寄り身体を支えた。

「旦那様！」

クレインは意識を失い、暫くの間ローエンの腕の中で眠り続けた。



「気が付いた？」

暫くした後、クレインは眼を覚まし、エリーゼの頭が目に入った。

「……すまない。忠告を聞かず突っ走った結果が、これだ……」

「ご無事でなによりです」

「ナハティガルはここに来ているのか？」

ミラが少し慌てた様子でクレインに聞いた。

即刻、ナハティガルの野望を消したいのだろう。

「僕も、あの男を問い詰める気で来たのですが、親衛隊に捕えられてしまって……」

「そうか……」

ミラはナハティガルがもう居ないと察し、落ち着きを取り戻した。

「もーこんなところ、早く外にでよーよー！」

「だな。長居は無用だ」

ティポの言葉にエリーゼはうんうんと頷き、アルヴィンも賛成した。
と、その時。

コアと繋がっていた巨大な岩が光り出した。

「危ない！ 下がれ！」

危険を察知したミラが全員を下がらす。

岩は更に輝き、そして岩からは光り輝く、巨大な羽付きの昆虫の様な生物が現れた。

「な、何こいつ!？」

ジュードは突然現れた生物を凝視した。

「来るぞ、構えろ！」

ミラの落ち着いた指示で全員は武器を構えた。

「奴は強力な精霊術を纏っています！」

「こいつを産むのが奴らの目的か!？」

「でも何か、この感じ何処かで……」

「分析は倒してからにしてくれ！」

ローエンは剣とナイフと精霊術で、ミラは剣と精霊術で、ジュードは拳で、アルヴィンは大剣と銃で、エリーゼは精霊術で敵に攻撃を仕掛ける。

だが相手は空を飛び、羽から毒ガスや風の精霊術、光の衝撃を放ち、ミラ達を苦しめて行く。

「くっ、強い！」

「ミラ！ 上！」

「何！？」

ジュードの声でミラは上を見上げた。敵がミラの頭上に回り、特攻を仕掛けてきていた。

「ミラ！」

「くっ！」

ミラはその場から避けようとしたが、もう避ける時間も無かった。しかし……。

「ライトニングブラスター!!」

「ッ!？」

雷の砲撃が敵を襲い、敵は急停止し空へ逃げた。

「はああああっ!」

しかし敵が逃げた先には鞘に収まった長刀を構えたランザがいた。

「封翼衝!!」

ランザは力一杯に長刀で殴り付け、敵を地面に叩き落とした。

「皆、大丈夫!？」

「カレン、何故ここに!？」

ミラがカレンの姿を捉えて驚いた。

「ランザがクレインさんを助けに!」

「おい！！　まだ気を抜くな！」

ランザの一喝に、全員は敵を見た。

敵はまだまだ動けるようで、羽を再び動かそうとしていた。

「させない！　荒れ狂う大地、その牙を敵に！　グランドダッシュ
ー！」

カレンが精霊術を発動した。

敵の真下から鋭い岩の牙が幾つも激しく突き出し、敵を再起不能に
まで一撃で持って行ってしまった。

「す、すごい……です」

「ヒュ、やるねえあの姉ちゃん」

皆はカレンの精霊術の強さに驚いたが、一番驚いていたのはカレン
自身だった。

「え……何これ？　何でこんなに威力が？」

——まさか、この杖のおかげ？

カレンはランザが購入してくれた杖を見て、少し杖が恐ろしくなった。

「驚いたな。まさかカレンにこれ程までの力があつたとは」

「ら、ランザ！？　ち、違うのよ！　私の力は精々小型を倒す程しか……」

「まあ、今はいい。それより……」

ランザは動かなくなった生物に近寄り、ジッと見詰めた。

「退け、ランザ。その魔物は倒さなければならない」

ミラが剣を抜いて魔物と呼んだ生物に近付いた。
だが、ランザはミラを制止した。

「……何の真似だ？」

「よく、こいつを見てみろ」

「……？」

ミラは生物をみた。

すると生物は光り輝き、粒子となっていくた。

「おお、これは……」

「すごい、すごい！」

その光景は美しかった。その場に居るランザ以外全員が粒子に見惚れた。

「微精霊だ。冷静になれば気付くだろう」

「……ありがとう」

「……なに、お安い御用さ」

二人は全ての粒子が空へ昇っていくのを、無言で見つめ続けた。その様子を、カレンとジュードはそっと眺めていた。

★

ランザ達はクレインと住民達を連れ、カラハ・シャルルへと無事とは言えないが戻って来た。

「お兄様！」

邸の外で待っていたドロツセルが駆け寄り、数名の兵士もやって来た。

「僕は大丈夫だ。それより、この人たちを早く病院へ」

クレインは兵士たちに命じ、住民達は病院へと連れて行かれた。

「ほら、お前も行くぞ」

「ああ。すまない、ランザ」

ランザはクレインに肩を貸し、病院へと連れて行った。

「……………」

「どうしたの？ ミラ」

ミラは歩いて行ったランザを見詰め、不思議に思ったジュードがミラに尋ねた。

「……いや、何でも無い」

「そう？」

ジュードはそれ以上追及しようとはしなかった。

「……………」

——ランザ……どうしてこうもイヴと雰囲気似ている……。まさか……。

「行くよ、ミラ」

「あ、ああ」

ミラ達は兵士に連れられて邸の中へと入っていった。

——いっその事、ランザかカレンにでも聞いてみるか？

ミラはどうしてもランザの事が気になるようだった。

★

暫くのした頃、クレイン達が帰ってきた。
その姿は、とても元気だった。

「徴収された民も、皆命に別状は無いようです」

「皆さん、本当にありがとうございます」

「私からも、お礼を申し上げます。ありがとうございました」

「皆無事でよかったです」

ジュードは皆が元気になった事を喜んだ。

「ランザ、カレンさん。君たちも本当にありがとう」

「友として当然の事をしたまでだ」

「もう、ランザ」

ランザはお礼を言われるのが恥ずかしいのか、そっぽを向いた。

「ははは、ほんの少ししか見てないけど、君たちは本当に仲の良い
『夫婦』だ」

「ふえっ！？／／／／」

「……………」

クレインのとてもない発言にカレンは紅くなって驚き、何故かミ
ラは気に喰わない表情になった。

「はあ、クレイン。俺とカレンはそんな関係じゃない」

「え？ そうなのかい？」

「コクコクコク！／／／／」

カレンは人形のように頷いた。

「そもそも、何故そんな眼で見るんだ？」

「何言ってるんだい。君が言ったんじゃないか」

「俺が……………」

「『次来る時は妻を連れて来る』と。ハッキリと僕とドロツセルと
ローエンに言ったぞ」

「……………そうだったか？」

どうやらこの一連の誤解の原因はランザだったようだ。
ランザは全く覚えておらず、首を傾げた。

「しかし、共に旅をしているようだし……」

「旅の中で育む愛もありますよ」

「まあ、ロマンチックね!」

三人の発言にランザは溜息をつき、カレンはこれ以上ないぐらい顔を紅くして只管首を横に振っていた。

「んんっ!」

突然、ミラの咳払いが響き、全員がミラに集中した。

「では、私達は行くでしょう」

「え! もういくのー?」

ティポが悲しそうにミラに尋ねた。

「ここからだ、ガンダラ要塞を抜ける必要があるな」

「ガンダラ要塞ということは……皆さんの目的地はイル・ファンですか？」

ローエンがアルヴィンが言った言葉から予想した。

「そうだ。あそこにはやり残したことがある」

ミラが肯定した。

「ガンダラ要塞を、どう抜けるつもりなんですか？」

「押し通るしかないのかもしれないな」

クレインの問いに答えたミラは、さも当然の様に言うが、他の皆は呆れていた。

「流石にそれは難しいでしょう。僕の手の者を潜ませて、通り抜けられるよう手配しておきます」

「僕たちに協力したりして大丈夫なんですか？　僕たち、軍に追われている身ですし……」

「元々、我がシャル家はナハティガルに従順ではありませんし。先程、軍に抗議し、兵をカラハ・シャルから退かせるよう手配したところです」

「これ以上軍との関係は悪化しようがない、ということか」

ミラの言葉にクレインは頷いた。

その様子にランザは誰にも気付かれないよう、小さく溜息をついた。

「んじゃ、お言葉に甘えさせてもらおうぜ。無策で要塞に突っ込むより、何倍もマシだからな」

「そうか……そうだな。では、頼んでも良いだろうか？」

アルヴィンも賛成し、ミラはクレインの提案に乗る事にした。

「任せて下さい。色々世話になったお礼です。手配は上手くいっても、暫くはかかるでしょう。それまで滞在なさるといい」

「……!？」

「ランザ……?」

カレンはクレインの横で反応したランザに気が付いた。

無表情だが何処か焦っているかのような気が、カレンには感じられた。

「ローエン、君は彼らと共に居てくれ。彼らのお世話も、その方がしやすいだろう」

「承知いたしました」

「ありがとうございます」

「わーい。またドロツセル君といっぱいお話できるねー」

「ふふふ、そうね」

ジュードとティポは喜び、ドロツセルも一緒に居る事に喜んだ。

「今日はもうお疲れでしょう。部屋を準備させておきます。休まれるのなら、おっしゃってください」

「すまない。世話をかける」

クレインはローエンに部屋の準備を頼み、ランザを連れて自分の部屋へと向かった。

その時、ランザはカレンを手招きしたので、共に向かった。



クレインとランザ、カレンは部屋にあるソファ―に座り、クレインが用意したお茶を飲んでいた。

「クレイン、何で彼女達を泊めた？」

「彼女達と君たちは僕と民の恩人だからね。追い出すわけにはいかないよ」

「……俺がサングラスを着けている理由を知ってるだろう？」

「知っているとも。素顔を晒したくないんだろう？」

「え？ そうなの？」

カレンはてっきり視力を失った眼を見せたくないとはかり思っていたようだ。

「……彼女は知らなかったのかい？」

「そう言えば言っていなかったな」

ランザは特に気にせず、お茶を飲んだ。

「カレンさん、ランザの素顔は……」

「え、見ましたが……」

「そうですか……」

クレインはランザを一目見て苦笑した。

「君は、本当に相変わらずのようだな」

「別にどうでも良いだろう」

「ランザ、どういう事かしら？　ちゃんと教えなさい」

「イハイホ（痛いぞ）」

カレンはランザの両頬を引っ張り、顔を目の前に寄せた。

「さあ、話して」

「訳あり、顔、見せない、以上」

「っ……目が見えないって言うのは？」

「それ、本当、俺、嘘、つかない」

「怒って良いかしら？　今の私なら貴方なんて塵同然よ？」

ランザのふざけた様な返答に、カレンは杖を握りしめた。

本当に塵にしてしまいそうな勢いだったので、ランザは少し焦り咳払いをした。

「落ち着け。目が見えないのは事実だ。顔は、あまり他人に見せる訳にはいけないからだ」

そう言いながらランザはサングラスを外し、弄り始めた。

「クレインとドロツセル、ローエンにカレン、この四人しか俺の素顔は知らない」

「そう。何か大犯罪でも犯したの？」

「いや、まだだが？」

「まだって……何時かするつもりなのね……」

カレンは頭を抱えた。

自分からついて行くと行った手前、今更どころ言える立場ではないのだ。

「じゃあ、どうして？」

「俺、カッコいいだろ？　それで女の子達に囲まれたら、面倒じゃないか」

「無表情でいっても面白くも何ともないわよ。というか、そう思っ
て無いでしょ」

「当たり前だろ」

「はははは、君たちは本当に仲が良いんだね」

クレインはランザとカレンのやり取りを眺めて笑った。

「い、いえ……別にそういうわけでは……／／／／／」

「こっちはそうでもないぞ？」

「え……？」

ランザはサングラスをかけ直し、カレンの頭に手を置いた。

「いい暇潰しが見つかって良かったさ」

「……………」

カレンは何を期待したのか、落ち込みが尋常じゃなかった。暗い影を落とし、身体を小さく震わせていた。

「……ランザ」

「……言わなくても分かる」

流石にランザはやり過ぎたと思い、カレンの頭に手を乗せた。

「冗談だ。怪我も治療出来るし、暇潰しと言ったのは話相手が出来たという事だ。そう落ち込むな」

「……本当？」

この時、カレンが見えているクレインは少しグツときた。

美女の涙目に上目使いという兵器に、クレインは撃ち落とされかけたのだ。

「嘘は言わん。だから元氣を出せ」

が見えないランザには何の意味もなかった。ランザに恋心を抱いた者にとっては、とても痛いハンデだろう。

そんな者がいるかは置いて。

「だったら良いけど……」

カレンは少し元気が出たようだ。

「で、クレイン。何か仕事は無いか？」

「どうしてだい？」

「金が無くてな。仕事が欲しいんだ」

「そうか……」

クレインは何かないと頭の中で探した。

「ああ、一つあるぞ」

「どんなだ？」

「ここでの従者」

「……それ今作ったろ？」

「仕方ないじゃないか。日給で一万ガルド。どうだい？」

一万ガルド。それはとても旨い話である。
ランザはどうするか少し考えた。

「……よし、やろう」

「ええ！？　ランザが執事！？」

カレンは想像した。ランザが執事をしている所を。

——カレンお嬢様。おはようございます。本日も良い天気ですよ。

——カレンお嬢様。お茶の御用意が出来ました。

——カレンお嬢様。お散歩ですか？　私もお供いたします。

——カレンお嬢様。カレンお嬢様。お嬢様……。

「……似合わないわね」

カレンはそれは無いと投げ捨てた。

——けど……ちょっと良いかも。

少しだけ拾い上げた。

「カレン、頑張ってくれ」

「へ……？ 私がやるの？」

「目が見えない俺が出来る訳無いだろう」

「嘘でしょ！ それじゃあ何で戦えるのよ！？」

「それはアレだ。天性の勘ってやつだろう」

「そんな訳無いでしょう！」それが本当なら、ランザは正真正銘の化け物だ。

どこにそんな人物がいるだろうか。

「と、とにかく！ 私は絶対にやらないわよ！」

「……と、言うわけだ。他に何か無いか？」

「ははは、別に資金ぐらい貸し一つでいいさ」

「すまない」

クレインの良心により、カレンはメイドの道から逃れられた。

「す、すみません。私の我儘で……」

「分かってるのならやれよ」

「お断りです」

どうやらカレンは相当嫌がっているようだ。
過去に何かあったのだろうか。

「……ところで、ランザ。これから君はどうするんだ？」

クレインは先程までの明るい雰囲気を消し、ランザを真剣に見詰めた。

「……そろそろ時が動くかもしれない。俺はそれに従い、行動を起こす」

「それが、君の『使命』だったね」

「使命……？」

「……いずれ教える。ただ、今は生死をかけたモノだと言っておこう」

「……そう」

ランザがカレンに言った、常に死と隣り合わせということ。
それが何なのか、まだカレンには教えてくれなかった。

「ねえ、ランザ」

「何だ？」

「まだ私に言っていない事って、あるの？」

「……ああ、沢山あるさ」

「……何時か、教えてくれるかしら？」

「……いずれ、な」

ランザはカレンの頭をそつと撫で、優しい笑顔をカレンに見せた。
その笑顔が作り物だという事をカレンは知っている。
だがカレンはその笑顔に何故か、安心感を覚えた。

「……ではランザ。お互いもっと話したい事があるだろうが、今日
はもう疲れているだろう？ 休んでくれ」

「そうだな……そうするか」

「カレンさんの部屋は、ミラさんと同じで良いですか？」

「え、ええ。構いません」

「では案内しよう。話は明日でも出来る」

この日はこれで終わった。

だが彼らは気付いていなかった。

彼らに災厄がすぐそこまで迫っている事に。

約束と別れ（前書き）

申し訳ありません。

ネットが繋がらず、今日まで復帰できませんでした。

長らくお待たせしてしまい、申し訳ありませんでした。

どうか、これからも宜しくお願いします。

約束と別れ

翌朝、ランザ達は起床し、用意された朝食を取っていた。

長テーブルの横に当主であるクレインが、その斜め前にランザ、それから順にカレン、ミラ、クレインの正面にジュード。

ランザの前にドロツセル、それから順にエリーゼ、アルヴィンと座っていた。

「……魔物が喰いたい」

「駄目よ。ちゃんと人のご飯を食べなさい」

魔物を恋しがるランザに注意するカレンは、まるでランザの母親のようだった。

「魔物って……君はまだあんなモノを食べていたのかい？」

「む、あんなモノとはいただけじゃないな。調理の仕方次第では、そこいらのレストランにも引けは取らんぞ」

「それ以前に食べる客がないでしょ」

「……美味いんだがな」

「確かに美味しかったけど……」

「カレン、君も食べたのか？」

ミラが意外そうな顔でカレンに聞いた。
カレンはバツが悪そうな表情で頷いた。

「自分でもどうかしてたと思うわ……。けど、背に腹は変えられないもの」

カレンはあの時の自分は生きるか死ぬかだったのよと、自分に言い聞かせた。

「うわー、魔物食べるなんてどうかしてるー」

「気持ち悪い……です」

「うう……こんな子供にまで……」

「いずれ食わすから、その時に謝罪させればいい」

「止めなさい！ エリーゼちゃんを外道にはさせないわ！」

「……俺は外道なのかよ」

ランザは遠まわしに外道と言われ、軽くショックを受けた素振りを見せた。

実際は何も感じてはいないのだろうか……。

「そうだランザ、朝食が済んだ後、私の部屋に来て欲しい」

「ん？」

「……“アレ”だよ」

「ああ……“アレ”か」

「……？」

その場に居たミラ一行達はランザとクレインの会話に首を傾げた。

「ねえランザ、“アレ”って？」

「“アレ”は……“アレ”だ」

「何々？ まさか二人してオトナの話し合いか？ 俺も混ぜろよ」

アルヴィンがニヤニヤしてランザとクレインを見たが、ランザは首を振って断った。

「……………」

ミラは食事を進めるランザの顔をジッと見詰め、自分も食事を進め始めた。



朝食を済まし、各自部屋で過ごしている内に昼近くになっていた。

ミラとジュードはエントランスにいたクレインに、ガンダラ要塞の件を尋ねたところ、まだ来ていないらしく、ローエンに状況の確認を向かわせる事にした。

「ではローエン、宜しく頼む」

「畏まりました」

全員邸の前に集まり、ローエンを見送っていた。

「ローエン、どれくらいで戻って来るの？」

「そうですね。馬を使えば一日もあれば戻れるかと思います」

ドロツセルの問いに、ローエンはご自慢の白髭を摩って答えた。

「それなら、もしかしたら明日には皆さんとお別れかもしれないのよね」

「首尾よ進んでいれば、そうなるかもしれないな」

アルヴィンがそうなるだろうと答えた。

「それならエリー、ミラ、カレン。お買い物に行きましょう！」

「お買い物？　行こう行こう！」

「決まりね！　早速行きましょう！」

ドロツセルの提案にティポが大賛成し、ドロツセルはカレンを、エリーゼはミラを捕まえて嬉しそうに行進し始めた。

「待て、話が見えない」

「そ、そうよ。まだ私は何も言ってないわ」

ミラとカレンはいきなりの行動に驚き、軽く混乱してしまった。

「エリーとお買い物の約束したもの。カレンはともかくミラ達とは明日お別れかもしれないのなら、チャンスは今日だけよね？」

「それはそうだな。行ってくるがいい」

「そ、そうね。エリーちゃんと約束しているのなら……」

二人の答えに、ドロツセルとエリーゼは満面の笑みを浮かべ、捕まえている腕の力を更に強めた。

「じゃあ出発！」

「「出発ー！」」

二人と一匹はミラとカレンを引き摺って歩き始めた。

「だから、何故こうなるんだ？ 二人で行ってきたらいいだろう」

「私達が行かなくても良いんじゃない……」

「いいんじゃないの？」

「偶には、人間の女の子っぽい事するのも、面白いかもよ」

アルヴィンとジュードはミラに手を振って見送る事にした。
一方ランザはと言うと……。

「カレン、ついでに旅の道具も買っといてくれ」

「そこは楽しんでこいでしょ!？」

無表情で大きく手を振っていた。内心は買い物に行く手間が省けた
と考えているに違いない。

かくして二人は連れ去られていった。

クレインも笑顔で買い物に向かう妹達を見て、空を見上げた。
その顔は覚悟を決めた様な、決心の色が表れていた。

「この今の幸せの為に、僕も決心しなければいけない……」

クレインはランザ達に向き直った。

「やはり、民の命を弄び、独裁に走る王にこれ以上従う事は出来な
い」

「反乱を起こすのか？」

「戦争になるの？」

アルヴィンとジュードはまさかの事に少し驚いたが、ランザとローエンは分かっていたのか、黙っていた。

「ナハティガルの独裁は、ア・ジュール侵攻も視野に入れたものと考えられます。そして彼は、民の命を犠牲にしてまでも、その野心を満たそうとするでしょう。このままでは、ラ・シュガル、ア・ジュールとも無為に命が奪われる。僕は領主です。僕の為すべきこと。それはこの地に生きる民を守ること」

「……為すべきこと」

「そう、僕の使命だ」

クレインは力強く言葉にした。彼の瞳もまた、力強く光りが灯っていた。

「力を貸してくれませんか？」

「……ぼ、僕は」

「僕たちは、ナハティガルを討つという同じ目的を持った同志です」

クレインは一步踏み出し、ジュードに手を差し伸べた。
ジュードはその手を見詰め、ゆっくりとその手を――

ストン――！

何かを貫く音がした瞬間、クレインは倒れ、ジュードはクレインの手を掴む事が出来なかった。
クレインの胸には矢が刺さっていた。

「旦那様！！」

「クレイン！！」

「クレインさん！！」

「チイツ！」

アルヴィンは銃を抜き、離れた場所の屋根に居た襲撃者を撃ち落とした。

「早く治療を！！」

「う、うん！」

ローエンはクレインを抱きかかえ、ジュードは治療術をクレインの

傷に当てた。

「まだ敵がいるかもしれない。中へ運び込むぞ」

ランザはクレインを抱き上げ、ジュードの治療術を当てたまま中へ入った。

ランザはクレインをソファアに寝かし、ジュードは必至にクレインの傷を治そうとした。

「これは……！」

ローエンはクレインから抜いた矢を見て何かに気付いた。それと同時にジュードは膝について治療術を止めた。それが何を意味するのか、全員が察知した。

「お願いします！　どうか旦那さまを……！」

ローエンはジュードの肩を揺さぶって懇願した。だがジュードは涙を流し、齒を食いしばっていた。

「……ローエン、無理を言っではいけない……。僕はここまでの様だ……。この国の事を……。頼みます」

「それこそ無理です！ 私にそんな力は……」

「無理じゃない筈だ……『あなた』なら……！」

「っ……！」

クレインはランザの顔を見た。ランザはローエンの後ろに立って、クレインを見下ろしていた。

「すまないランザ……最後まで行けなかった……」

「……ああ」

「だから約束してくれ……『彼女』を救いだして……君の使命を果たすと……！」

ランザはクレインの手を握り、膝をついた。

「約束しよう。必ず果たす。……クレイン、お前は生涯で一番の友達。お前に会えて、良かった」

「……ああ……」

クレインは笑顔を見せ、ついに力尽きた。笑顔のまま……。

「旦那……様……！」

ローエンは涙を流し、クレインの死を悲しんだ。
ジュードもまた、助けられなかった事を悔やんだ。

「クレイン様！」

玄関が乱暴に開かれ、クレインに従う兵がやってきた。
兵はクレインの遺体を見ると息を飲み、その場に固まってしまった。

「……報告を続けて下さい」

ローエンが立ち上がり、兵士に問うた。
ここでグズグズと立ち止ってではクレインに申し訳が立たないと思っ
ての行動だった。

「は、はっ！ ラ・シュガル軍が領内に進攻！ 街中での戦闘が発
生している模様です！」

「何だかヤバくなってきたな」

「街にはミラ達がまだ……！」

「……私達はお嬢様達を保護しに参ります」

ローエンは再びクレインを見詰め、頭を下げた。

「旦那様をこのままにしていく事をお許しください……」

そして兵に向き直り、ここは任せると指示を出した。

「行こう！」

ジュード達は街へと走り出した。



街の中心に辿り着くと、ラ・シュガル軍にミラ達が連れ去られていくところだった。

「ミラ達が！」

「お嬢様！」

ミラ、エリーゼ、カレンは気を失っており、抗う術を持たないドロツセルは大人しく連れて行かれて馬車に乗せられた。

そして一人だけ、ラ・シュガル軍特有の赤い鎧を着ていない男がテイポを掴まんでジュード達を見ていた。

灰色の髪で赤のメッシュを入れ、前髪で目が隠れている男だった。

男は少しだけジュード達を見ると、馬車へと乗り込み、馬車は出発した。

駆け付けようとしたが、ラ・シュガル兵に囲まれ、向かえなかった。

「邪魔な奴らだ！」

アルヴィンは背中から大剣を抜き、銃を構えたが、ローエンがそれを止めた。

「お待ちなさい！　もう間に合いません。無駄に消耗するだけです」

「チッ……」

アルヴィンは武器をしまい、ローエンはラ・シュガル兵達の前へ躍り出た。

「あなた達も退きなさい！ 目的を果たした後の戦闘はただの蛮行……。同じ国民がこれ以上傷つき合ってはいけません！」

ローエンは老いた姿からは想像できない覇気を飛ばし、ラ・シュガル兵を退けた。

「一旦、邸に戻りましょう」

「うん……」

ジュード達は邸へと戻った。



邸へ戻った後、ローエンとランザはクレインの遺体をクレインの部屋に運び込み、暫くの間閉じこもった。
クレインとの別れをしているのだろう。

そしてランザとローエンは部屋から出てきた。

「……もう良いのか？」

「はい。略式ですが葬儀の手配も済ませました」

「どうしてこんなことに……」

ジュードは俯き、拳を握った。

「旦那様を襲った矢は、近衛師団用の特殊な物でした。そして、タ
イミングを合わせた軍本隊の侵攻……考えられる事は一つ。全ては、
ラ・シュガルの独裁体制を完全にする為の作戦です」

「ナハティガルの野望か……」

「ミラ達は何処に連れて行かれちゃったんだろう……」

「ガンダラ要塞でしょう。一個師団以下の手勢で複数の街を短期間
で攻めるのは、戦術的に無理があります。つまり、サマンガン海停
は襲撃を受けておらず、今だシャール家勢力下と考えるのが妥当で
す。となると、イル・ファンへとって返すはず。その帰路で駐屯で
きるのは、ガンダラ要塞しかありません」

「へ、へえ……そんなもんか」

ローエンのあまりにも的確な推測に、アルヴィンは驚いた。
ただの執事がここまで推測出来る事がおかしいのだから。

「助けに行かなきゃ!」

ジュードが今にも向かおうとしたが、アルヴィンが冷静に止めた。

「そんな焦ってもしようがないぜ？ 要塞なんだ、簡単にはいかないだろう」

「いえ、チャンスは今晚だけでしよう」

しかしローエンがそれを否定した。

「兵の士気も高いとは言えなかった。その上、戦闘後その地で休めず行雲。隙だらけの筈です。そしてこちらは図らずも先手を打っています」

「そっか、先に潜入してる味方がいるんだよね」

「すぐに発ちましょう」

ローエンとジュードは頷き、邸の外へ向かった。

だがランザとアルヴィンはすぐには向かわず、アルヴィンはローエンの後ろ姿を見詰めた。

「……何か聞きたいみたいだな」

「あれ？ ばれた？ あのじいさん、いったい何者？」

「……ただの執事さ」

ランザはそう言い、二人の後に続いた。

アルヴィンも今は答えてくれないと察し、大人しくついて行った。

これから、彼らの奪還劇が始まるのだった。

救出（前書き）

変な所があったらすみません。

救出

——痛い。頭の後ろが鈍器で殴られたように痛い。

牢獄の中で眼を覚ましたカレンは頭を摩りながら起き上った。

カレンは辺りを見渡したが、一緒に連れて来られた筈のミラ達はいなかった。

——別の牢獄かしら？ でも何で別々に……。

カレンは立ち上がり、足首に何かを取り付けられているのに気が付いた。

——何かしら……？ 何かの枷？

今考えても仕方が無いと頭を切り替え、牢の端により外を確認した。

——誰もいないわね……。この牢、壊せるかしら？

カレンは牢に手をかざし、武神技を放った。

「バニシングソロウ！」

パンッ！

光りの波動を掌から放ったが、乾いた音しか出なかった。牢も傷一つ付いていなかった。

——やっぱり、あの杖が無いと回復は兎も角、攻撃術は使えないわね。

本来、カレンの攻撃能力は低いのである。

あの時、バーミア峡谷での時の力は、ランザが店で買った杖による力だった。

——杖が無かったら何も出来ないなんて……。本当にこのままでランザと一緒にに行けるのかしら……。

「ん？ 眼が覚めたのですね？」

牢屋に誰かが入ってきた。

カレン達を襲った灰色の髪の男だった。部下らしき兵も二人、入ってきた。

「……私をどうする気かしら？」

「ほう、普通なら私の事や場所について聞くと思うのですがね」

男はカレンを見て、口の端を釣り上げた。

「貴方みたいな人に興味は無いわ。ミラ達は？」

「隣の牢ですよ。それより、貴女にお尋ねしたい事があるのです」

男は兵からカレンの杖を受け取り、カレンに見せた。

「この杖を何処で手に入れたのですか？　もの凄く膨大なマナが検出されたのですが」

「何処だって良いじゃない。教える必要はないわ」

「教えて頂かないと困りますね。もし他にあるのなら、それを回収し実験に使えますからね。それに、これを扱える貴女の身体も、ね」

「っ……！」

カレンは自分の身体を抱いた。

この男が自分の身体を舐めまわす様に見てくる視線に少なからず恐怖を抱いたのだ。

「さあ、答えなさい。この杖は何処で手に入れたのです？」

「……いいわ、教えてあげる」

カレンは不敵に笑いながら男を睨んだ。

「それはプレゼントされたのよ。貴方達なんかよりもずっと強い人にね」

「そうですか。では貴女には餌になって貰いましょうか」

「その必要は無いわよ」

「……？」

「もうこっちに向かつてる筈よ。貴方達にお仕置きする為にね」

「フハハ、そうですか。では期待して待ってましょう」

男は笑ってここから出て行こうとした。が、カレンが呼び止めた。

「待ちなさい。何で私をミラ達と別にしたの？」

「この杖を使役出来る程の人物を、マクスウェルと一緒にするのはどうかと思ったのがね。しかし、それは思い違いだったようです。もしそうだとしたら、とっくに檻を壊して、私達を薙ぎ払ってますよ」

「くっ……！」

カレンは出ていく男を睨みつけ、怒りを込めて檻を殴った。

——何でっ……何で私には力が無いのよ……！　これじゃあ肝心

な時に何も出来ないじゃない！ 村だって……！

カレンは牢屋の隅により膝を抱えた。

自分の不甲斐なさに涙を流した。

★

荒野、タラス街道をランザ達は駆け抜けていた。

途中で遭遇する魔物は、ランザ達の絶妙なコンビネーションにより撃退され、障害にならなかった。

「ジュード！」

「うん！」

ランザとジュードが共鳴し、魔物に向かって共鳴技リンクアーツを放った。

「「双乱牙！」」

ランザの蹴りだけの連牙弾、ジュードの連牙弾が組み合わさり、魔物を駆逐した。

「ランザさん、行きますよ！」

ローエンとも共鳴し、最後の魔物を狙った。

「「烈火掌！」」

ランザの掌底波、ローエンのファイヤーボールが組み合わさり、ランザの腕に炎が纏い、敵にぶつけて爆発させた。

「よし、行こう！」

ジュードが戦闘を走り、残りは後ろを走った。

「しかし、おたく、武器も使わずよく戦えるな」

「鍛えれば出来るさ。お前こそ……」

ランザは隣を走るアルヴィンを見て何か言おうとしたが、口を閉ざした。

「……何だよ？」

「いや、片手で大剣とはやるなってな」

「そりゃどうも」

それから魔物との戦闘はあったが、難なくガンダラ要塞に辿り着いた。

「鉄のお城……これがガンダラ要塞？」

警備兵からの死角に隠れ、ジュードはガンダラ要塞を見上げた。

「交易路の安全を守る、という名目で建設されました。けど、もうそんな面影はありませんね」

ローエンは悲しい表情をして呟いた。

「んで？　どうやって内通者と連絡するんだ？」

「こちらへ」

ローエンの案内で物陰を利用しながら、要塞の通風孔がある場所まで進んだ。

「ジュードさん。あの通風孔の内壁を一回、二回、二回と叩いてください。その後、三回、一回と返ってきたら手筈が整っている合図です」

ジュードはローエンに言われた通りにし、通風孔に上って叩いた。すると手筈が済んでいるという合図が返ってきた。

「返事が返ってきたよ」

「行きましょう」

ランザ達は通風孔に上り、中へ侵入した。中は異様な空気が充満しており、ピリピリと肌を刺激していた。

「ご苦労様でした。助かりましたよ」

ローエンが内通者の一人に礼を言った。

「カラハ・シャルの件は、要塞内でも話しに上がっています。こんな事になってしまって……」

「慰めてやりたいが、こっちも急いでな。中の情報を掻い摘んで教えてくれない？」

アルヴィンに言われ、内通者は情報を話した。

ミラ達は二階の牢に放り込まれており、足には拘束具が取り付けられており、そのまま要塞内に展開されている呪帯に踏み込むと爆発する仕組みになっているらしい。

ミラ達を助けるのにはその拘束具を解除する必要がある。その為に何処かにある制御室を捜さなければならない。

ランザ達はエレベータの鍵を受け取り、行動を開始した。

「……！」

「どうしました？ ランザさん」

エレベータに乗っている途中、ランザが何かに気づき、ローエンがランザに尋ねた。

「……ローエン、俺は二階の牢へ行く。お前たちは制御室を探してろ」

「え？ 何で？ 助けても拘束具が外せないんじゃない……」

ジュードがランザに尋ねる。

確かに、先に助け出しても、呪帯が邪魔をして行動できない筈だからだ。

「……牢にミラ達はいない」

「え?」

「いいから、行け。後でおち合おう」

「あ、ちょっと!」

ジュードの制止を聞かず、ランザは二階で降りて、一人行ってしまった。

「僕らも言った方が良かったかな?」

「いえ、我々は制御室を探しましょう。それに、ランザさんがああ言うのであれば、恐らくそうなのでしょう」

「根拠はあんのかよ?」

「ランザさんだからですよ」

ローエンはニツコリと頬笑み、アルヴィンは何も言えなくなった。



カレンはずっと隅で膝を抱えていた。今はもう泣き止んでおり、顔を膝に沈めて佇んでいた。

ガシャン。

誰かが牢の扉を開いた。

「おい、出ろ」

一人の兵士だった。その隣にももう一人立っていた。

カレンはゆっくりと顔を上げ、立ち上がり、牢の扉へと足を進めた。

「貴様を実験台にする。大人しくついて来い」

どうやらあの男がいった事をするつもりだ。
カレン彼らを睨みつけ、牢から出て――

「――バニシングソロウ！」

「うわっ!？」

二人の兵に手を向けて光りの波動を放った。

いくら威力が弱くても、光で目暗まし程度には使える。
カレンは相手が怯んだ隙を付いて部屋の扉へ走った。
そして扉に手をかけて開けようとした。しかし――

「っ！ 鍵が――！」

扉はロックされていた。逃亡に備えて態々ロックしていたらしい。
カレンは慌てて他の出口を捜したが、部屋から出る道はここしか無かった。

「貴様っ！」

立て直した兵士達がカレンの肩を掴み、カレンを殴り飛ばした。

「きゃあっ！」

「くそっ、舐めた真似を！」

「くっ……！」

失敗。もうこれで逃亡のチャンスは無くなった。
今度は手を拘束されてもう為す術が無くなってしまっただろう。

「立てっ！」

「い、痛っ……！」

再び拘束されて、髪を掴まれて乱暴に立たされた。

その時、兵士が扉に触れても無いのに開いた。

「ん？ がっ！？」

カレンを掴んでいなかった兵士が後ろへ飛ばされた。

「な、何だ！？」

カレンを掴んでいた兵士が扉の先を見た。
そこには黒い男が兵士を見下ろしていた。

「な、何だ貴様！？」

「ら、ランザ！」

その男はランザだった。
ランザはカレンを確認した後、兵士に向かって口を開いた。

「その手を離してもらおうか。髪は女にとって命とも言えるからな」

「ふ、ふざけるな！」

兵士はカレンを離して、持っていた槍をランザに向かって振り下ろした。

しかしランザは片手で掴み、捻って槍を奪った。
そして兵士の胸に突き刺した。

「がはっ……！」

刺された兵士を蹴り飛ばし、後ろで息絶えた。

「……無事なようだな」

ランザは屈み、カレンの足首の拘束具に触れた。

——まだ解除されていないか……。仕方が無い。

ランザは拘束具に触れている手に意識を集中した。
すると手から溢れだした黒いマナが拘束具を侵食してゆき、拘束具の連結部分を誘拐させた。

「凄い……」

「っ………！」

「え？　どうしたの！？」

マナが消えた瞬間、ランザが頭を押さえて表情を歪ませた。

「……問題無い。少し頭痛がしたただけだ」

「そ、そう………？」

ランザは立ち上がり、カレンに手を差し伸べた。
カレンはその手を掴んで立ち上がった。

「怪我は無いようだな」

「さっき殴られたけどね」

カレンの頬は赤く腫れていた。
カレンは手をその部分に当てて治療術を使用した。
僅かな効果ながらも、頬の腫れは退いて、もとの整った容姿になった。

「ああ、そうなのか。見えなかった」

「……良くそれで怪我が無いとか言ってたわね」

「無いんだろう？」

「今治したの！」

「それぐらい叫べるんなら問題ないな。それと、ほら」

ランザがカレンに何かを渡した。

それは奪われたカレンの杖だった。

「あ……」

「前を通りかかったマヌケに返してもらった」

「あ、ありがとう……」

カレンは杖を受け取り、大切そうに握りしめた。

「——良かった……！ これでランザの力になれる！」

「行くぞ」

「あ、ちょっと！」

歩き始めたランザの後をカレンは追った。

「み、ミラ達は助けないの？」

「もう牢屋にはいない。脱出したんだろう」

「……私を置いて？」

「見つからなかったんだろう」

「だといいけど……」

カレンはあの男にミラ達の場所を聞かされていたが、ミラ達はカレンの居場所を聞かされていなかったのだ。しかも、まさか隣にいるとは思わず、違う場所を捜し回っていたのだ。

「今はローエン達がミラ達の場所へ向かっている」

「場所を知ってるの？」

「いや、結果的にそうなる」

「……？」

カレンはランザの言っている事が解らなかった。

——結果的にって……何？ 預言？ え、まさかランザって未来が解るの？ だから戦えてたの？

カレンは盲目のランザが戦える訳を推測したが、あまりにも馬鹿らしい考えに頭を振った。

「しかし凄かったな、『指揮者』^{コンダクター}の力。援護のタイミングといい、精霊術の強さといい」

「へ？ 『指揮者』イルベルトがいるの!？」

カレンがランザの口から出た大物の名前に驚いた。

『指揮者』イルベルト。ラ・シュガルの伝説的な軍師で、その天才的な頭脳で勝利をもたらす人である。

三つの勢力が攻めて来た時、僅か一日で退けたとか。

「ん？ 今まで一緒にいただろう」

「一緒に？」

「……ローエンだ」

「ローエンさんが!？ 嘘っ!？」

まさかの人物に更に驚いた。
まさかあの執事の正体がそんな大物だとは予想もつかない。

「何時だったか、戦略ゲームをした時には五分もせずに負けたよ」

「それって貴方が弱過ぎるだけじゃ……」

「言っておくが、俺は学を持っているぞ。……たぶん」

ランザにしては珍しく弱気な口調だった。

恐らくあまり良くないのだろう。

カレンはまた一つ、ランザの事が知れた気がして嬉しくなった。

「ん？ 貴様ら！ 何をしている！？」

「おっと」

ランザとカレンの前に何人ものラ・シュガル兵が現れた。

「仕事熱心だな。放っておけば良いものを……」

ランザは溜息を吐き、向かってくる敵に構えた。

「やるぞカレン。さっさと片付けるぞ」

「簡単に言ってくれるわね！」

カレンも詠唱の体勢に入り、ランザの援護の準備を始めた。

「はあっ！」

「馬鹿が……」

ランザは振り下ろされた槍を身体を捻ってかわし、その槍を掴んで敵だけを蹴り飛ばした。

そして奪った槍で近くにいた敵を刺し、またその敵の槍を奪い、向かってきた敵に刺し、また奪い、刺した。

「こ、こいつ……！」

「炸裂せよ豪炎！ フォトンブレイズ！」

「うわあっ……！」

カレンが放った高熱の炎を凝縮させた術をぶつけた。

「この女っ！」

「女だから何よ!？」

カレンに近付いた敵は、カレンの杖の先端に付いている刃で斬りつけられた。
だが傷が浅いのか少し怯んだだけだった。

「よくもっ……！」

「知らないわ! バニシングソロウ！」

敵の目の前に手を翳し、光りの波動を放った。今度は杖の力があるので目暗まし程度だった威力は、爆発並みの力となり敵を吹き飛ばした。

「キリが無いな……カレン！」

「ええ！」

二人は共鳴し、敵の塊に狙いを付けた。

カレンはサンダーブレードを発動し、ランザはその射線上に飛び出た。

そしてランザは向かってくる雷をに右手を伸ばし雷を掴み取った。

「薙ぎ払って！」

「焼き切る！」

「「サンダーソード！」」

ランザは雷を横に薙ぎ払い、雷の爆発と共に敵を一斉に駆逐した。

「やったわ！」

「出直して来い」

勝利のポーズで決めて終了。案外ノリの良い二人だった。

「さて、敵が来ない内に進むか」

「ええ」

二人はローエン達を探し、奥へと進んで行った。



ランザとカレンがローエン達を探している頃、ローエン達はミラ達と合流していた。

そこでラ・シュガルの王、ナハティガルが現れ、灰色の髪の男、ジランドと共に立ち去っていった。するとミラは彼らを単身で追い駆けて行ってしまった。

ミラはナハティガルに追い付いたが、ナハティガルとジランドは呪帯の向こう側に進んでしまっていた。

拘束具を付けられているミラは越える事が出来ない。

「……答える。何故『黒匣^{ジン}』を使う？」

ミラはナハティガルに問うた。

『黒匣』とは、精霊と契約せずに術を使用できる様にする装置だ。本来、人が発するマナを精霊に与え、その代わりに術を発動させるのだが、『黒匣』はそれを無視して発動させる事が出来る。但し、精霊を“殺して”。

「何故民を犠牲にしてまで、必要以上の力を求めるのだ？ 王はその民を守るものだろうか？」

「ふん、お前には解るまい。世界の王たる者の使命を！」

ナハティガルはミラを鼻で笑い、自分の力を語り出した。

「己が国を！ 地位を！ 意志を！ 守り通す為には力が必要なのだ！ 民は、その為の礎となる。些細な犠牲だ！」

傲慢、天上天下唯我独尊。この王にはこのような言葉が相応しかった。

ナハティガルは王の力を己の為に使い、自身の腹を満たしているだけだった。

民の事など、少しばかりも考えていなかった。

「……貴様はひとつ勘違いをしている」

「何だと？」

「この様な物で自分を守らねば……『黒匣』の力など頼らねば、自らの使命を唱えられない貴様に出来る事など何もない！」

ミラは一歩前に出た。

「為すべき事を歪め、自らの意思を力として臨まない貴様などに！」

「はっ！ 儼に傷一つ負わせられぬお前が何を言っても、負け惜しみにはしか聞こえんわ」

「勘違いは一つだけではないようだな」

「何？」

ミラは走り出した。呪帯を越えて、ナハティガルに向かって行った。すぐさま拘束具が爆発した。が、ミラはそんな事お構いなしに跳躍した。

「はああああっ！」

「ぐおっ!？」

そして剣をナハティガルに振り下ろした。

ナハティガルはギリギリで防いだが、その場に崩れた。

「ばっ、バカな!？」

「……………」

また拘束具から爆発が起きた。

近くにいたナハティガルは爆風に巻き込まれ、大きく吹き飛ばされた。

「ふ、ふはは!　それが意志の力とやらか?　やはり傷一つ負わせられぬではないか」

ナハティガルは立ち上がる爆炎の中を見詰め、自分が正しいと笑った。

が、爆炎の中から何かがナハティガルに迫ってきた。

ミラだった。ミラは傷つきながらもその刃をナハティガルに向けながら迫ってきていた。

「陛下あ！」

「貴様に使命を語る資格は無いっ！」

しかし、あと一步の所でまた爆発した。今度こそミラは地に落ち、動かなくなってしまった。

「こいつ、何の迷いもなく……」

「うおおおおおっ！！」

「何っ!？」

爆炎の向こうから怒号が聞こえた。

ナハティガルはまだミラが向かってくるのかと思ったが、この声は男の声だった。

その声の主はナハティガルの目の前に現れた。黒い爪をたてて。

「ぬうつ!!」

ナハティガルはその場から飛び退く事で爪を避けた。

「な、何者です!？」

ジランドが目の前に現れた男に指差した。

「ナハティガル……!」

四肢に黒い爪を纏っている男、ランザはナハティガルを睨みつけた。

「貴様は……!」

「ぐっ——!?!」

ランザがナハティガルに近付こうと足を進めた時、激しい頭痛が起こり、その場に膝を付いてしまった。

「陛下! 今の内に!」

「う、ウム」

ナハティガルとジランドはランザが膝を付いている内にその場から逃げだした。

「ランザっ！……っ！？」

遅れてやってきたカレンがこの場の惨状に息を呑んだ。
爆発の跡が数か所もあり、その中心にミラが倒れているのだ。

「ミラっ！！」

カレンはすぐにミラに駆け寄り、ぐちゃぐちゃに潰れたミラの足に治療術を当てた。

「ミラーーーー！！」

ジュードが扉から飛び出してきた、カレンと倒れているミラを目の当たりにした。

「ミラっ！」

ジュードもすぐに駆け寄り、自分の医療の知識をフルに使って治療術を使用した。

「皆無事か!？」

ジュードの後ろからアルヴィン達が駆け寄り、息を呑んだ。

「ミラが! ミラが! エリーゼ、早く治療を! 早く!」

ジュードが泣き喚きながらそう叫んだ。

エリーゼも加わり、三人でミラの足を治そうとした。

「いたぞ! 脱走者はこっちだ!」

治療に専念したいがここは敵地のだ真中。すぐに発見され、敵が迫りつつあった。

「ともかく、これ以上は無理だ。カラハ・シャルルに戻ろう」

アルヴィンが冷静に判断し、ジュードにそう言った。

「非常態勢だ！　ゴーレムを起動させろ！」

敵はここで彼らを一網打尽にしようと、巨大な人型の兵器を二体起動させた。

ローエンはその光景を見て、慌てて皆を予め用意させておいた馬車に乗せようとした。

「急いで！」

しかし遅かった。馬車に乗り込む前にゴーレムが完全に起動し、馬車への道を塞いでしまった。

「遅かった！」

歩兵も集まってきだし、包囲されつつあった。

「……ローエン」

「ランザさん！　大丈夫なのですか！？」

ランザが苦しい表情でローエンの肩に手を置いた。

「俺が時間を稼ぐ。その内に脱出しろ」

「そんな!?! 無茶な!?!」

「駄目よ! だったら皆で対抗した方が――」

「今こうしている間にも!! ミラが死にかけているんだ!!」

感情の無い筈のランザが怒鳴り出した。ローエンの胸ぐらを掴み上げ、怒鳴った。

「さっさと行け!! ミラを死なせる訳にはいかないんだ!!」

「ら、ランザさん……!!」

ローエンから手を離し、ゴーレムに向かって走り出した。

「はあああああつ!!」

一体のゴーレムに跳び蹴りを喰らわし、その場に崩れさせた。

「早くっ!!」

「……皆さん!! 今です!!」

ローエンの合図により、ジュード達はミラを抱えてゴーレムの間を抜け、馬車に乗り込んだ。
しかし、カレンだけはその場に佇んでいた。

「カレンさん!」

「何をやっているカレン!!」

もう一体のゴーレムの気を引き付けながらランザはカレンに怒鳴った。

「嫌よ! 私も残るわ!」

「そんな、貴女まで!」

「チィッ!」

ランザはゴーレムが振り下ろした腕を避け、カレンに近付いた。

「私も一緒に――」

「お前はミラを助ける!!」

「きゃあっ!!」

ランザはカレンを掴んで馬車から出ていたアルヴィンに投げつけた。

「マジかよ!」

アルヴィンはカレンを受け止めた。

「行けっ! 絶対に死なせるな!」

「……わーったよ!」

「嫌っ! 離してっ!」

抵抗するカレンを強引に馬車に乗せ、扉を閉めた。

「どうかご無事で!」

ローエンは馬車を発進させ、ガンダラ要塞の外へ脱出した。

「……死ぬなよ」

ランザはそう呟き、目の前に広がる敵の塊に向き直った。

「俺も生きて帰るさ……」

ランザは長刀に手を掛けた……。



カラハ・シャルの邸では、暗い空気が漂っていた。

ドロツセルは兄を失い、疲れと悲しみがピークに來たのか部屋で眠りに付き、アルヴィンもこれ以上自分に出来る事は無いと判断し、部屋で休んでいた。

ジュードとエリーゼは一命を取り留めたミラの傍についていた。

一方、カレンは邸の外でずっと座りこんでランザの帰りを待っていた。

今は日も落ち、辺りは街の光りで照らされていた。

「……………」

「カレンさん」

カレンにローエンが話かけた。その手にはサンドイッチと紅茶を持っていた。

「夜食です。紅茶もお持ちしたので、身体を温めてください」

「……………」

カレンは夕食も取らず、ずっと邸の門を見詰めていた。

「……………」

「はい？」

「どうしてローエンさんはランザを置いて行ったの？」

「それは……………」

「『指揮者』なんでしょう？　なら他に方法を思い付いたんじゃないの！？」

カレンは泣いていた。

自分はパートナーになった筈なのに、パートナーの筈なのに、力に

なれなかった。

自分の非力さに悔しさと怒りを感じた。

「ねえ！？ 考えられたんでしょう！？」

顔を膝に埋めたまま泣き叫んだ。

ローエンはカレンの気持ちが痛いほど理解出来た。

自分も嘗て何も出来なかったからだ。いや、カレンの方が辛いかもしれない。

カレンは立ち向かおうとしたが、力が無い故に無理やり退けられた。だが自分は……。

「――彼は必ず帰ってきます」

「何を根拠に……！」

「彼は隠し事はしますが、嘘は付きません。短い時間でしたが、私達はランザさんの事を知れる事が出来ました」

「………」

「彼は口にした事を必ず実現させていました。それはもう、クレイン様とドロツセルお嬢様も驚かす程に」

どんな無茶な事でも実現させた。

大勢の山賊に襲われている民を一人も傷付けずに助け出し、魔物の

群れが商人を襲っていると聞けば、必ず助け出し、失敗した事は一つも無かった。

「ですから今回もまた、驚かせてくれますよ」

「……………」

カレンは顔を上げてローエンの顔を見た。ローエンはニツコリと笑って見せた。

「さあ、紅茶が冷めてしまいますよ」

ローエンは紅茶を差し出し、カレンはゆっくりと手に取った。

「……ありがとう」

「いえいえ」

カレンは少しだけ笑顔を見せ、紅茶を飲んだ。

ローエンが淹れてくれた紅茶は絶品だった。身体の芯から暖まる感じがした。

「ミラは？」

「この数刻が峠です」

「そう……。ねえ、ローエンさん。ランザがあんなに怒鳴ったのって、前にもあったの？」

ランザのあの様子は普段とは懸け離れていた。

冷静沈着、無表情なランザが顔を強張らせて怒鳴ったのだ。

「いえ……。少なくとも、私は知りません」

「そう……」

——ミラを死なせるな……。か。どうしてあまり面識のないミラをそこまで……。

確かに、目の前で知り合った人が死んでしまうのは嫌だが、あんな危険を冒してまでする事なのだろうか。

——そう言えば、ミラがランザを見る目……。何か違和感があったような……。

「……ん？ あれは……」

ローエンが何かに気付いた。カレンはローエンの視線の先を見た。

そこには一頭の馬に跨ってこっちへ歩いて来る人影があった。

「……ランザ？」

「そうです！　ランザさんですよ！」

カレンとローエンはランザの方へ駆け寄った。
しかし、駆け寄る前にランザは馬から落ちた。地面に倒れたランザはピクリとも動かなかった。

「ランザ!？」

カレンは倒れているランザに駆け寄り、抱き起そうとして手を触れた。

びちゃ……。何か液体みたいなのがランザの身体中に付いていた。

「何……?」

暗くてよく見えなかったが、次第に街の明かりでそれがはっきりと見えた。

真っ赤でドロ黒い液体……夥しい量の血だった。

「ランザっ!?! ランザ!! しっかりして!!」

「これは……!!? すぐに医者を起こして来ます!! カレンさんはランザさんの中へ!」

「ランザ! ランザア!!」

泣き叫ぶカレンの腕の中で、ランザは死んだように眠っていた。

その力は諸刃の剣（前書き）

名前が被っているキャラがいたので、カレンの妹の名前を“エレン”から“セ”レンにしました。

申し訳ありません。

その力は諸刃の剣

ランザは運び込まれ、服を脱がされ医者による治療が行われた。途中、ジュードも加わり、ランザの治療が行われた。終わったのは日が昇りだした頃だった。



ランザは一命を取りとめ、今はベッドに寝かされ今は深い眠りについている。

カレンはランザの傍に付いてランザの手を握っていた。ずっと泣いていたのか、目は赤く腫れ、涙の跡が付いていた。

「……ランザ、どうして……」

今はサングラスを取り外しているランザの寝顔を見て、何故こんなになるまで無茶をしたのか考える。

——そんなにミラが大事なの？　ハ・ミルの街で話をただけで、
どうしてこんな事が出来るの？

カレンは内心、悔しかった。相棒である筈の自分より、少しだけ話した相手の方が大事にされていると思い、嫉妬に似た何かを抱い

ていた。

「カレンさん」

「……ローエンさん」

ローエンがやって来て、ランザとカレンの傍に寄った。

「少しお休みになられた方がよろしいですよ。もしカレンさんまで倒れられたら、皆さんが心配で押し潰されてしまいますよ」

「……ねえ、ローエンさん。どうしてランザはこうなってしまったの？」

カレンはランザの手を握り、ローエンに顔を向けないまま尋ねた。

「ローエンさん。ランザを見た時、何かに気付いていたわね。何か……知っているの？」

「……………」

ローエンは少し考える素振りを見せ、部屋の隅に立て掛けられているランザの長刀を手を取った。

「これは、ランザさんの力であり、同時にランザさんの命そのものなのです」

「え？」

「……二年前、私達とランザさんが知り合い、暫く経った頃です。この街に、一頭の靈力野の突然変異を起こした巨大な魔物が襲って来ました。ランザさんは立ち向かいましたが、今よりは強くはありませんでした。その魔物に追い詰められ、ランザさんは初めてこれを抜きました」

ローエンはカレンに長刀を見せ、ランザの顔を見た。

「この武器は、ランザさんの命……『マナ』を暴発させ、力を溢れださせるのです」

「マナを……？ 暴発って……」

「しかし、代償がつきます。……身体を内側から破壊され、いずれ死に至る……」

「なっ……！？」

死。とても高い代償だった。カレンは目を見開き、ランザの顔を見詰めた。

「その時にも、ランザさんは血を吐きだし、一日は目を覚ましませんでした」

ローエンは長刀を元の場所に戻し、窓の外を眺めた。外は快晴だった、ローエンの顔は曇っていた。

「カレンさん。貴女はランザさんがマナを使用した時、苦しんだ姿を見ましたか？」

「え、ええ……。頭痛がしたりしていたわ。……。まさか!？」

「ええ。ランザさんはマナを使用する度に、身体を破壊されているのです」

それを承知で使用するランザを理解出来ない。少なくとも、カレンには出来なかった。

命を削ると分かっていて、何故使用するのか。これもまた、ミラの為なのか。カレンは自分の内からどんどん出てくる何かを必死に抑えた。

「カレンさん。私はもう一つだけ、ランザさんの事を知っています。ですが、これは本人から聞いて下さい。私からは言えませんので」

「……そう。ありがとう」

「いえいえ」

ローエンは優しく微笑み、扉の方へ向かった。

「ああ、そうでした」

ローエンは扉に手をかける前に、くるりとカレンに向き直り、これまた微笑んで口を開いた。

「ミラさんが峠をこえましたよ。後は目を覚ますだけです」

「ミラが……それは、よかったわ」

カレンはそう言ったが、内心は違った。このまま目を覚まさなければ良いのにと、一瞬だけ考えてしまい、自己嫌悪に陥った。

——何て醜いの、私は。ただランザは助けたかっただけ。そうよ、知り合いが死んでほしくなかっただけよ。

カレンはそう思わないと今にも暴走しそうで恐かった。

自分がこんなに醜い女とは思ってもみなかった。それを認めたくなかった。

「……お父さん、お母さん、セレン……。私、どうしたら……」

死んでしまった家族の名を呟き、ベッドに顔を埋めた。



夕方。ミラが目を覚ました。
しかし、とても残酷な現実を突き付けられた。

ミラの足が動かなくなってしまった。感覚も無く、ピクリとも動かせない。

しかしミラは、そんな身体になっても自分の使命、リーゼ・マクシアを守るという使命を実行しようとした。

ジュードはミラを叱り付けたが、ミラは自分の意志を曲げなかった。ならばとジュードは一晩考えた。ミラの力になろうと。

ジュードの父は医者である。そしてその父は足の動かなくなった患者を治した事があるのを思い出し。

ジュードはミラを自分の故郷、ル・ロンドへ向かう事を提案した。ミラはありがたくその提案を受け取り、今日中に向かう事にした。

「……ジュード。アルヴィンはどうした？ ランザとカレンの事は聞いたが……」

「……アルヴィンは……もう僕たちとは来ないって。次の依頼主の仕事に行くって」

「……そうか。礼を言いたかったのだが」

「また……会えるよ」

ジュードは悲しく笑った。ミラはジュードの様子に少し首を捻ったが、気にしなかった。

「……ミラ」

ジュードに背負われて部屋を出た時、カレンとはち合わせた。

「カレン。ランザはどんな様子だ？」

「……まだ眠ってるわ。一度も起きてない」

「……そうか」

ミラはごく普通に尋ねたのだが、カレンが少しだけ顔を歪めた様な気がした。ミラはそれには気付かなかった。

「ジュード。ランザに一目会いたい」

「う、うん。わかっ——」

「駄目よ！」

カレンが大きな声でそう言った。ミラとジュードは驚いてカレンを見て、カレンは大声を出してしまい、口を押さえた。

「あ、えと……今ランザの顔が見えてて、その……ランザは顔を見られたなくて、その……！」

カレンは慌てて理由を述べたが、本心はこう思っていた。
会わせたくない。会わせてもし目が覚めたら、自分はどうかになりそうだと、考えてしまったのだ。

「そ、そうか……。なら、一言伝えておいてくれ。ありがとう、と」

「え、ええ……。分かったわ」

カレンが頷くとミラは満足し、ジュードと共に邸を出て行った。
カレンはランザが眠っている部屋に戻り、ベッドの横に腰かけた。

「……最低ね、私」

カレンは自分の醜さに悪態をつき、それからランザの看病を続けた。

★

約束……。そう言ったのは誰だっただろうか。

一人の少年が一人の少女と指切りをしていた。

少年は少女を守ると、少女は少年と共にいると。互いに約束し合った。

場面が変わる。少年が吹雪の中、また違う少女と共にいた。二人は一緒に黒い何かを掴み、闇に吞まれた。

そして戻って来た時には少年と少女は呪いを受けていた。

少年は自身の命と感情、少女の命を代償に、絶対的な力と孤独を手に入れた。

少年はやがて青年となり、世界を周り、約束を果たす事を目指した。

その先に、何が待っているのかも知らずに……。

★

ランザが目を開けると、赤い夕陽が部屋を照らしていた。起き上がろうとしても、全身に痛みが走り起き上がれなかった。

「……生きてるのか？」

「ランザ！ 起きたのね！」

部屋に入ってきたカレンがランザに駆け寄った。

「カレン……？」

「もうっ……心配、させないでよっ……！」

カレンは涙を流し、ランザの手を握った。

ランザは少し驚いた顔をしたが、すぐに元の無表情に戻り、手を握り返した。

「そうか……それはすまなかったな」

「そんな言葉だけで済むのですかっ！」

殴った。意識を取り戻したばかりのランザの頭を殴った。それも思いつきり。

「まったくもうっ！ 一人で無茶して血だらけで帰って来て、口にした言葉がすまなかった！？ 馬鹿にしないで！」

「ぐっ……」

また殴った。容赦が無い。

「約束して！ 無茶をするなら私も連れて行きなさい！ 私はパートナー何でしょう！？」

「……。……約束は出来ない」

「どうして！？」

「お前は俺を知らなさ過ぎる。俺には――」

「だったら！ 全部話さない！ 一から十まで全部！ 一字一句間違わずに！」

涙を流しながらランザを睨みつけた。絶対に話してもらうまでは諦めないと、目がそう言っていた。

「……………」

ランザは普段は隠している目でカレンを見つけた。少しすると目を逸らし、サングラスを探しだして手に取った。

「目を隠さないで」

しかしカレンに奪われ、目を隠す事が出来なかった。

「……後悔するぞ？」

「しないわ」

「死ぬかもよ？」

「生きてみせるわ」

「怒らないか？」

「怒るわよ」

「解散するかもよ？」

「死んでもついて行くわ」

「ほ——」

「くどい」

若干、言いたくない要素が出て来たが、カレンは何がなんでも聞き出す決意だった。杖までも取り出してランザに突き付けているのだから。これではもう脅迫である。

「……全ては教えない」

「どうして!？」

「自分で探せ。ヒントは出すから」

「……いいわ、それで。教えて」

カレンは杖を下ろし、腰を下ろした。ランザは窓の外を見ながら口を開いた。

「俺は、約束を果たす為に行動をしている」

「約束？」

「質問は駄目だ」

「……いいわ」

「……その約束を果たす為に、俺は一人の少女と共にある禁忌に手を出した。そのおかげで俺は力を手に入れたが、俺と少女は呪いを受けた。俺は感情を失い、力を使う度に命を削られ、少女は時が刻まれる度に命を喰らわれ続けている。俺は約束を果たす為ならどんな事でもする。それが例え、仲間を犠牲にしても」

最後にカレンを見てそう言った。仲間を犠牲に……つまりパート

ナーであるカレンを犠牲にするかもしれないと言ったのだ。約束を果たす為に。

「……………」

「……さて」

ランザは置かれたサングラスを掴み、装着した。そして先程まで動けなかった身体を軽々と動かし、ベッドから起き上がった。

「俺はどれくらい寝ていた？」

「五日……」

「五日もか……」

——だいぶ負担がかかっていたんだな。

ランザは立て掛けられている長刀を手にし、柄である龍の口を指でなぞった。

「カレン。俺はこれからア・ジュールに入り、シャン・ドウに向かう」

「え？」

「やる事が出来た。……来る気はあるのか？」

覚悟があるのなら来い。ランザはそう言った。

随分勝手な事だ。いや、最初から言っていた。自分と来るのなら死を覚悟しろと。それが具体的に見えるようになったただけだ。なら当然、答えは決まっている。

「当然。私がいないと回復出来ないでしょう。それに、魔物ばかり食べさす訳にもいかないわ」

「失敬な。魔物程美味しい物は無い」

「それは無いでしょう……」

相変わらずの偏食っぷりに頭を抱えた。だがこれで良い。これが良いとカレンは感じた。



ランザが目覚めた事を聞かされ、ローエンとドロツセル、そしてエリーゼとティポが喜んだ。医者ももう何ともないと驚きながらそう判断した。

「そうか……ミラが」

ミラが足に怪我を負って動けなくなり、治療するためにジュードの故郷へ向かったと聞き、ランザは何かを呟いた。

「ミラの命が助かったのは、ランザさんのおかげですよ」

「ドロツセル。俺は道を作っただけだ。命を助けたのは医者とかレオン達だろう」

「それを行う事が出来たのはランザさんのおかげですよ」

「……………」

ドロツセルとローエンにそう言われ、ランザは頭をポリポリとかいた。

「……ローエン。いきなりで悪いが、“あの件”の準備を今日明日までに頼めるか？」

「何ですと？ そんな、まだ病み上がりではないですか！　せめて一週間は安静にして下さい！」

ローエンが慌ててランザを引きとめる。が、ランザは聞かなかった。

「頼む。もう、時間が無い」

「……分かりました」

ローエンは何も言わずに渋々と頷いた。その顔はやはり認めたくないようだった。

「すまない」

「ランザさんも……いなくなるん……ですか？」

エリーゼがティポに顔を埋めながら尋ねて来た。なんだか泣きそうな顔をしていた。

エリーゼはミラとジュードが去ってしまった事を悲しんでいた。

「ごめんね、エリーゼちゃん。でもまた会いに来るから」

「……はい」

「何でだよー！ 一緒にいようよー！」

「ごめんね」

カレンは一人と一匹を宥めた。子供の扱いに慣れているのか、優しい口調で接した。

この日の夕食はこれでもかというぐらい豪勢に振舞われた。



夜。ランザはカレンと共にある場所に来ていた。目の前には一つの墓石。そこにはクレインの名前が掘られていた。

「……………」

ランザが眠っている間に葬式は済まされ、遺体も埋められた。ランザは黙想をし、冥福を祈った。

「……………なあ、カレン」

「何？」

「……………家族が死んだ時、どう感じた？」

「え……………？」

突然の言葉にカレンは言葉を失った。家族の死の事を聞かれるとは思ってもみなかった。

「いきなりすまない。ただ知りたいだけなんだ。親しかった相手が死んだ気持ちを……」

「あ……」

そう、ランザは感情が無い。だから頭で理解し、それを表情で“作って”表している。だから理解していても感じてはいなかった。そして今回は死。死を知らないランザにはどんな顔をすればいいのか、どんな感じにすればいいのか分からないのだ。

「親友が死んだのなら悲しむべきだと思う。だが、どんな風に悲しんだら良いのか分からない」

「……忘れなければ良いと思う」

「忘れない？」

「うん。ずっと、ずっと心にしまっておくよ。一緒に過ごした時間」

「……そうか。カレンも忘れていないのだな」

「ええ……」

「だから毎晩泣いているのだな」

「え……？」

——泣いている？ 私が、毎晩泣いているの？

ランザの言葉にカレンは顔をあげた。

「気付いていなかったのか。お前は毎晩、名前を呟きながら泣いていたんだ」

「そう……なの」

それも当然である。家族どころか知り合い全てを失った傷は大きい。いくら強がってみせても、絶対に何処かで泣いているのだ。

「涙……か」

——俺が泣いたのは一体どれほど前だったか……。

嘗て、ランザも感情は存在した。記憶にあるのだ。笑って、喜んで、驚いて、悲しんで、怒って……。確かに感情は存在していた。

——今はもう、感情なんかはどうでもいい。もっと力が欲しい。これ以上何も失わないように。

「もう戻ろう。冷えて来た」

「いいの？」

「ああ。……クレイン。お前との約束も果たしてみせるさ」

その言葉を最後に、二人はクレインの墓を後にした。

旅立ち（前書き）

さてさて、ここからはオリジナルの話になって行きます。

ミラの足が完治し、ミラ達がシャン・ドゥに到着する辺りらへんまでですが。

それとですね、スマートフォンに買い換えたときに付いて来たパソコンを使用しているのですが、前に使用していたパソコンよりも滅茶苦茶扱いづらい！

文字を変換するのに何度も変換キーを押さないといけないし、訳の分からないお知らせ画面が出たり面倒くさい！

もし変な事になってたら嫌だなー……。まあ、この話はどうしても良いです。

旅立ち

カラハ・シャルルの入り口に、ランザとカレン、ローエンとドロツセル、エリーゼとティポがいた。

今日はランザとカレンがシャン・ドウに向けて出発する日である。ランザの身体もすっかり治り、天気も良く、とても理想的な出発日和であった。

「手間を掛けさせてしまったな」

「いえいえ、クレイン様が用意してくださった物を纏めただけですから」

ランザは旅に必要な道具が入っている鞆と、もう一つ、カレンに中身を教えていない袋を持っている。

「ランザさん、カレン。どうかお氣をつけて。また遊びにいらしてくださいね？」

「ええ。きつとまた来るわ。エリーゼちゃんも、元気でね？」

「はい……」

「何でだよー！ もっと一緒にいようよー！」

ティポがぶんすか怒るが、それで旅立ちを取りやめるには行かない。少なくとも、ランザは絶対に止めないだろう。

「ではそろそろ行こう」

「ええ」

「お気をつけてください」

「また会いましょう」

「バイバイ……です」

「ぶーぶー！」

ランザとカレンは三人と一匹に見送られてカラハ・シャルルを出て行った。



ランザとカレンはサマンガン海停からラコルム海停行きの船に乗り、暫しの休憩を堪能していた。

カレンはまだ海を珍しく感じているようで、ずっと船の端で海を眺めている。

一方ランザは壁にもたれ掛かり、クレインが用意してくれた物を

眺めていた。
黒く綺麗な水晶玉。林檎くらいの大きさで、微かに黒く光り輝いている。

「それは何？」

カレンがランザの持っている物を除いた。
ランザは焦るでもなく普通に説明し始めた。

「シャドウクリスタル闇水晶。その名のとおり、闇のマナで出来た水晶玉だ」

「綺麗……。これをどうするの？」

「プレゼント」

「誰に？」

「女に」

ピキッ。カレンの周りの空気が固まった。ランザは珍しく冷や汗を流し、急いで水晶玉をしまいこんだ。

「誰にかしら？」

「お、お前の知らない奴だ」

「教えてくれてもいいじゃない」
と、カレンはランザの腕を抓った。

「し、知ったら後悔する。止めておいたほうが良い」

「それは、私が決めるわ」

「そ、その内分かる。言っただろう。自分で探せと」

「むっ……」

そう言われてはしょうがないと諦めたカレンは、ランザの腕を離した。

――何故カレンはこんなに怒っているんだ。今の会話の中に原因となるワードは無かったはず。

ランザは先ほどの会話を思い返してみるも、まったく原因が分からず、船に乗っている間はずっと首を傾げていた。



ラコルム海停。常に夕暮れに包まれた黄昏域。感じ方によってはロマンチックな地方である。

ランザとカレンは海停に降り、カレンがお腹が空いたと訴えを出したので昼食に入った。

どうやらカレンは見た目に反して食欲大せいのようだ。

「ここからはラコルム街道を歩いてシャン・ドウに入るぞ」

「え？　でもラコルム街道には主が居るって話だけど？」

「ああ。だが今は地^{ブラン}霊小節^{ラノーム}に入って地場^{ラノーム}になっているから、霊勢の影響を受けるそいつは今は大人しくなっている」

「そういえば、そうね。だったら安心かな」

と言いながら目の前に出されている肉料理をムシャムシャと頬張るカレン。

ランザはさり気なく自分の皿をカレンの方に寄せた。すると反射的にか、カレンはその皿に手を伸ばし肉を奪った。

——不味いな……。用意してもらった金が無くなるかもしれん。

ランザは不安を拭い切れなかった。



時は遡り数日前。ジュードとミラはル・ロンドに到着し、そこでジュードの幼馴染、レイア・ロランドという少女と再会した。

ミラは街の診療所に運ばれ、ジュードの父であるディラック・マティスに足の検査を受けた。

「しかし、どうしてこんなになるまで無理をした？」

「そうしなければならなかったからだ」

ミラの言葉に言葉を失う。普通に考えてありえない話だ。足が潰れるまで無理をする前に、足が潰れそうな痛みを感じた時点で普通は動けなくなるものだ。

少なくとも、自分はそうだとディラックは思っている。

「もしそれで足が一生使えなくなったらどうする？」

「それでも構わない。私は成すべき事を成し遂げるまでだ」

「馬鹿げてる……」

そう言いつつ、ディラックは検査を進めていく。とても優秀な医師と呼ばれているだけあって、その手際は素晴らしかった。

「……………」

ミラは徐に首から掛けている首飾りを取り出した。

それは過去にイヴから貰った蒼いクリスタルが付いている首飾りだった。

——私がこんな状態になっていると知ったら、イヴは怒るだろうか？

過去にミラが使命を果たそうとし、軽い怪我を負った事がある。その時イヴは物凄く怒り、軽く六時間ほど説教したのだ。

まだ俺たちは幼いから無理をするな、いくら精霊の力があるからといって危険な事はするなと、ずいぶんと怒られた。

しかしそれも、あの事件以降、まったく無くなってしまったが。

「そ、それはっ……!？」

「ん？」

ディラックが首飾りを見つめて驚いていた。しかもその表情は信じられないものを見たような顔をし、肩も僅かに震えていた。

「どうした？」

「そ、それをどこで……」

「ん？　これを知っているのか？」

———そういえば、この首飾りはイヴと一緒に置かれていたそうなの

……まさか!?

「おい、この持ち主を知っているのか!？」

もしかしたらイヴの親かも知れないと思い、ミラは尋ねた。

「い、いや……。見間違いのようだ。死んだ友人が似たような物を持っていたものでな」

「そうか……」

「……」

「これは私と共に育った者が持っていたものでな。その者は捨て子で、一緒に置かれていたのだよ」

「……その人は、今は？」

「……生死不明だ。魔物と一緒に消えてしまったよ」

「……そうか」

それから、特に会話も無く検査を終了させた。



時は戻り、ランザ一向。

二人は昼食を済ませ、ラコルム街道を“走っていた”。

何故歩かず走っているのかというと、彼らの後ろを走っている存在が原因である。

「いやああああっ!!!!」

「何故だ、何故ブルータルが活発になっているんだ!？」

岩のような皮膚を持ち、これまた岩のような巨大な角をいくつも生やした巨大なボアみたいな魔物。これがラコルムの主である。

「くそっ、まさか靈勢が変化していないのか!？」

「どうしてよおおおっ!!!？」

「知らん! とにかく走れ! 今は戦闘を避けたいからな!」

ランザは水晶の入った袋を落とさないように持って走り、カレンも全力で走った。

「はぁ、はぁ、はぁ、もう駄目だわ……!」

「死ぬ気か！？ 立ち止まるな！」

カレンの身体能力は決して高くない。故に体力の限界を迎えだした。

「く、こうなれば！」

「ふえっ！？」

ランザはカレンの背中と膝裏に手を回し、持ち上げた。所謂お姫様抱っこである。

「しっかり捕まってる！」

「ふえっ？ ふあああああつ！！？」

カレンは二つの意味で絶叫を上げた。ランザの身体能力による疾走と、少なくとも異性として意識しだしている相手に乙女の夢とも言える抱っこに叫んだ。

『ブオオオオオオツ！！』

「煩い！ 食らうぞ！」

「きゃああああっ!!」

二人は逃避行を続けた。主が追いかけて来なくなるまでに、数刻かかったそう。



二人は…いや一人は走ってシャン・ドゥに辿り着き、街の入り口に腰を掛けた。

「な、何なんだあの野郎……! 結局そこまで追いかけてきたぞ……!」

「ふあー……」

「……ん? どうした、カレン?」

「あー……へっ!? な、何でもないわ!」

カレンは先ほどまでの逃避行を、ランザに悪いと思いながら満喫をしていた。

お姫様抱っこされながらの逃避行……。これで“愛の”と最初に付けばもう完璧だろう。

カレンはまさにそう考えていた。

「さ、さてと！ 早くランザの用を済ませましょ！」

「ん？ ああ、まだ先に進むぞ」

「へ？」

カレンはてっきりシャン・ドウに用があるのかと思っていたので、まだ先に進むとは思っても見なかった。

「ちょ、ちょっと待ちなさい。……先って、まさか」

「モン高原。そこにある“国”に用がある」

「……“国”、ですって？ どういうこと？ アジュールの真ん中に国なんてある筈無いじゃない」

しかも首都の目と鼻の先。そんな所に国が存在するはずが無い。

「……そうか。カレンなら知ってると思ったんだが」

「……何よ？」

「聞いたことないか？ 『ラベルト』という名前」

「ラベルト……？ 何処かで……」

「……『ラベン』」

「――どうして」

ラベン…それはカレンの村の名前。カレンの村は名前も存在も忘れられ、最早地図からすらも消されている村だ。

その村の名前をランザは口にした。

「ラベルトは特別な国でな。ラ・シュガルやア・ジュールなどの国のように、一大陸を支配しているわけではない。集落のように世界の彼方此方に存在している」

「集落？ そんなの、国なんかじゃないわ」

「そんなのとは……。ラベンはそのランベルの一つなんだぞ」

「なっ、嘘！？ ア・ジュールじゃないの！？」

確かに、カレンが住んでいた場所はア・ジュールだった。だが、それは違った。ランベルという国の一つだったのだ。

「で、でもどうしてそんなことを知ってるの？」

「……俺は数年間ランベルで暮らしていた。カレンの村に辿り着いたのも、ランベルにいたから辿り着けた」

「そ、そういえば……村の言伝えでランベルって名前が……」

「ま、そういう事だ。知っているか？　ランベルの首都には女しか居ないんだぞ？　軍も政治家も全員」

「……女、ですって？」

また、カレンの周りが凍りついた。今までの驚きの表情から一変、表情は消え、冷たい視線がランザを射抜いた。

「貴方……そんな中で過ごしていたの？」

「な、何故そんなに怒っているんだ？」

「答えなさい。まさか、手を出したりしていないわよね？」

「するか。それ以前に、俺は……」

「……ランザ？」

ランザは何かを言おうとして口を閉じた。しかもその顔を何処か悲しそうで、辛そうだった。

カレンは疑問に思ったが、もしかして聞いてはいけない事だったのかと察し、話題を変えた。

「まあ、いいわ。それで、その国？　にはいつ向かうのかしら？」

せめて明日にしてほしいのだけれど」

「……ああ。俺も疲れた。今日は宿を取って明日に備えよう」

「ええ」

二人は歩きだし、宿の部屋を取ることにした。
その後、ランザとカレンは街で道具の買出しをしたりと、明日に備えた。



真夜中。ランザはロビーで一人、水晶玉を手にはソファに座っていた。

水晶玉は黒く光、薄っすらとランザの顔を照らしていた。

——持っているだけでこの反応……流石はクレイン。良い出来だ。

水晶玉を投げたりして弄っていた動きを止め、サングラスを外した。

この暗さでこの時間帯でランザの姿を見るものは居ない。

ランザを閉じた瞼を触り、拳を握った。

——やってやるさ。例え恨まれようとも、俺は約束を守る。

ランザはサングラスを着け、水晶玉をしまった。
ソファから立ち上がり、自分の部屋に戻った。

目が見えないランザが一人で階段や障害物を避けたりは出来ないはずなのだが、そんなのは関係無しにすいすいと動き、自分のベッドに腰を掛けた。

が、そこで違和感に気づいた。自分のベッドが膨らんでいる。しかも上下に動いている。

ランザは見えない目でその膨らみを見た。すると溜息を吐き、掛け布団を捲った。

「すうー…すうー…」

カレンが寝ていた。部屋を間違えた。いや違う。ランザは決して部屋を間違えては居ない。というか、ランザとカレンの部屋は同室である。しかしベッドは二つある。ならベッドを間違えたのか。それも違う。これはランザのベッドである。

なら何故か？ それは単にカレンが寝ぼけて間違えているだけである。

「……はあ」

小さく溜息を吐き、布団を掛けなおす。

そして何となく、ランザはカレンの頬を撫でた。

——今日は泣いていないのか？ 泣いた後の感じがしない。

ランザはカレンが毎晩泣いていることを知っている。

ランザはカレンを助けたときから常に気を掛けている。宿で別の部屋になったとしても、扉の前まで立ち寄り、気配でカレンの様子を感じ取り、ストレスで身体を壊さないように気を使ったりしていた。

家族を、知り合いを一晩で亡くしたカレンを、自分の目的に付き合せている。ならせめてカレンを元氣付けてやらなければならない。それがランザにとっての、最大限のお礼なのだ。

「……良い夢を、カレン」

カレンの髪を撫で、ランザもベッドに潜り眠りについた。



翌朝、二人は朝食を取り、モン高原に向けて出発の準備をした。モン高原は一面雪景色で、雪が降っている。だから二人は暖かい格好をしていくと思いきや、コートを着てるんだから別に要らないだろう、という結果になり暖かい飲み物などしか用意しなかった。

「さてカレン。ランベルに入るにあたって、一つ注意点がある」

「注意点？」

モン高原に入る直前、ランザはカレンに向き直って指を一本立て

た。

「簡単なことだ。ランベルに入ったら俺を一切庇うな」

「え？　どういこと？」

庇うな。それではまるでランザが何か被害を受けるような言い方だ。

「何れ分かる。とにかく庇うなよ」

それを伝えると、ランザはモン高原に足を踏み入れた。

カレンも納得いかなかったが、どうせ断れないんだろうと観念して後を付いて行った。

モン高原に入ると、賊紛いな者や魔物が襲って来たりしたが、そこはランザの蹴り技などで撃退。カレンも火系の精霊術で応戦し、辺り一面の雪を消し去ってしまった。

「ふう……ちょうど良い運動になるな。身体が暖まる」

「そうね。でも汗で身体がベトベトよ……。乾いてきたら風邪を引いちゃうわ」

「なら乾かさなければ良い」

「何言って……」

カレンは言葉を止めた。なぜなら目の前に魔物の大群が現れたからだ。

「ちょうど良いじゃないか。時間も頃合だ。飯にするぞ」

「ランザが言うとな本当になっちゃうから！」

わーわー喚きながら二人は魔物に向かって構えた。ランザにいたっては頭の中でメニューを考えているかもしれない。

『ガアアアアア!!』

蒼いスノウドラゴンがランザに牙を向けてくる。ランザはそれを冷静に回避し、ドラゴンの腹に蹴りを入れた。

「虎牙連脚！」

上に跳びながら回転蹴りを二回喰らわせ、最後に踵落しで地面に叩きつけた。

「崩襲脚！」

そこに追撃で蹴りを落とした。

『グラアアアアアッ！』

もう一体のドラゴンが襲い掛かるが、長刀でドラゴンの顎を弾き、跳躍した。

「裂空脚！」

放物線を描きながら高速の回転蹴りを浴びせ、ドラゴンを沈める。

「業火、天を貫き敵を焼き払え！ フラムルージュ！」

カレンは魔物の足元に陣を出現させ、その陣から発生する炎の柱で敵を焼き払う。

「私の眼下に広がる痴れ者を薙ぎ払え！ エクスプロード！」

天から落ちてくる炎が地面に落ち、そこを中心に大規模な爆発が起こり、魔物を飲み込んでいく。

「お、スノウドラゴンの丸焼きか。なかなか料理の才能があるな」

「そんな訳無いでしょ！ 一気に滅するから共鳴しなさい！」

「はいはい」

二人は共鳴し、リリアルオーブの力で互いの意思を確認する。

「地獄の業火——」

カレンが精霊術を発動し——

「その身に焼き付けろ！」

——ランザが拳を握り地面に振り下ろす

「『魔王地顎陣！』」

カレンの地面から爆発させるイラプション、ランザの地面に拳を叩きつけて衝撃を発生させる魔人拳。

それらが組み合わさり、魔物の足元の地面に地割れが走り、そこから大噴火が起こった。

「俺たちに！」

「敵はいない！」

某守りたがり屋と蟹玉少女の決め台詞を口にし、戦闘は終了した。

「さて、スノウドラゴンとスノウウォントの丸焼きを——」

「そんな物はいいから行くわよ！」

「ま、待て！ 塩コショウをかけて食ってみればきつと！」

「美味しそうだけど人として終わるから駄目よ！」

ランザはその場からカレンに引き摺られて離れていった。



ランザとカレンは高原の中を歩き進み、だいぶ奥までやってきた。

「カレン、この辺りに洞窟は見えないか？ そろそろランベルに近づいてきたんだが……」

「どうしてそんな事が分かるのよ。本当は見えてるんじゃないの？」

カレンはランザの疑いにジト目を送りながらも、辺りを見渡して洞窟を探した。

「あ、あったわ！」

「ならそこに案内してくれ。あとは大丈夫だから」

と、ランザは右手をカレンに差し出した。

カレンはその手を驚きの表情で見つめ、ゆっくりと手を握った。ランザは指無しのグローブをしているので、カレンの手にはランザの指だけが直接肌に触れる。

「——暖かい……。それにこつこつしてる……。これがランザの手……。」

「どうした、カレン？」

「い、いえ！ 何でもないわ！ こ、こっちよ！」

カレンは慌ててランザの手を引いた。

もしランザの目が見えていたのなら、カレンの顔を真っ赤に染ま
っていることに気づいただろう。

カレンはしっかりと手を握り、洞窟まで案内した。
洞窟に入り、ある程度まで進むと、ランザはもう手を握らなくて
も良いと言ったので、カレンは渋々手を離した。

二人は進み、数分後に洞窟から外に出れた。そして外に出たカレ
ンの目には信じられない光景が映った。

「凄い……」

初めて見えたのは山頂にある大きな屋敷。その周りを家々が立ち
並び、一つの都市が存在していた。
防壁のようなもので街を囲み、防壁の上では警備兵が見張りをし
ている。

「ここを上から見れば、山が円をなぞるように存在し、その真ん中
に都市を築いている。それ故、外には見えないし、ましてや山に登
って見ようにも凶暴な魔物が山に生息しているからまず入れない。
だからここは世界唯一の戦争とは無縁な国だ」

「これがランベル……！ 私国……！」

カレンは目の前の光景に見惚れ、暫くの間その場から動けないで
いた。

「さて……面倒なことになる前に入るとするか」

「面倒なこと？」

「ああ。……俺は——」

「動くな！」

突然、ランザとカレンの周りに紫の鎧を身に着けた騎士のような者達が現れ、二人を取り囲んだ。

「な、何っ!？」

「チッ、相変わらず良い仕事をする」

槍を突きつけられ、二人は武器を捨て手を上げる。
そしてリーダー格の一人が二人の前に出てきた。

——女の人？ 綺麗……。

その人物は女性で同姓のカレンから見ても見惚れるほどだった。
長い銀髪に紅い瞳、背は女性の平均より少し高い目で、腰にはランザの長刀と同じぐらいの長さの剣をぶら下げていた。

「……ヴァレン・エンキス」

「……知り合い？」

ランザは目の前の人物を知っているようで、名前を呟いた。

「ふん、覚えていたか」

「ああ、嫌でもな」

「その目も今だに健在か。今すぐにも決り出したい気分だ」

ヴァレンと呼ばれた女性は忌々しそうにランザを睨んでから他の騎士たちに指示を出した。

よく見れば、全員が女だった。

「この者共を連れてゆけ」

「はっ！」

騎士たちはランザを拘束したが、カレンだけは何もされず、付いて来てくれと指示を出されただけだった。

「あ、あの……私は？」

「君もこの男の“捨て駒”にされているのでしょう。手荒な真似は致しません」

「え、ちが……っ」

カレンは否定しようとしたが、ランザに言われたことを思い出し、咄嗟に口を閉じた。

——ランザ……一体どういう事なのよ。貴方いったい何をしたの？

二人は騎士たちに連れて行かれた。このランベルの王がいるあの大きな屋敷に。

国王と王女と罪人（前書き）

……これって……テイルズ……だよね？

別の物語じゃないよね？

国王と王女と罪人

ランザとカレンはヴァレンと呼ばれた女騎士に連れられて、城というには小さく、邸というには大きすぎる建物に入った。

その道中、カレンはランザがこの国でどういう扱いを受けているのかが理解できた。

街に入り、住民たちがランザの姿を確認すると、冷たい目で睨んだり、罵んだり、子供たちは石を投げつけたりしていた。

騎士たちはそれを止めず、寧ろ笑っていた。ランザも石が当たっても気にも留めず、ただ歩いていった。

——自分を庇うなって言ったのはこういう事だったのね。私がランザの仲間と思われないように。

しかしカレンは分からなかった。何故ここまでランザが嫌われているのか。何故自分が捨て駒にされていると言われたのか。カレンはランザの事を知る機会と考えて、調べることにした。

やがて二人は二つの玉座がある大きなホールに連れてこられ、ランザは乱暴に放り投げられた。

「暫くお待ちください。国王陛下と王妃様が来ますので」

ヴァレンはカレンに一礼をし、ホールの隅に寄った。

ランザは後ろに手を回されているので、よろよろと立ち上がった。

カレンは待っている間、辺りを見渡した。周りには警護のための騎士たちとメイドが十数人。

建物の作りあまりお金を使っているような造りはなく、けれどもどこか高そうな感じのシャンデリアやテーブル、椅子、カーテン、壁画などが存在している。

カレンが辺りを見てみると、白いローブを纏った赤髪の年老いた女性が、玉座の横から出てきた。

———本当に女の人しかないのね。でも、何で子供がいるのかしら？

「国王陛下、ならびに王妃様のご入来！」

誰かの声がしてカレンはピシッと姿勢を正した。これら自分の国の王とその後に出会うのだ。緊張で手に汗を握っていた。

———あれ？　ちょっと待って。この国って女の人しかないのよね？　なのに国王と女王って……ええ！？　も、もしかしてこの国って女同士が……！

カレンは頭の中に湧いてきた桃色の幻想をいやいやと振り払おうとしたが、どうしても振り払えなかった。

そして遂に二人の姿が現れた。

一人は胸元がパツクリと開いた紫色のドレスを着て、紫の長髪に

青い瞳をしたとても美しい女性だった。

それでもう一人は、黒いローブを身に纏い、背が高く、黒い髪に、
紅い瞳の若い“男性”だった。

「……へっ？」

カレンは思わず間拔けな声を出してしまった。

——あ、あれ？ 随分男らしい女性……？

「はっはっは！ その反応はなかなか見れん！ 面白いぞ！」

豪快に、男らしい低い声で笑い飛ばした。

——ほ、本当に男の人……？

女だけの国に唯一人だけの男。何処かの世界で物語になりそうな
ものだ。

「さてさて、久しいな……我が息子よ」

「む、息子っ!？」

王の前でカレンは驚きの声を上げる。

この王は確かにランザを見ながら息子と言った。それは即ち、ランザが王の息子でこの国の王子。

——やだ……私、王子様と一緒にいたの？ 何これ……昔子供たちに読み聞かせした恋物語みたいじゃない……！

「誰が息子だ。作り話は止めろ」

「——え？」

作り話、嘘、王子じゃない。

カレンの妄想は木っ端微塵に碎かれた。そもそも、王子ならばあんなに酷い事はされないと、今更ながらカレンは思った。

「貴様！ 陛下に向かってなんと無礼な！」

ヴァレンがランザに怒鳴りつけ、前へ一步踏み出す。

「まあ、よいよい。そうカッカしなさんな」

「で、ですが陛下！」

「よう」

王がそういうと、ヴァレンは大人しく下がり、ランザを睨みつけた。

「さて、そこのお嬢さんに名を名乗る前に一つ、やらなければならない事がある」

そう言い終った瞬間、カレンの隣にいたランザの身体が床にめり込まれた。

「え……？」

王が一瞬で移動し、ランザを拳一つで床に殴りつけたのである。現に、王が拳を振り下ろした状態でカレンの隣にいた。

「がはっ——！！」

「ランザよ……お前『滅天刀』めってんとうを抜いたな？」

王はメイドに手を伸ばし、メイドが持っていたランザの長刀を王に渡した。

「言え、何故抜いた？ お前にそれ程の敵が現れたとは思えんのだ
が？」

「ぐっ……！」

ランザを踏みつけ、睨みつける。ランザは抵抗をせず、すぐに口を開いた。

「俺の……やるべき事をやっただけだ！」

「お前の？　なるほど……それならば抜くか。しかし……」

ランザから足を退け、刀を持ったまま玉座に座った。

「これ以上は許せん。よってこの刀は私が預かる」

「っ！　待て！　それだけは許さん！」

ランザは焦りだし、起き上がって王の下へ向かおうとしたが、ヴァレンに阻まれた。

「その力は俺の使命を果たすために必要不可欠だ！　取り上げられてたまるか！」

「このっ……貴様という奴は！」

ヴァレンがランザに拳を振り下ろそうとしたが、それよりも早くランザがヴァレンの足元を払い、ヴァレンを殴り飛ばした。

「ヴァレン様！」

周りに立っていた騎士たちがランザを押さえ込もうと駆けつける。

「静まれ!!」

一言。王の威圧が込められたその言葉に周りは静まり返り、動きを止めた。

「ランザ……お前は自分が何を言っているのか理解できているのか？」

「ああ」

はっきりとランザは答えた。すると周りの騎士たちはランザを睨みつけ、今にも殴り飛ばしそうだった。

「ふ、ふふふ……わっはっはっはっは！」

王が大笑いをし始め、回りの者たちはどうしたものかと顔を顰めた。

「分かっているながら申すか！ 良からう、使わせてやる！」

「なっ！？ しかし陛下！」

「ヴァレン、何もタダでやるとは言っていない。ランザ、この力を渡すには条件がある」

「何だ？」

「娘と結婚しろ」

「断る」

あり得ない条件にあり得ない速さの即答。

王と女王とランザ以外の者たちは呆気に取りられて固まってしまった。

「だから、何故そう何度も断る？ 娘は妻に似て美人だし、頭も良い、今の身体でなかったら騎士の中でも一、二を争うほどの実力を持つのだぞ？」

「知らん。興味もないしどうでもいい。第一、俺をこの国が受けられない」

「そこはほれ、俺がちょいちょいと演説をすればだな」

「何度言われようと断る」

「それを娘に直接言えるか？」

「言える。断る」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

二人の問答に、やっと我を取り戻せたヴァレンが割って入った。するとヴァレンに続いて続々と我に返る者達。

「む？ 何だ？」

「何だではありません！ 何をお考えになられているのですか！？ この男をシオンと……姫と結婚させよう！？」

「そうだ。何か問題でもあるか？」

「大有りです！ この男が一体何をしたのかお忘れで！？ この国を、姫を裏切りったのですよ！？」

「おお！ そうかそうか！ お前も結婚したいのか！ 嫉妬か！」

「んな訳ありますか！！」

自身の主君である王に何たる発言。しかし、王は気にせず笑い飛ばした。

そもそも、何故そんな結論に至ったのか、ぜひ聞かせてもらいたいものだ。

「あなた、お戯れは程ほどに」

「ん？ おお、そうだな」

今まで黙っていた女王が王を止め、ヴァレンも荒い息を収めた。

「ま、これは後々に話すとして。ランザよ、やる事は分かっているな？」

「ああ……」

「ふっ……ディナ、ランザをシオンの下へ連れて行け」「はい」

王は白いローブの年老いた女性、ディナにそう命令してカレンを見た。

「ああ、俺の名を言っていなかったな」

王は咳払いをし、喉の調子をを整えた。

「我が名はギドル・オラ・ランベル。このランベルの第九十九代国王である。こちらは妻のエレン・メル・ランベルである。お前の名は何と言う？」

「か、カレン・マリエーゼです。ラベンの者です」

カレンは頭を下げて名を名乗った。

「カレンか。……村の事は聞いた。辛かったであろう」

「……いえ」

カレンは辛かったといえは辛かったが、死にたいと思えるほど辛くはなかった。

何故ならランザが常に共に居てくれたからである。もしランザが居なければこうしてここに立っていることはなかったかもしれない。

「一つ尋ねたいのだが、この杖はお前のか？」

メイドが王に差し出したのは、ランザが買ってくれたカレンの杖であった。

「そ、そうです……」

そう答えると突然回りが騒ぎ始めた。

カレンは理由が分からずオロオロしていると、王が咳払いをして騒ぎを止めた。

「いやすまん。そうか……ではどこで手に入れた？」

「……………」

「何、そこへ向かって奪ってこようなんて思っておらん。第一、この杖はこの世に一つしかない」

「何？」

そう言ったのはカレンではなくランザだった。

ランザは口元に手を当てて考えるそぶりを見せ、やがて結論に至ったのか、納得した表情になった。

「あ、あの……どういふ事ですか？　それは店で五百ガルドで買ったものなんですけど……」

「五百ガルド！？　はっはっはっは！　そうかそうか！　これが五百ガルドか！」

王はこれ以上なくらいに大笑いをし、腹を押さえた。

「カレンさん、この杖はこの国ランベルに代々伝わる伝説の杖『オーディン』なのです」

王の代わりに説明したのはエレンだった。

エレンは美しい笑みを絶やさず説明を続けた。

「この杖は人を選ぶ。選ばれた人は膨大なマナを与えられ、強力な精霊術を放つ事が出来る」

「つまりカレンはその選ばれた人間というわけだな？」

「そうよ。ですが……これはおも——困った事になりましたね」

今絶対面白いと言おうと下だろうとは、誰もツツコまなかった。

「あの……何故困った事になるのですか？」

「それは……」

「ひっひっひ……！ その話は女だけでしていきいくれ。ランザ、娘に会いに行くぞ」

笑いから戻ってきたギドルが話を一旦止め、ホールから出て行った。

ディナもランザに目で付いてこいと伝え、ホールから出て行った。ランザはヴァレンに拘束具を外され、黙って付いて行った。

一方、取り残されたカレンは、エレンに何か言われたメイドにより、何処かの部屋に案内された。

その様子を見ていたエレンは笑みを絶やさず何かを考えていた。

★

ランザはギドルとディナの後ろを黙って歩いていた。刀はまだギドルの手の中にある。

やがて三人はとある一室の前に到着した。ギドルはノックもせず大きく扉を開いた。

「父が来たぞ！ 我が娘よ！」

「失礼いたします」

「……………」

三人はそれぞれ中に入り、ベッドの腕に寝かされている少女を見た。

しかし、見ようとする前にギドルとランザに向かって何かが飛ん

できた。

ギドルは二本の指でそれを挟み取り、ランザは首を捻って避けた。

「おいおい、ティア。王たる俺に……ほっほう」

「……王よ、これは此方が悪い」

「……どうしたんだ？」

唯一、目が見えないランザには何が起こっているのか分からなかったが、ギドルとディナは何故ナイフが投げられたのか理解できた。

「いや、これはすまん。まさか着替え中とはな」

「ノックをしてください、陛下」

「すまんすまん。しかしティアよ、父と娘なのだから……」

「なればこそ、礼儀というものが必要でしょう」

青い長髪をポニーテールにし、ギドルと同じく赤い瞳でスカートの丈が短いメイド服を着た女性が、両手にナイフを構えてギドルに注意をする。

「すまぬ、ティア。王には後で奥様にきっちり叱ってもらおう」

「でい、ディナよ……それだけは止めてくれんか？」

「知りません。貴方はもう少し礼儀というものを知るべきです」

「おい、俺を置いて話を進めるな」

何やら三人だけで会話して、一人置いていかれている事に憤りを
感じたランザが口を挟む。

すると、ベッドの上に寝かされている少女が反応した。

「その声……っ！ 出てけ！」

少女は声で誰なのかを理解し、大声を上げた。

「だ、そうですので……」

ティアが十本のナイフを取り出してギドルとランザに向かって投
げつける。

二人はナイフを軽々と避けながら部屋を出た。

「はっはっは！ 流石はティア！ 見事な不敬罪だ！」

「褒めるなよ……」

王の性格に呆れるランザ。と、そこへ廊下の向こうから誰かがもの凄いスピードで近付いてきた。

「陛下！　今、姫の大声が！　どうかなされたのですか！？」

「……相変わらずのシスコンだな」

「貴様……そのふざけた口を斬り落とされたいか！？」

ヴァレンが腰に提げている長剣に手を掛ける。ここで剣を抜けば武器を持っていないランザには勝ち目はないだろう。

「落ち着け。何も起こっておらん」

「……そうですか」

「ランザが娘の着替えを見たがな」

「斬る！」

ヴァレンは剣を抜き取りランザの頭の上から振り下ろす。
ランザはそれを落ち着いて真剣白刃取りで止めた。

「おいコラ、俺が盲目なのを忘れてないか？」

「お、そうだった。うゝむ、これでは責任を取らす事が出来んな」

「陛下！ まだその様な事を！」

ヴァレンは今だ剣をランザに押し付けながらギドルに訴える。
ギドルもランザの事は放って置いてヴァレンに言う。

「……やはり嫉妬しているのか？」

「だから何でそうなるんですか！？ 馬鹿なんですか！？」

「うむ！ お前も見事な不敬罪である！ わっはっはっは！」

「……………はあ」

ランザはそんな状況に呆れながら、この剣をいつ退けてくれるだろうかと考えていた。

「陛下、ランザ様、あとヴァレン様。着替えが済みましたのでどうぞ、お入りください」

ティアが扉を開けて中に入るよう促す。

「うむ」

「私はついでか!？」

「ついでだろう。あとさっさとコレ退けろ」

三者三様に中に入り、改めて寝かされている少女を見る。

紫っぽい黒い長髪に、紫色の瞳、出るところは出て引っ込むところは引っ込む、白い肌、見るものが見れば全員美少女だというだろう。

「うんうん! 流石は我が娘! 美しいぞ!」

「……………」

ギドルは娘の頭を撫で、ランザは相変わらず無表情でその娘の場所を見つめている。

「お父様、後でちゃんとお母様に叱ってもらおうかな」

「そ、それだけは勘弁してくれ!」

どうやらギドルはエレンに頭が上がらないようだ。先程までの剛毅さが微塵もない。

「……………」

ギドルの娘はランザを見つめた。その顔はとても冷たく、けれども怒っている様な顔ではなかった。これが彼女の何時もの表情なのである。

「お父様、少しの間二人だけにしてくれ」

「む？ 良からう。皆の者、出るぞ」

「し、しかし陛下！ この者と姫を二人きりになど……………」

「なーにを言う。男と女、二人きりになりたいとは、つまりそういう事だろう」

「なら寧ろ——陛下！？ 引っ張らないでください！」

ギドル、ヴァレン、ディナ、ティアは部屋の外へ出ていった。二人きりになったランザとギドルの娘は少しの間何も喋らず、やがてランザが部屋にあった椅子をベッドの横につけて座った。

「……具合はどうだ？」

「よく言う、自分で悪化させておいて。おかげで食事をするのも辛

い」

「それは悪かったな」

「そんな感情無いくせに」

「……………」

「……………顔が見たい」

「……………」

ランザはサングラスを取り、顔を見せた。その顔はやはり無表情だった。

「……………二年振りだな」

「ああ……………」

「クレインはどうしている？」

「……………死んだ」

「っ……………」

まさかの事実を目を大きく開き、息を呑む。
この少女もクレインとは知り合いである。数日ではあるが、両親

ともども良くしてくれた相手である。そのクレインが死んだ。少女は悲しい表情を浮かべた。

「そう……か。やはり脆いな、人間というのは。そして私も、もうすぐか……」

「……シオン」

「……なんだ？」

シオン・ラヒィ・ランベル。それがこの少女の名前。

「もし、助かると言ったらどうする？」

「……何？」

「お前の身体が呪いから開放されると言ったら、どうする？」

「本当か……！？」

シオンは動きづらい身体でランザに詰め寄った。ランザは再びサングラスを装着し、シオンをベッドに戻した。

「ああ、見つけた。だから俺が開放してやる」

「だがどうやって？」

「……………」

ランザは口を閉じた。シオンはそんなランザの様子に何かを感じ取り、首を振った。

「馬鹿な真似は止めろ。お前がこれ以上この国での立場を悪くする必要は無い」

「だがこうしないとお前は死ぬ。これは俺の責任だ。俺がお前を巻き込まなければこんな事にはならなかった」

「止めろ。それ以上言うな。あれは私が無理やり付いて行っただけだ。お前に非は無い」

「……………」

ランザは少し黙ったあと、今まで大事にしまっていた袋から水晶を取り出した。

「それは？」

シャドウクリスタル
「闇水晶。闇のマナだけで構成された特別な水晶だ。クレインが用意してくれた」

「それをどうするつもりだ？ まさか、私にプレゼントしてくれるのか？」

「ああ」

「え……」

シオンは驚いた。まさか本当にプレゼントしてくれるとは思わなかった。

ランザは水晶を右手で掴み、シオンの胸まで持ってきた。

「お、おい……何を……」

「少し、身体を楽ししろ」

そう言われ、シオンは身体力を抜き、ベッドに身体を預ける。ランザは水晶玉を力強く握り、自身のマナをありったけ注ぎ込む。

「っ……！」

頭に激痛が走り、今にも止めそうになるがぐっと堪えて流し続ける。そして水晶玉が強く光だし、粒子となってシオンの身体の中に入ってしまった。

「……！　これは……！」

やがて粒子はシオンの身体全体に広がり、徐々に光を失った。

「何を……」

「……明日になれば分かる」

言い終わるや否や、ランザは頭を抑え、汗をだらだらと流してベツドに頭を垂れた。

「お、おい！　しっかりしろ！　ティア！　今すぐに手当てをしてくれ！」

扉に向かって叫ぶと、すぐにティアが駆けつけ、ランザの容態を確認し始めた。



場所は変わりカレンがいる部屋。そこでは数人のメイドがカレンを取り囲み、エレンの指示の下、カレンを弄っていた。

「さあさあ、皆さんはりきっていきましょう！」

「はい！」

「ちょ、ちょっと！？ 何をするんですんあっ！ どこ触って……！」

「ふふふ……娘が寝たきりだから私の趣味が出来ないのよ。だ・か・ら、付き合ってね？」

エレンは艶めかしい笑みを浮かべ、メイドたちに指示を出してゆく。身体のサイズを計り、化粧、ヘアースタイルの設計をしてゆく。

「ど、どうして私が！？」

「理由はいくつかあるのだけれど……一つは娘に負けないほどの逸材だからよ」

「だからってやんっ！？ 誰よ胸搦んだの！？」

「もう一つは、貴方はランベルにとって重要な人物だからよ。それなりの格好をしてもらわないと」

「重要……？」

カレンはメイドたちになすがままにされながらエレンに話に耳を傾けた。

「あの杖……『オーディン』を扱える者にはある絶対条件が存在するのよ。何だと思う？」

「……分かりません」

「驚かないでね？ あの杖を扱える者の絶対条件。それは、少なくとも“王族の血”を引く者なのよ」

「お、王族……！？」

つまり、カレンの体内には少なからず王族の血が入っているという事になる。

そんな馬鹿なことがある筈がない。自分はそんな伝統とかない家系に生まれた女。王族なんかとは縁は無い。

「いつの代だったかしら……当時の国王は数百人の后を娶ってね、その子孫たちが王都から出て行っちゃったのよ。だから、世界を探せば王家の血を継ぐ者がいるのよ」

「それが……私？」

「そうよ。だから……立派なお姫様になりましたよ！」

エレンは手をパンパンと叩き、新たにメイドたちを導入した。その様子にかレンは、自分が王家の血筋だとか杖に選ばれた人間

とかいう驚きの事実よりも、このメイドたちに恐怖を覚え始めた。

「い、いやアアアアア！！」

★

「っ……」

時は夕暮れ。ランザは目を覚ました。どうやらあの時意識を失ったようだ。

ゆっくりと起き上がり、そして――

「っ！」

思いつきり頭を下げた。するとその頭上を一振りの剣が通り過ぎた。

「チッ……」

「……おい」

ランザは剣を振ってきた相手、ヴァレンを睨みつけた。ヴァレン

は剣を鞘にしまい、ランザを睨み返した。

「その眼で見るな、裏切り者」

「ふん……」

ヴァレンの言葉に動じず、ランザはサングラスを手探りで探し始めた。やがてサングラスを見つけ出し、何時ものように装着した。

「で、何故お前がここにいる？ まさか、恋焦がれてきたと冗談だ。」

ランザは剣を喉に突き立ててくるヴァレンに両手を挙げた。これ以上何か言う到如今にも切り裂かれそうだった。

「で？ 何故いるんだ？」

「貴様がまた何か仕出かすかもしれんからな。その監視だ」

「仕事熱心でご苦労だな。だから一向に男が出来ないんだよ」

「そんなものいらん。私は陛下と王妃様、シオンの為に生きるのみ」

「それが、お前の使命か」

「そうだ。だから、貴様にはここで死んでもらう」

ヴァレンは突き立てている剣を握り締め、ランザに押し付ける。
だがそこから先に手は動かなかった。

「……どうした？」

「……だが、陛下も王妃様もシオンも……それを望んでいない」

剣をゆっくりとランザから離し、鞘に収めた。ランザはベッドから降り、身体の調子確かめる。

「大変だな、騎士団長様は」

「……………」

「ま、事が全て終われば殺せばいい。ただでは死ななかな」

「……………」

「……おい、何か言え。今俺は結構重要な事を言ったんだが？」

「……………ろ」

「あ？」

「……を……ろ」

「何だ？」

「服を着ろおおおお！」

「ごはっ！」

ランザはヴァレンに蹴り飛ばされた。ランザは何も着ていなかったのだ。上も下も着ていなかったのだ。故に、ヴァレンはランザのアレを直視してしまい、ランザに捉えられないほどの速さで蹴りを喰らわせたのだ。ヴァレン・エンキス、十八歳。まだまだうら若き乙女である。

求めるは力（前書き）

いやゝ独自設定入れすぎた？　ってかテイルズじゃなくなってる？
しかもそろそろランザ達の細かい設定を書いたほうが良いね。

求めるは力

「……やられた」

「ふん……」

ランザとヴァレンは廊下を歩いていた。しかもランザの服装は何時ものロングコートではなく、王子が着るような黒い衣装だった。

「あの国王……俺にこれを着さすために……」

ランザが裸でいた理由。それはギドルがランザにこの衣装を着らなければならぬ状況にする為だった。ランザが意識を失っている内に衣服を全て剥ぎ、代わりの服を用意する。そしてランザが眼を覚ますと、着るものが無く、嫌でも用意された服を着るしかない。なる。

「陛下が態々貴様のために用意したのだ。それを無下にする気ではないだろうか？」

「正直したい。が、下着一枚で歩き回るわけにもいかん。我慢する」

「……………」

ヴァレンはランザの前を歩き、ギドルたちがいる食堂へと向かう。

「……口調、変えたんだな」

「……騎士団長となったからな。それなりの風格は必要だ」

「昔はキャツキャしてたのにな」

「黙れ、その口切り落とされたいか？」

剣を抜き、ランザに向ける。ランザは驚いた様子もなく、剣に指を添える。

「騎士団長ともあろう人間が、そう易々と剣を抜くな」

「だから陛下の前では抜かなかっただろう？」

「だからと言って拳もどうなんだろうな」

二人は足を進め目的の場所へ再び向かった。やがて扉の前に辿り着き、ヴァレンが扉を開いた。ランザは中に入ったヴァレンに続き中へ入った。

「んお？　ほほー、中々似合っておるじゃないか！」

中にはテーブルにギドル、斜め前にエレン、エレンの前にシオンの三人が席に座っており、シオンの斜め後ろにはティアが静かに立っていた。

「うるさい。こんな堅っ苦しい格好、二度と御免だ」

「だがの……シオンと結婚すれば常にその様な格好なんだが？」

「結婚なんぞせん」

ギドルのさり気ない言葉にちゃんと否定し、用意された席……シオンの隣に座った。

ヴァレンは部屋の隅っこに寄り、ギドルとランザのやり取りを睨んでいた。

「……カレンはどうした？」

ランザはカレンが居ない事に気が付き、エレンに尋ねた。エレンは笑みを浮かべて嬉しそうに喋った。

「カレンさんは本当にとっても良い逸材です。もういっその事このまま娘にするのも良いかもしれませんわ」

「むう……ならば年齢的にシオンの姉か？」

姉と言う言葉に僅かだがヴァレンが反応した。しかしそれに気づくものはいなかった。

「……食費が飛ぶぞ」

「俺は王だが？」

ランザの忠告にギドルがすかさず解決する。それで良いのか、国王よ。

「カレンさん、入ってらっしゃい」

エレンが違う扉に向かって言う。扉が開き、向こうから貴族のお嬢様が現れた。

肩から胸にかけて肌を晒し、深いスリットが入った赤いドレスを身に纏い、ストレートの長い赤髪はウェーブがかけられ、青い花の髪飾りをつけていた。

「ほっほー……これはこれは」

「カレンさんには可愛いものもお似合いだったけれど、美人タイプが一番お似合いだったわ」

「うう……」

カレンは恥らいながら自分の席……ランザの前に座った。

「どうです？　ランザさんもお気に召しましたか？」

「……お気に召すも何も、俺は目が見えんのだが？」

「あら……忘れていたわ」

残念ながらランザは目が見えず、カレンの美しい姿を見ることは出来なかった。見えたとしても、感情の無いランザはこれっぽっちも心を動かさないだろう。

「んー……この色気で少しは感情を取り戻してもらえと思ったのに……」

「そんな事で取り戻せたらどれだけ楽か」

「そんなことっ……！？」

カレンが表情を引き攣らせ、ランザを睨んだ。

——そんな事って……これを着るのにどれだけの苦難を乗り越え

させられたのか分かって言ってるのかしら!?

カレンはドレスを着せられるまで、メイド達に自分の身体を隅々まで弄られ、女として何かを失いかけたほどだ。それなのにランザはそんな事でと一蹴り。カレンは何時の日か見返してやると心に誓った。

「さて、ではいただくとするか! と、その前にヴァレン」

「はっ」

「お前もそこに座れ」

「い、いえ! 私めがそのような――」

「今はただのヴァレンに戻れ。そしてランザとカレンの歓迎を祝福しよう!」

「……では、そうさせていただきます」

ヴァレンは今までの覇気を消して、ランザの隣の席に座った。そして最初から準備されていたのか、すぐにヴァレンの分の食事が運ばれてきた。

「……歓迎してくれるのか?」

「カレン殿には祝福しよう。だが貴様にはせん」

「王よ、ここに反逆者がいるぞ」

「うむ！ 結構！」

「それで良いのかよ……」

ギドルの懐のでかさ、若しくは馬鹿さに呆れて溜息を吐く。

ギドルは酒の入ったグラスを持ち、それに見習い全員がグラスを手を持った。

「今宵の再会と新たな出会いに祝して！ 乾杯！」

「乾杯！」

「「乾杯」」

「か、乾杯……」

「……………」

ギドルは元気良く声を上げ、エレナはノリ良くそれに続き、シオンとヴァレンは素っ気なく、カレンは戸惑いながら、ランザに至ってはグラスを傾げるだけだった。

——カレンって、酒飲めたのか？

ランザはブラックホールの胃袋を持つカレンが、酒までも吸い込めるのか心配していた。シオンのは酒ではないので安心だが、もしカレンが酔い易い体質で泥酔でもしたら、ギドルとエレンの性格から考えて何か企みそうな気がして落ち着かない。

——ま、そうなのでも逃げるがな。

カレンが巻き込まれようと知ったこっちゃないとグラスの酒を飲んだ。

「ふう……」

「ん？」

隣にいるシオンから深く息を吐く声が聞こえた。見てみると、どこか疲れたような表情をしている。

「シオン様、代わりに運びましょうか？」

ティアが一步前に出てシオンにそう言う。シオンは頷きかけたがランザの顔を見て少し考え、そして妖艶な笑みを浮かべた。

「いや、ランザにやってもらう」

「「っ……」」

「……？」

ランザはシオンの言っている事と、ティアとヴァレンが自分を睨んでいる理由が分からなかった。

「ランザ、私は疲れた」

「………」

「だが空腹だ」

「……で？」

「私に食べさせろ」

「断る」

即答で断り、自分の分の肉料理を口に運ぶ。ギドルとエレンは笑いを堪えているようで、カレンは啞然としていた。

「私が食事如きで体力を無くすのは一体誰のせいだと思っている？」

「………」

シオンが勝ち誇った表情を浮かべそう言うと、ランザは食事をする手を止め、シオンの方をゆっくり向いた。

「……………」

「ふふん………」

「……チツ」

ランザは舌打ちし、シオンのフォークを手に取り肉に刺し、シオンの口の近くに運んだ。

「んなっ!?!」

「……………っ!」

カレンは驚きの表情をし、ヴァレンに至ってはナイフでランザに斬りかかりそうな勢いだった。

「こう言うときは言う事があるだろう?」

「……………あゝん」

「ぶはっ!?!」

まさかのランザの発言にギドルは堪らず噴出し、腹を押さえて笑い出した。

「あゝんっ」

シオンは肉を口に入れ、満足な表情を浮かべて食べた。

一方ランザは疲れた表情をし、カレンは放心状態、ティアとヴァレンは背後に黒い靄を雰囲気で表し、エレンはまあまあと微笑んでいた。

「……………」

「何をしている。まだ食べ終わってない」

「…………まさか全部食べさせろと？」

「無論だ。それとも…………アレだけけじめはつけると言っておきながらまさか逃げるとでも？」

「それとこれは違うだろう」

「違うな…………間違っているぞランザ！ 私がこうなったのはお前が『滅天刀』を抜いたからだ！ 即ち抜いたお前に責任がある！」

「……………」

ランザはフォークを勢い良く肉に刺し、再びシオンの口に運んだ。

「あゝン？」

「何か間違っているぞ。まあ良い」

シオンは口に入れ、また満足な顔になり、飲み込んだ。

「ふっはっはっは！ 仲が良い事だ！ やはり結婚の日取りを取り
決めなくてはな！」

「だからしないと言ってるだろ！」



時間が経ち、食事もほとんど終わりに向かっていた。

「それでねっ？ セレンがその時私にお花をくれたのっ。『お姉ちゃん元気出して』って！ だから私嬉しかったのっ！ いつも悪戯ばかりで手のかかる妹だと思ってたけど、その時はもうとってもいい子に感じて！」

「そう……良い妹さんね」

「でももうセレンに会えないのおくくっ!! まだ十歳を過ぎたばかりだったのにっ!」

「辛いでしょね……。なら貴女は生きなければなりません。妹さんの分まで」

「エレンさん……!」

「……」

——カレン……泣き上戸か。

酒が進み、カレンは次第に酔ってゆき、隣にいたエレンに泣きついた。エレンが一国の王妃さまだとカレンは忘れていたようだ。エレンもエレンでカレンの相手を真剣にしていた。

「ギドルさん! 貴方はどうして何時もそうなんですかつ!? 仕事を放り出して街の女性に声をかけてばかりで……エレンさんがどんなに悲しんでいるか!」

「す、すまん! しかし俺はエレン唯一人しか愛していない! 無論シオンの事も愛している!」

「なら何故ナンパなんてしているんですかつ!?」

「アレはナンパではなくてだな、街の様子を自ら尋ねてだな……」

「私達が嘘偽りの報告をするとも思っているんですか!?!」

——こっちもこっちで大変な事になっているな……。

一方でヴァレンがなんと国王を正座させて説教をしていた。ヴァレンも酒に酔い、口調まで可笑しくなっていた。ギドルもこの状態のヴァレンに成す術なく大人しく説教を喰らっている。

「うゝ……ティアゝ……何故ランザは私との結婚を断るんだあ……？ そんなに魅力が無いのか……？」

「っ！？」　そ、そんな事ありません！ シオン様はとても美しく可憐で高貴なお方です！ ランザは目が見えないからシオン様のお美しさを見れないだけです！」

「本当……？」

「勿論です！ 現に私は今、究極にキュンキュンしていますから！」

——誰だ、シオンの酒を飲ませた奴は。

何故かシオンも酒に酔い、上目遣い＋ほんのりと紅い表情のコンボにより、クールビューティーが傲慢なティアを一発KOしていた。

——誰か、この状況を打破しろ。した奴には魔物のフルコースをご馳走してやる。

誰も欲しくない商品を掲げ、この状況を打破してくれる人物が現れるのを待ったが、一向に来なかった。

何時自分に被害が襲ってくるのか不安なランザは徐々に椅子をずらし、周りから離れていていた。

「ぬう！？　こらランザ！　一人だけ逃げるな！」

ギドルがランザの逃亡に気づき、指を差して叫ぶ。するとヴァレンがランザの方にグルンと首を回し、ズカズカとランザに近寄った。

——このバカ王。俺を巻き込むな。

とうとうランザに被害が来てしまい、ランザは大きな溜息を吐いた。そしてヴァレンがランザの目の前に立ち、手をランザの両肩においた。

「ランザさん」からも言ってやってください！　もう、ギドルさんが仕事をしてくれないんですよ！？」

「っ……」

ヴァレンの口調に思わず持っていたグラスを落としそうになった。しかも今までの怒り顔ではない。親しい人間に接するかのような表情。覇気がある声ではなく、可愛らしい声。全てが今までのヴァレン・エンキスではなかった。元々の容姿がハイスペックな故に、男

がその顔を拝めば、一瞬で彼女の虜になる事は間違いなしだ。

「目を覚ませ馬鹿が」

しかし残念だ。ランザはその男の部類に入ってなどいなかった。
ランザはヴァレンの両頬を抓り、ひばった。

「い、いひゃいへふっ！」

「目を覚ましたか？」

「いゝひゃゝいゝ！」

「………」

ポイッとヴァレンを横に捨ててランザはグラスと酒瓶を片手に立ち上がる。

「んおっ!？」

「来い」

ギドルの襟首を掴み、ギドルを引き摺って食堂の外へ出た。



「おいしい、何処まで引き摺る気だ？ 不敬罪であるぞ？」

「どうせ結構とでも言うのだろう」

「うむ！ 結構、結構！」

「……………」

感情の無いはずのランザだが、彼の額には僅かに血管が浮いているように見えた。

やがてテラスに辿り着き、ランザはギドルをそこへ投げ捨てた。

「つとと…………おお！ 実に見事な月夜だ！」

「…………ギドル」

手すりに酒の入ったグラスを置きながらランザは口を開いた。

「…………なんだ？」

ランザの重苦しい雰囲気を感じたのか、今までのふざけた雰囲気

を消してギドルはグラスを受け取った。

「三年前、俺はお前達と約束をした。シオンを必ず元に戻すと」

「……ああ」

「……それを決行する」

「っ！ 方法を見つけたのか!？」

「……“見つけた”というよりも、“知っていた”の方が正しい」

「……どういうことだ？」

ランザは酒を一口のみ、息を吐いた。

「……この国、ランベルはマナの恩恵が世界の何処よりも大きい」

「ああ……」

語りだしたランザを横に、ギドルも酒を喉に通した。

「そしてこの国で育った者は皆、マナの扱いに長け、一人一人が強い」

「うむ……」

「だが、そんな者達が崇める存在がいる」

「……………」

「精霊の主マクスウエルではなく、この国に始まりの時から存在する精霊を……」

「……………」

二人は空になったグラスに酒を注ぎ、再び口につける。

「その名は『精霊王アルメティウス』。世界を視る力を有し、また世界を破壊、再生する力を持つ精霊。その姿はまさに王。マクスウエルいえど、齒向かう事は出来ない」

「ふん、当然だ。我らの精霊王は何者にも屈しない」

「そしてこの俺の眼は……お前とヴァレンの眼は……“精霊王の眼”」

ランザはサングラスを取り外した。その瞳は真っ赤で、夜空を映し出していた。

「だがお前とヴァレンの眼は不完全……。お前に至っては本来の視

力まで失った」

「だが世界は見える。このマナで溢れている世界なら、視る事が出来る」

「だがそれも所詮、それだけだ。私達のように色を視ることは出来ない。視えるのは形だけ」

「そうだ。お前のマナが、お前の身体の形を作っている。だがお前の髪がどんな色で、どんな顔付で、どんな格好で、どんな特徴があるのかは視えない、分からない。分かるのは個人が持つマナ、形だけだ」

故に、ランザはここまでの道をぶつからずに歩けた。今まで戦えた。ただマナで出来た形を視て、それが一体何なのか、こういったもののなか、何をしているのか視えるのだ。

例えば人が歩いているとしよう。常人にはその人物がどんな髪で、どんな格好で、どんな顔の人が歩いていると人目で分かる。

だがランザの場合、どんな髪で、どんな格好で、どんな顔の人が歩いているのかが分からない。ただ、マナで形作られた人が歩く動作をしているという事だけが視えるのだ。

そして、それは人だけにあらず。この世界はすべてマナで作られているといっても過言ではない。建物があればそれからもマナが発生している。ただ使用出来ず、人が認知できないだけで、ただ発生している。それをランザの眼は捉えている。だから視えている様に動いていたのだ。

「そしてあの『滅天刀』は精霊王の力の片鱗。人が扱える力ではない。だからお前が鞘から抜いたとき、その力に耐え切れず、身体が破壊される」

「そして、この代償は共にこの力を奪ったシオンにも繋がる。だがシオンの場合、身体破壊までいかない。破壊はされない――が、奪われる。精霊王に彼女のマナを……生気を喰われる」

「それをお前はどうかやって解決するつもりだ？　まさかシオンの負担を全てお前が持つつもりか？」

「まさか。そこまで俺はお人好しではない」

ランザは酒を飲み、新たにグラスに注ぐ。ギドルも酒を飲み、乾いた喉を潤す。

「なあ、ギドル。お前は精霊王を崇めるか？」

「無論。私は精霊王の“守り手”なのだから」

「そうか……」

守り手……精霊王の力を代々受け持つ一族。その一族だけには男児が生まれ、この国の王となる。それが能無しの人間でもだ。しかし、そのような人間は生まれなかった。精霊王の力はそれほど強大なのだ。

今代の王ギドルは精霊王の眼と異様な身体能力を有する。しかし、

なら何故ランザとヴァレンは精霊王の眼を持っているのか。

「ヴァレンも、なのだろうか……」

「……どうだろうな。あの娘は異例だからな。一族でもない家系に生まれ、精霊王の眼を授かった。故に疎まれ、戒められ、迫害された。守り手でもなくせにと、血を穢した愚か者だと。力を授けた精霊王を恨んでいてもおかしくはない」

「俺は……精霊王なんぞどうでも良い」

「だろうな。シオンと共に精霊王の眠りの地に行き、眼と剣を“奪ってきた”のだからな。そもそも、生きて帰って来れたのが異常だ」

「俺は死ねない。使命を果たすまで」

酒瓶が底を着き、二人は最後の酒を一気に飲み干した。ランザは空になったグラスを空に掲げ、美しい満月と重ねた。

「だから俺は……更なる力を求める」

「…………お前」

「俺は…………精霊王から…………全てを奪う！」

グラスを握りつぶし、その手はまるで満月を掴んだように見えた。

「それが……一体どういうことか分かっているのか？」

ギドルは静かに言った。しかし、その言葉にはまぎれも無い怒気が含まれていた。

「この国を敵にまわす。そういう事だろう？」

ギドルを光の失った紅い瞳に入れる。その表情は無表情だった。

「分かっているながら何故そのような愚行を犯す！？ それではシオンも、今度こそヴァレンもお前の敵になるんだぞ！？」

「俺が知った事ではない。俺の目的は初めから一つ。そして精霊王から全て奪うことで、シオンも救われる」

「お前は……！ なら彼女はとうするつもりだ！？ カレンはお前の仲間なのだろう！？ 彼女も巻き込むつもりか！？」

「……仲間ではない」

「何……？」

ランザは感情のない表情でギドルを見据え、確かに告げた。

「カレンは……おの女は俺が道を進む為のただの駒だ」

「なん……だと……!？」

「出会ったときからこの女は使えると思った。だから態々ストレスで精神が崩壊しないように配慮し、あの杖を渡し、俺に心を許すように仕向けた。効果は……拔群だったさ」

「お前……!」

「ああ、勘違いをしてもらっては困る。シオンは自ら俺の為に動いた。まさか、精霊王から代償を与えられるとは思わなかったがな」

ランザは笑みを作り、クックククと声を漏らした。それが偽りだとしても、ギドルのは本物だと感じられた。

「ランザ……俺は……!」

「ここで俺を止めるか？ 止めておけ、そんな事をすればシオンの命は無い」

「何だと!？」

「昼間、俺はシオンに俺のマナを込めた術を埋め込めた。俺が命じる、或いは俺の命が消えれば発動する。ふっ、体内からじわじわと腐ってゆく様を見たいのなら、俺を止めてみるが良い」

「お前は……人間じゃない！」

「そうさ……俺は人間じゃない。人間じゃ……ないんだ」

ランザはそう吐き捨て、ギドルを睨みつけた。

この時、ランザとギルドがいるテラスの入り口に、紅い影が隠れていたことを、彼らは知らなかった。

不審（前書き）

ミラ復活までのオリジナル編は、ランザを中心としたランザの為の物語であり、原キャラはほぼ出ません。出たとしても恐らく名前だけだと思っています。

設定が矛盾していたり、ややこしかったりするかもしれませんが、どうか温かい目で見守ってください。

不審

ランザとギドルの会話の翌日。国中は歓喜で溢れていた。

ギドルの一人娘シオンが、なんと歩けるようになっていたのだ。それだけではなく、精霊王の代償を受ける前の身体に戻っていた。これを聞いた民達は大喜び。その日の朝からお祭り騒ぎだった。ギドルもエレンも、更にはヴァレンも大泣きしながら喜び、しまいには国中で祝福しようとまで至った。

「……………」

「……………」

ただ二人、ランザとカレンは黙っており、皆の喜びようを眺めていた。

しかし、ランザとカレンの間が何時もより離れていた。



暫しの間喜びに浸っていたギドルであったが、ランザを広間に呼び出した。ランザは広間に向かい、ギドルの前に立った。広間にはギドルとランザしかない。

「何か用か？」

「ランザ……シオンが回復したのは承知しているだろう？」

「ああ」

「……何をした？」

「……」

ギドルはランザが何かしたと確信している。昨日の今日でもあるので、ランザが関わっている事はほぼ間違いない。

「答えろ。何をした？」

「さあ？ もしかしたら足りなくなったマナが補給されたのかもな？」

「……」

「……予想外だよ。まさか術を埋め込んだらシオンのマナが回復するなんてな」

「………お前は、シオンをどう思っている？」

「思っている？ 感情を消された俺に聞くのか？」

「消される前はどう思っていた？」

「…………さあな。もう忘れた」

それだけ言うとなンザは広間の出口に歩き出した。

「待て。……何時奪いに行くつもりだ？」

「すぐにだ」

「一人でか？」

「まさか。カレンを連れて行くさ。便利な駒だからな」

「……………」

それを最後にランザは広間から出て行った。

一人残ったギドルは暫くそこから動かず、ただ何かを考えていた。



ランザはカレンの部屋へ向かうために廊下を歩いていた。するといきなり足を止め、後ろへ手を突き出した。

「ぎゃうっ！」

「……何をしている」

ランザが放ったデコピンは後ろに現れたシオンの額にヒットし、シオンは可愛らしい声を上げた。

「つう……レディに向かって何をするか！」

「レディだと言うのなら、ストーカー紛いな事をするな」

「三年ぶりに動けるようになったのだぞ！？ 身体が鈍っていてはいかんからな！」

「……そういや、そういう専門だったよな」

シオンは一国の姫君でありながら、武の实力は騎士団でも屈指の存在である。

しかし騎士のように正面から、一騎当千の如く敵を迎え撃つのではなく、陰に潜み、隙あらばそこを突き、身体中に仕込んだありとあらゆる武器、精霊術で作りに上げた武器を使用し敵を錯乱させ、敵を討つ。

しかし時には敵の前に立ち、正々堂々と敵を迎え撃つときもある。

「それにこの服もサイズが合っているか確かめる必要があったしな」

シオンはランザに見せるようにしてその場でくるりと回る。

シオンの格好は姫様が着る様な華やかな格好ではなく、

上下一体となった服で、上半身は肩からパツクリと無く、二の腕から手首までの袖をベルトで固定している。下半身はズボンのようなスカートになっており、横から見ると美しい美脚が丸見えである。腰の辺りに三つのベルトを装飾品として取り付けている。下はどうやら白いホットパンツを履いているようで、同様にして上も白いインナーを着ているようだ。更に白でロングのヒールブーツを履いている。

どこのピザ女だと、知っている人はツッコみたいだろうが、生憎と、ここにいるのは目の見えないランザしかない。見えたとしても感情の無いランザにとってどうでも良いことである。

「どうだ、このボディライン。スラっとしてこの腰の括れ、ちょうど良い大きさの乳。完璧であろう?」

「あろう? と言われてもな……俺は目が見えんと知って――」

「見るんじゃない、感じろ」

「無茶言うな」

ランザは歩き出し、シオンも慌ててランザの横を歩いた。

「何処へ行く?」

「カレンを呼びに良く。これから精霊王の場所へ行く」

「何故だ？」

「……お前は、精霊王を崇めるか？」

ランザはギドルにした質問をシオンにした。一国の姫であるならば、当然崇めると答えるだろうが、シオンは違った。

「まさか。知ったことではない」

「だと言うと思ったよ。俺はこれから精霊王から力を奪いに良く」

「……殺すのか？」

「場合によればだが、十中八九そうなるだろう」

「『滅天刀』は返してもらったのか？」

「お前が返してくれるんだろう？」

「む……」

シオンはランザの言っている事が一瞬だけ理解出来なかったが、すぐに理解してニヤリと笑った。

「高いぞ？」

「料理を作ってやる」

「任せろ」

シオンは音も無く消えた。と言うかランザの料理とは、ずばり魔物料理ではないだろうか。

やがてランザはカレンの部屋に辿り着き、軽くノックをした。

「カレン、いるか？」

声を掛けても返事が無いので、どこかに言っているのだろうかと探しに行こうとした時、ゆっくりと扉が開いた。

「何だ、いたのか。これから覚悟しないといけないピクニックに出かけるぞ。準備しろ」

「……………」

「…………カレン？」

「…………ランザ…………私は…………ランザの仲間よね？」

「何だ、いきなり」

カレンは顔を俯き、小さな声でランザに尋ねた。ランザはいきなりどうしたと聞くが、カレンは何も言わない。

「……パートナー……よね？」

「……お前からなると言い出したんだろう？　で、俺はそれで良いと言ったはずだが？」

「そう……よね……」

「変な奴だな。まあ良い、早く準備しろ」

「何処へ向かうの？」

「王道山」



王道山へ向かうにはランベルの外へ向かわなければならない。故にランザとカレンは街の出口に立っていた。

「行かないの？」

「まあ、待て。もう一人付き添いが来る」

そう言われて待ち続けて数分。邸のほうから“三人”の女性がやってきた。

シオン、ヴァレン、ティアの三人だった。ティアは相変わらずメイド服で、ヴァレンに至っては騎士甲冑ではなく、黒のインナーに灰色のジャケット、灰色のズボンに黒のブーツといった格好だった。

「……ん」

シオンはランザに『滅天刀』を渡し、不貞腐れた表情で腕を組んだ。

「……何故二人がここにいる？」

ランザはシオンに尋ねたが、シオンは不貞腐れたまま何も言わなかった。すると代わりにティアが答えた。

「シオン様が宝物庫から出て来るところを捕まえ、事情を聞き出しました。私はシオン様の専属従者ですので、シオン様のお傍に控えていなくてはなりません」

「私は陛下のご命令だ。貴様が精霊王を殺さないように見張っているとな」

「で、歩く音から察するに甲冑を着ていないようだが？」

「騎士甲冑では邪魔で動きづらいからだ」

なら最初から着るなどと言わなかったが、ランザとカレンはそう思っていた。

ランザを頭を抱え、大きな溜息を吐いた。ギドルが精霊王の場所へ行くことを許してくれたのは良いが、まさかヴァレンを付けてくるとは、新たな大きな問題が出来てしまった。

「お前は精霊王を守るのか？」

「陛下のご命令だからな」

「おまえ自身はどうなんだ？」

「………」

ヴァレンは答えなかった。それは己の心のどこかで精霊王の命がどうなっても良いと思っているからだ。自分に力を与え、そのおかげで周りから迫害され、ギドルに拾われるまで何度殺されなかったことか。

「……ちょうど良い。ここで俺の目的をはっきりさせておこう」

ランザは一息つき、五人を見渡した。

「俺は、俺の使命の為に力を得る。その為には精霊王の力が必要だ。だがこの王は王家の血筋にしか与えない。だから俺は力づくで奪う。それが、精霊王を殺す事だとしても」

ランザは面と向かって皆にそう言った。

「お前らがそれを嫌い、阻止しようというのなら止めはしない。だが、そうなれば俺は容赦はしない」

「貴方が私に勝てるっても？」

ティアが目を細め、ランザを睨む。その手にはナイフが握られていた。

「勝てるさ。こうすればな」

「っ……」

ランザはシオンを抱き寄せ、喉下に爪を立てる。ティアは眉をピクリと動かし、ナイフをゆっくりと収めた。

「カレンもだ」

「え……?」

「これから俺はこの国を敵にまわす事になるかもしれない。そうなれば、お前にも被害が及ぶかもしれない。それが嫌なのなら、ここに残るのも良し、こいつらと共に止めるのも良し。好きなほうを選べ」

「……………」

カレンは迷った。本当にランザを信じていいのか。目を上げれば自分を氣遣ってくれるランザがいるが、果たしてそれが本当の彼なのか。

昨日の晩、カレンはランザとギドルの会話を聞いてしまっていた。少し酔った勢いでランザを探しに出たのだが、ギドルと話しているところに遭遇してしまい、話を聞いている内に酔いも醒め、途端に大きな不安が浮かんで来てしまった。

「……………取り合えず、一緒に行くわ」

「そうか」

まだ分からない。ランザの本当の気持ち。自分を捨て駒扱いにしているのか、それとも何か訳があってそう言ったのか。確かめるためにも、カレンはついに行く事にした。

「シオン、お前は——」

「聞くか？ それを」

「……愚問だったな」

ランザは方向を変え、街の門を潜った。シオンもそれに続き、テ
イアもシオンの後ろにつき、カレンとヴァレンだけがそこに立ち止
まっただけだった。

「…………ランザ…………お前は…………昔から…………」

「…………ヴァレン？」

「…………何でもありません。行きましょう」

「あ、ええ…………」

二人も歩き出し、皆を追いかけた。



五人は山道を駆け上り、目的の王道山に入る。そこに巣くう魔物
たちは皆凶暴で、一瞬の気の緩みも許されない。

「掌底破！」

ランザの一撃がスノウドラゴンの腹にめり込む。ドラゴンは大きく吹き飛び、また新たなドラゴンがランザに牙を向ける。

「刹破掌！」

しかしドラゴンが向かうよりも先にランザが踏み出し、間合いを一瞬で詰め、腹に打撃を叩き込む。

「魔神剣・剛牙！」

ヴァレンはドラゴンの群れに向かって通常の魔神剣よりも強烈な斬撃を放つ。それは群れの中心で爆発し、周囲のドラゴンにダメージを与える。

「ふっ！」

ティアはウオントに向かって一度に十本のナイフを投げつける。コレは彼女の精霊術によって具現化された光のナイフであり、彼女が疲れない限り数は無限にある。その時には本物のナイフを使用する。

サンダーボルト
「神雷招！」

雷を纏ったナイフを六本、放射線状に投げ、激しい落雷を落とし、巻き込まれたウォントは雷に撃たれ、黒こげになる。

「火炎連脚！」

ドラゴンの懐に入ったシオンが、黒い炎を纏った足で蹴りの連撃を与える。

「魔月閃！」

腰から短刀を二本抜き取り、一閃めで黒い満月を出現させ、もう一閃で敵ごと満月を両断する。

『ガアアアア！！』

シオンの後ろからドラゴンが口を開き、シオンの首下に噛み付いた。

しかし、その瞬間シオンの身体は黒い煙となって消え、ドラゴンの頭上に現れた。

「火車落！」

普通の剣の半分ほどの剣を握り締め、黒い炎を纏い回転しながら下に落ち、ドラゴンの首を斬りおとす。

「業火の檻に焼かれて消えろ！ イグニートプリズン！」

カレンの精霊術で出現した巨大な炎の檻が魔物たちを包み込み、全てを焼き尽くす。

「ヴァレン！」

「了解した！」

カレンとヴァレンは共鳴し、残りの敵に向かって共鳴技を放つ。

「熱風の渦——」

「喰らいなさい！」

「熱破旋風陣！」

ヴァレンの竜巻の如く切り上げる断空剣と、カレンのイグニートプリズンが組み合わさり、熱風の竜巻となって敵を焼き切る。

「火傷したくなければ近付かないでちょうだい！」

「火傷ですめば良いがな」

カッコ良く決め台詞も吐き、戦闘は終了した。

「ふむ……身体は鈍っていないようだな」

シオンは先程の戦闘で、今の自分の力を実感した。

「お見事です、シオン様」

「ふん、これしきどうって事ない。しかし……ランザ！」

「ん？」

シオンはランザに指を向けて腰に手を当てる。

「何故私と共鳴しなかった！ 私とお前のコンビならばこの程度の雑兵、一瞬でケリが着いただろう！」

先程の戦闘では、共鳴をしたのはカレンとヴァレンだけであった。シオンは自分と共鳴してくれなかった事に腹を立てているようだ。

「何故って……終始ティアがお前と共鳴していて、したくても出来なかったんだが？」

「…………ティア!？」

「申し訳ありません。ですが、私はランザを仲間とは思っておりません。そのような人間にシオン様と共鳴させる訳にはゆきません」

ティアはランザを睨みながらそう口にした。

「ティア! アレは私が自分から――」

「シオン様がどうであれ、あのような危険な目に遭わせたこと自体許せません」

「…………ふん、どうだって良い」

ランザは歩き出し、先に進む。シオンはその後姿を見て何かを言いそうになったがグッと堪え、ランザの後を追いかけた。

「どうしてシオン様はあのような男に……」

ティアは悲しそうで、悔しそうな表情をして、唇を噛んだ。手はスカートを握り締め、目には薄っすらと涙が流れていた。

「あの男にはもう……隣に立つべき人がいるのに……！」

「え……？」

ティアの呟きにカレンが反応した。

——隣に立つべき人……？ それって一体……。

ふと、頭にある人物が過ぎった。今はル・ロンドで足の治療をしているであろう女性……ミラⅡマクスウェル。ハ・ミルでランザと少しだけ話し、ガンダラ要塞ではランザが命の危険を冒してまで助け出した女性。

やはり、ランザとミラの間には何かあるのだろうか。

——でも、ミラはランザのことを知らないようだったし……。

カレンはシャル邸で宿泊したとき、ミラに一度ランザのことを聞いている。そして返ってきた言葉は知らないだった。

しかし、その時のミラの様子は何処かおかしかった。何か迷っているような、戸惑っているような、そんな感じだった。

「……行こう。あまりシオン様とランザを二人きりにするのは不味い」

「……はい」

ヴァレンとティアは二人の後を追いかけて、カレンだけが残された。

何れ知るときが来るのだろうか。ランザの事を全て。それとも、その前に捨てられてしまうのだろうか。

カレンはどうしようもない不安に怯え、身体を震わせた。カレンは思考を切り換え、今は先に進むことに専念した。

———そう言えば、ミラのファミリーネームってマクスウェルよね……？ 精霊の主と同じって……何か関係があるのかしら？ それにランザのファミリーネームって聞いた事無いわね……。そもそもランザって本名なのかしら？

ふと、そう思い、何時か聞いてみようと思うカレンだった。

イヴとミラ その1（前書き）

えー、イヴとミラの過去話を書いていきたいと思います。

赤子の頃からミラとの別れのまでの順で書いていくつもりです。

今回は一番最初ですから、もの凄く短く、もの凄くつまらない出来になってしまいましたが、どうかお許しください。

イヴとミラ その1

これは、イヴ・マクスウェルとミラⅡマクスウェルの過ごした過去の物語である。



ウンディーネが赤ん坊を拾ってきた事は、他の四大精霊を驚かせ、それがやがてニ・アケリア全域に知れ渡り、大きな騒ぎとなった。

まず、ウンディーネが考えた事は、この赤ん坊の名前である。そこでウンディーネは他の四大たちに何か良い名前はないかと尋ねてみた。

イフリートの場合。

「ウム……黒髪で紅目……おお！ ダイゴロウはどうだ!？」

「黒髪紅目は何処に行ったのですか？」

シルフの場合。

「ガキンちよで良いんじゃない……ご、ごめん！　ちゃんと考えるからタイダルウェーブは止して！」

ノームの場合。

「ん……ポチはどうでし？　あとはクロ、タマ、ポンポン……」

「犬猫ではないのですよ？　　というかここにはまともな思考を持った精霊はいないのですか？」

結局、ウンディーネが一晩考え、イヴという名前に決定した。



次に考えたのがイヴの世話である。ミラは自分達が力で全てを補っているので問題は無い。しかしそれはマクスウェルの命で行っている事であり、こういった特別な事を許し無く行うことは出来ない。だからウンディーネは考えた。自分達で世話をするか、村の者に任せるか。

しかし、目の前の現状に後者の考えは消えうせた。

「あーうー！」

「うーうー！」

ミラがイヴに乘っかり、キャツキヤと笑っているのだ。乗られているイヴも笑ってミラとじゃれていた。

「ふふつ、随分と仲が良いんですね……」

ウンディーネは微笑み、自分達で世話をする事に決めた。

「あー！」

「ぶう……！」

「ちょっと！？ イヴが窒息しかけてるよ！？」

「見てないで助けなさい！」



世話をするに決めたからには人間の赤ん坊の育て方を知っておかなくてはならない。

「シルフ、何か知っていますか？」

「んゝ……確か母乳ってのを飲ますんじゃないかったっけ？」

「母乳……ですか？」

「何でし？ それは？」

「ウム、確か母から搾り取れるものだと聞いた事があるぞ」

と、一斉にウンディーネを見る三体。

「え？ 私ですか？」

「ウンディーネがイヴの母親じゃないの？ 人間でいえば女にあたるんだし」

「しかし、母乳など見たことも……」

「搾り取れるのだったら搾ってみたらどうでし？」

「おお、それがいいな。どれ——」

「な、何をするんですか!？」

イフリートがウンディーネの胸に手を触れようとし、ウンディーネがイフリートの顔を殴り飛ばした。

精霊といえど、人間と同じく恥じらいと言うものはあるようだ。

「私が村に下りて何かあるか聞いてきます！」

そういうと、ウンディーネはイヴを連れて村へと飛んでいった。

「バカだなくイフリート。母乳ってのは子供を生んだ人間の女にしかでないんだぞ」

「そ、それを早く言ってくれ……」

結局、ちょうど子供を生んだ女性がいたので、その女性に母乳を分けてもらった。

その時、ウンディーネは母乳の与え方が直接吸わすことに驚き、蒼い肌を薄っすらと紅く染めた。



続いて問題になったのは、イヴの排便である。赤ん坊が一人でトイレに行くわけがなく、四大たちが処理しないといけなかった。

「びえええええっ!?!」

イヴが便を出し、気持ち悪い感触に泣き出し、四大達は初の排便処理に挑戦した。

「ぬうんっ!？」

「く、臭いっ!!」

「き、キツイでしゅっ!!」

三体の四大は鼻を押さえ、社の外へ出て行った。というかイフリートに鼻はあるのか聞きたい。

しかし、ウンディーネはグツと堪え、イヴのお尻を拭き、水を操りおしめを洗う。そして新しいおしめに取替え、イヴを抱き上げる。

「さあ、終わりましたよ」

「きゃっ!」

「ふふっ、気持ちですか？ 良かったわ」

イヴは喜び、ウンディーネの顔を触ったりした。

「まったく、彼らは当てにできませんね」

外で山の空気を吸っている三体に向かってスプラッシュを喰らわせたウンディーネであった。

「ぬおおおおおっ!! 火が! 火がああああっ!!」

火の精霊であるイフリートには効果絶大だったようだ。



夜、イヴはぐっすりと眠りについていた。その横ではミラがイヴの頬をツンツンと指を突いていた。

「ミラ、イヴが起きてしまいますよ」

「まーうー」

ミラはウンディーネに抱きかかえられ、イヴから離された。しかしミラは必死にイヴを触ろうと手を伸ばしていた。

「あらあら、この子ったら……。それほどイヴを気に入りましたか?」

しかしここでミラを離せば絶対にイヴを起こしてしまう。ここは心を鬼にして……までもいなくても、ミラには諦めてもらう事にした。

「それにしても、子育てというのはこんなにも大変で、とても楽しいものなのですね」

ウンディーネは真の母のようにイヴに微笑みかけ、ミラを連れて夜の散歩へと出かけた。

そしてその間、イヴが夜泣きをし、イフリート達が慌てだし、ウンディーネが戻ってくるまでの間、悪戦苦闘を繰り返したとき。

因果応報（前書き）

お待たせしました。

テストも終わり、更新を再開することがやっとできました。

今回は所謂説明会みたいなものです。

しかし……もうそろそろバイトを始めようと思っているのですが、
そうなれば書いている時間が無い……。どうしたものか。

因果応報

日もすっかり落ち、明るい月が辺りを照らす。ランザたちは偶然見つけた洞穴で野宿する事に決めた。

しかし、ここで少々問題が発生した。ランザが一人では動けなくなってしまったのだ。別に疲れて動けなくなったのではない。辺り一帯にマナの反応無くなってしまったのだ。マナを頼りに世界を見るランザにとって、それは由々しき事態だった。

「くそ……何も見えん」

「まさか、ここまで広がっているとはな」

シオンが辺りを見渡しながら腕を組んだ。

「ねえ、一体どうしたの？」

ただ一人、カレンだけ状況が分かっていなかった。否、分かっている“フリ”をしている。カレンはランザとギドルの会話を立ち聞きしていたので、ランザの眼の事は知っている。だがそれを知れるわけにはいかず、故にカレンは知らないフリをした。

「……言っても良いのか？」

「まあ、良いだろう。どうせその内知る事だしな」

ランザの承諾を得て、シオンはカレンの隣に腰を下ろした。

「ランザの眼はな……人間の眼じゃない」

「人間の……？」

「ああ。これから向かう精霊王の眼だ」

「どうやって、手に入れたの？」

「なに、簡単な事だ。奴のマナを自身の身体に埋め込んだんだ」

「だがそこは腐っても王。途中で邪魔されて視力を失い、ゲート霊力野蝕まれ精霊術は諸刃の剣となってしまった。そしてシオンはマナを喰われ続け、身体を動かせなくなったが、俺のプレゼントのお蔭で万事解決」

「うんうん、私は嬉しいぞ！」

「「……………」」

ヴァレンとティアはランザを睨みつけたが、ランザは何事も無くサングラスを取り外し、光を失った紅い瞳を見せた。そして何事も無く説明を続けた。

「この紅い瞳は精霊王の眼の証。本来ならば、マナの流れを見極め、万物を手を取る事が出来る。だが俺とヴァレンのは不完全、失敗作。俺はマナを見る事しか出来ず、ヴァレンは稀にしか見れない」

ヴァレンはランザの口から自分の名前が出た瞬間ランザを睨み、すぐに眼を隠した。

「なら、ギドル様とティアさんも？」

「ギドル様は王家の者ですので、精霊王から受け継いでいます。ですが、人間であるが故に、そこまでの力はありませんが。私のはただの眼です。私はこの国の出身者ではありませんから」

ランベル出身者で、紅い瞳は特別だという事らしい。

「王家……じゃあシオンも？」

カレンは王家という言葉から、シオンも受け継いでいると思い、本人に尋ねたが、シオンは首を横に振った。

「それなんだが……何かを受け継いでいる筈なんだが、それが何か分からないんだ」

「そうなの？」

「影の薄さじゃないのかって冗談だ」

「シオンは気配を遮断できるのだ」

「シオン様の存在はこの世を凌駕します」

ランザがまたつまらない事を言い出し、瞬時にしてヴァレンとティアがランザの首に己の獲物を突き付けた。というかティアの言っている事は分からない。

「……アレ？　ちょっと待って。ヴァレンも王家なの？」

「いえ……私は少々訳ありでして……」

「あ、ごめんなさい……」

カレンはヴァレンの表情から聞いてはいけない事だったと察した。本当はあの時に聞いているのだが、ここで聞いておかないと怪しまれると思い尋ねたのだが、ヴァレンには辛い過去を思い出させてしまった。

「で、話を戻すが……ランザは世界を構成するマナを形にして見る。例えば、私達人間を見る時は私達から発するマナが人の形をする。

それを見てランザはそれが人であるかどうかを見るのだ。だがここランベルの周りは何故かマナが無い地帯が存在する。しかもそこではランザの眼ではマナを視認する事ができない。精霊術は使えるのだがな。だからマナを頼りにしているランザにとって、ここは最悪の場所なんだ」

「そういうことだ」

——あ、だからあの時、洞窟に入る際に手を引っ張ってって言ったのね。

「だから今は気配でしか分からない。だから背中を刃物で突こうとしても分かるんだぞ？」

「チッ……」

ランザの後ろでは何時の間にか手にナイフを持ったティアが、ランザの背中にナイフを突き立てようとしていた。流石はランザ、伊達に生きていない。

「……ねえ、この際だから色々教えて？ 何か私だけ知らなくて仲間はずれな気がするの」

「……そうですね。食事ついでお話ししましょうか」

ティアが大きな鞆から調理道具を取り出し、食事の準備に取り掛かった。



さて、料理に取り掛かったのはカレン、シオン、ティアの三人である。ランザは目が見えないから分かるが、女性陣のなかでただ一人、ヴァレンだけはただ火の番をしていた。

「……ヴァレン」

「……気安く呼ぶな」

「……料理、出来ないのか？」

「……」

「黙って剣を向けなくてくれ。うっかり刺さってしまいそうだ」

どうやらヴァレンは料理が出来ないようだ。ランザをもの凄いい形で睨みつけ、剣を首元に突き付けた。

一方、料理組では……。

「ああ……！ シオン様、包丁を扱う時は手を猫の手に……！」

「むう……私はそこまで子供じゃないぞ。それに刃物は私の得意分野でもあるんだぞ？」

「で、ですが……」

「ま、まあまあ。心配しないでも大丈夫ですって」

「しかし！ もし包丁でシオン様の白く美しく可愛らしいお手が傷付いてしまったら……！」

「付かないですって」

「あ、切れた」

「何ですってええええっ！？ 消毒！ 治癒術！」

「お、落ち着け！ 切れたのは食材だ！」

「…………ティアって、あんな性格だったか？」

「知らん……」

向こうも向こうで大変な用である。こんなで料理なんて出来るのだろうか。ランザとヴァレンはただただ、それを考えていた。



半刻過ぎ程経ち、やっとこさ料理が完成した。メニューは定番マ
ーボーカレー。一体コレを作り上げるのにどれほどの苦難があつた
のか、彼女達の姿を見れば分かる。が、彼女達の名誉の為に黙って
おこう。

「む……中々美味いな」

「ほ、本当か？　嘘じゃないな？」

「俺は食事に関しては嘘は言わない」

ランザの賞賛にシオンは顔を赤らめて喜び、その様子をティアと
ヴァレンは羨ましそ——恨めしそうにランザを睨む。カレンはな
にやら複雑な表情を浮かべていた。

「……さて、先ずは何から説明したものか」

「じゃあ……精霊王について、お願い」

「ん……」

ランザはカレーを一口食い、口を開いた。

「この世界、リーゼ・マクシアは精霊の主マクスウェルが作り出したとされるが、実は違う」

「え？」

ランザはいきなりこの世界の成り立ちを否定した。驚くカレンを余所に、ランザは言葉を進めた。

「精霊の主マクスウェルと精霊王アルメティウス……この二大精霊が世界を創造した」

「嘘……」

「そしてマクスウェルは世界を見守り、世界の全てを守っている。だが、アルメティウスは違う。己がなすべき事を放棄し、自分が住み易い土地に根付き、己の欲のみを満たす」

それを聞いたティアが思わずナイフを投げつけようとしたが、シオンによって止められた。

ランザが今口にいるのは、ランベルに対しての暴言、侮辱に値するのだから。

「自らが作り出した世界ならば何故自らが守らない？ 力があるのに何もしない？ 俺はそんな奴を王とは認めない」

「マクスウェル派が……我らの精霊を侮辱しますか！」

ティアが口にした言葉……マクスウェル派。察するにランザは精霊の主マクスウェルを信仰、信じているようだ。

ここランベルではどうやらマクスウェルとアルメティウスが対立している模様だ。

「事実、アルメティウスは何もしていない」

「我らを守ってくださいます！」

「ヴァレンに力を与えた事は？ 熱い信者どもに迫害される事は目に見えているのに？」

「っ……」

「それは彼女に試練をお与えになっているのでしよう」

「何のために？」

「それは……」

ティアは言葉に詰まる。彼女にも何故ヴァレンに力を授けたのか分からない。何か理由がある筈だと思っではいるが、それだけだ。

「アルメティウスの話はこれで終わりだ。次は何が良い？」

ランザはカレーを口に運びながらカレンに尋ねた。カレンは少し悩んだ末にこう答えた。

「じゃあ……どうしてランザはこの国に嫌われているの？」

「……よりによってそれを聞くか？」

「ごめんなさい、今のナシで……」

「構わんだろう。私はなんとも思わない」

カレンが取り下げようとしたとき、シオンが横からそれを遮った。ランザは少し考え、口を開いた。

「……俺は嘗て、モン高原で倒れていた。理由は……言えないが。そこで偶々シャン・ドウに出向いていたヴァレンに助けられ、ギドルに世話になった。そこでシオンやティアと出会い、やがて国の一員となってしまった」

「なってしまった……？」

「ああ。俺は……その時からこの国の……アルメティウスの力を手に入れようとしていたからな。一員になどなるつもりは無かった」

カレーを口に運び、コップに入れられた水を探す。が、中々見つ

けられず、隣に座っているシオンに取ってもらった。

「その時はまだ感情があったからな。確か少なからず罪悪感を感じていた筈だ」

「嘘をつけ……」

ヴァレンが横でそう呟く。

「まあ、視力はその時から無かったがな。おかげで今もどんな顔なのか分からない」

「絶対惚れる」

「惚れさせません」

「見られたくない」

シオン、ティア、ヴァレンがすかさず応答する。一部おかしい人がいたが、あえて無視する。

「でだ、俺はシオンに頼み、アルメティウスの場所へと案内してもらった」

「精霊王の場所へは、王族のマナが必要だからな」

「そして俺は奴の目の前に立ち、力を奪おうと戦った。その頃の俺は今ほど力は無かった。だからシオンの実力のおかげで奴を瀕死の状態まで追い込み、後は力を全て奪うだけだった」

「だが、アレは王といわれるほどの精霊だ。そう簡単にはさせてくれなかった。ランザには諸刃の剣という呪いを、私には死という呪いを与えた」

ランザは立て掛けていた滅天刀を取り、カレンに見せた。

「これを抜くと俺だけではなく、シオンにも影響を及ぼす。恐らく、いや絶対に先に死ぬのはシオンだ」

「そ、そんな危険なものを何で――」

何でミラの為に抜いたの？　そう言いかけたが、咄嗟に押さえ込み、口を閉じた。ランザは首を傾げたが、説明を続けた。

「そして俺はシオンとアルメティウス――国の宝と真王を穢し、傷つけた事により、国中から非難、怒り、恨み、負の感情を向けられ、ヴァレンやティアの態度も変わり、今に至るというわけだ」

カレンは何も言えない。何か弁解してあげたいと思っていたが、全面的にランザが悪く、弁解しようが無いのだ。

そして、それと同時に、自分が駒だといわれた事を思い出し、ラ
ンザの過去を聞いてますます不安が大きくなった。

「他は？」

「……いいえ、無い……わ」

「……そうか。ならとつとと食事を済ませよう。これは冗談抜きで
美味い」

「っ、そうだろう、そうだろう！　ずっとお母様に料理の話聞いて
いたからな、これで何時でも結婚できるぞ？」

「だが断る。それ以前にお前は作る側でなく、食べる側だろう」

「そこはほれ……私がちよちよいと説得すれば――」

「「なりません！」」

ギドルと同じ台詞を吐く所から、完全に親子だという事が分かる。
それと、先程までの険悪な雰囲気は少しばかり和らいでいた。



食事も済み、明日に備えて寝る事にした。洞穴は十分な広さは無
くもないので、荷物や岩などで仕切りを作り、寢床を作り上げた。

焚火を中心に、仕切り、ヴァレン、シオン、ティア、カレン、仕切り、ランザという具合に並び、火の番はランザからすることになった。

「……………」

何も移さない赤い瞳で寝ている彼女らの場所を見つめ、ふと、もし自分に感情があったら、視力が消えなければ、一体彼女たちとどんな接し方をしているだろうかと考えたが、くだらない事だと至り、考えを投げ捨てた。

そんなものがあってどうする。使命を果たすためには邪魔な存在。寧ろ今のほうが都合が良い。捨てれるときに切り捨て、どんな状況だろうと我を失わない。相手の顔が分からなければ変に意識する事もない。なんと便利な事か。

「…………ランザ？」

「カレン…………起こしたか？」

「いいえ…………寝付けないだけ」

カレンは起き上がり、仕切りを越えてランザの隣に座った。肩が触れそうな距離だった。

「どうした？ 寒いのか？」

「……うん。……それもだけど……」

「……?」

「ランザが何処かに行っちゃいそうで……」

「っ……」

カレンの消えそうな声に、僅かに反応する。が、すぐに元に戻る。

「何処にも行きやしないさ。お前は俺のパートナーなんだろう?」

「……そうよね」

「……」

「……」

静寂が二人を包み込む。聞こえるのは火の音だけ。

「……ねえ」

暫くした頃、唐突にカレンから言葉が出た。

「ん？」

「ランザには……好きな人とか、いる？」

「……それを俺に聞くか？」

ランザには感情が無い。故に愛だの恋だなんて感情は持ち合わせていない。

「昔はあったんでしょう？　その時に好きな人とかいなかったの？」

「……………」

ランザは見えないはずの眼で空を見上げる。空は満天の星空だった。

「……今となってはまだそうなのかは分からない」

「うん……」

「確かに、俺には一生を捧げて良いと思っていた相手がいた」

「うん……」

「その時の感情は……もう思い出せない。ただそれが愛だったのは

覚えている」

「うん……」

語るランザの顔は、やはり無表情だった。だが場の雰囲気の為か、カレンには悲しんでいるように見えてたまらなかった。だからだろうか。カレンはランザの腕に自分の腕を回し、頭をランザの肩に乗せた。

「カレン？」

「何でもない……。ただ少し……。暖めたいだけ」

何をとは言わない。言うのは恥ずかしいからだろう。ランザの心を暖めたいなんて言葉、面と向かっていえるはずが無い。

「……仕方が無いな。俺のコートを貸してやるから……」

「もう、空気を読みなさいよ……」

「……？ 寒いんじゃないのか？」

「寒いわよ……」

「……？」

——もし許されるのなら、私はランザと一緒にいたい。例えばランザが誰かを愛しようとして、私はランザとこうしていたい。私はランザが……大好き、だから。

カレンはそのまま眠りに落ちた。ランザは首を傾げつつもそのままにし、結局ランザがずっと火の番をしていた。

翌朝、起きたシオンにカレンが迫られたのは言うまでもない。



「よし、出発するぞ」

翌朝、朝食も終え、いよいよ精霊王の居場所に向かおうとした時に、それは起きた。

「ん？ アレは……陛下のシルフモドキ？」

ヴァレンが上空を見上げると、黒い布を着せられている白い鳥が空を舞っていた。ヴァレンが腕を伸ばすと、シルフモドキはその腕に降り立ち、足を差し出した。その足には手紙が巻き付けられていた。

「……これは!？」

「……どうした？」

「………」

ヴァレンは黙ってランザに差し出した。受け取ったランザはその手紙を読み、溜息を吐いた。

「どうしたの？」

横からカレンが尋ね、ランザは答えた。

「国王の勅令で昨夜、討伐軍が結成された」

「討伐？ 精霊王の？」

「いや違う————俺のだ」

我が国ランベルと、我らが真王・アルメティウスを脅かさんとする不届き者を討伐せよ。その者は我、ギドル・オラ・ランベルと我が妻、エレン・メル・ランベルの愛娘と、その従者二名と我が民を一名、人質に取っている。この罪人を如何なる手を持ってでも打ち倒せ。

そう、手紙には書かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0269x/>

テイルズオブエクシリア “もう一人のマクスウェル”

2011年12月17日14時52分発行